

城下・原田遺跡

1990年3月

山梨県教育委員会

城下・原田遺跡

1990年3月

山梨県教育委員会

序

本報告書は、北巨摩郡大泉村谷戸地内にある平安時代の集落址を中心とした城下遺跡の発掘調査結果を取りまとめたものであります。

この調査は1981年に県営圃場整備事業に先立って山梨県教育委員会が実施いたしました。本遺跡の北に隣接して、甲斐源氏の祖と言われております逸見清光の居城とされる谷戸城があり、南には80年度に当教育委員会が調査して現在では国指定史跡となっております金生遺跡があります。このように大泉村は歴史環境に恵まれた地域であります。

平安時代の集落研究は圃場整備事業にかかわる調査で急速に進んでおりますが、既に報告いたしております寺所遺跡とともに本調査は集落のほぼ全容を明らかにしたと言えますので、その意義は今後の平安時代研究に大いに役立つものと考えております。出土遺物も当時本県ではじめて石帶の巡方と丸輪が溝から出土しております。また、本遺跡からは造構こそ検出されなかったものの12世紀の中国製の青磁破片と常滑の破片が出土しております。この発見は、谷戸城との関係は不明とは言え、甲斐の中世開幕の原動力となった甲斐源氏とこの八ヶ岳南麓地域の関係を暗示させるものがありまして、注目されるものと考えております。本報告書が北巨摩地域の平安時代から中世初頭研究の一助となれば幸甚に存じます。

末筆ながら、種々のご協力を戴いた関係機関各位並びに直接調査と整理に当たられた多くの方々に厚く御礼を申し上げます。

1990年3月

山梨県埋蔵文化財センター

所長 磯貝正義

例　　言

1. 本報告書は県営圃場整備に伴い、1980年に山梨県教育委員会が実施した城下遺跡（北巨摩郡大泉村谷戸地内）及び原田遺跡（同郡同村西井出地内）の発掘調査報告である。
2. 発掘調査は山梨県農務部より山梨県教育委員会が委託を受けて実施した。
3. 発掘調査は山梨県教育委員会文化課の新津健・八巻与志夫が担当し、整理作業及び報告書執筆は八巻が行った。
4. 遺構の撮影は新津健が、遺物の撮影は塙原明生（日本写真家協会会員）が行った。
5. 報告書にかかる出土遺物及び図面写真は一括して山梨県埋蔵文化財センターに保管してある。
6. 遺物の実測及びトレース作業は弦間千鶴・柏木まつ江・野中はるみ・後藤良美・内藤真千子が行った。
7. 発掘調査従事したのは次の方々である。
山下孝司・畠大輔・日向千恵・代長美代子・島本弥生・平井仁志・藤原芳郎・浅川晃暉・
浅川英三・進藤久・浅川洋子・浅川美代・中島ねのえ・浅川もとじ・山口淑江・浅川つた子・
浅川満江・浅川とくえ・浅川日出子・浅川熙子・細田茂登枝・細田みぎわ・浅川輝江・浅川
久代・浅川宏・大柴とじ江・細田綱代・細田和哉・小池ともえ・藤森房子・浅川喜子・平井
一仁・宮沢康司・浅川広夫・浅川直司・谷戸武人・平井由美子・三井静樹・浅川米子・中島
秀人・三井はまじ・三井澄子・浅川きよ美・由井峰雄
8. 発掘調査から報告書作成に到るまでの間、多くの方々にご協力や貴重なご教授をいただいた。記して感謝申し上げる。

凡　　例

1. 図版の縮尺は遺物は1/4、遺構は1/50を原則としたが、これ以外の縮尺は図版に表記した。
2. 図版中のスクリーントーンは次の内容を示している。
遺構断面では地山／礫面では焼土／土器の内面では内面黒色／土器の断面では灰釉陶器／石器の表面では使用痕。

目 次

第1章 調査の経緯と概要

1. 調査に到る経緯	1
2. 調査の方法と概要	2

第2章 地理的歴史的環境

1. 城下遺跡の地理的歴史的環境	4
2. 原田遺跡の地理的歴史的環境	6

第3章 遺構と遺物

1. 城下遺跡の遺構と遺物	8
(1) 住居址	8
(2) 据立柱建物址	61
(3) 縄文時代の遺構と遺物	66
(4) グリット及び溝出土遺物	73
(5) 須恵器	79
(6) 中世遺物	82
(7) 近世遺物	83
(8) 近世土壙墓	86
(9) その他の遺物	88
(10) 試掘調査の概要	93

第4章 原田遺跡の遺構と遺物

1. 住居址	95
2. 縄文時代の遺構	110
3. トレンチ・グリット出土遺物	113

第1章 調査の経緯と概要

1. 調査に至る経緯

① 城下遺跡の経緯

1981年4月から県営圃場整備事業に先立つ試掘調査を実施した。調査の範囲は79年度に行っていた遺跡分布調査結果に基づき、城下集落の南側の水田地帯を中心としたが、本調査可能な期間が5カ月前後であるため、遺跡全体面積を10,000畝以内になるような工事計画に変更するため農務部耕地課及び県北土地改良事務所と再三協議を行った。その結果、集落の北側に広がる水田は中世造構が濃厚に存在している可能性が強く、また本遺跡東側の字山崎及び天神地内にも縄文時代の遺跡が存在しているため、当年度通年施行での圃場整備事業は実施しないことを確認した。

本遺跡の南には県道が東西に走り、その南には北新井集落がある。この集落の南には1980年度に圃場整備事業に伴って調査した金生遺跡があり、北東には79年度に調査した寺所遺跡が、北には谷戸城があるため、本遺跡も縄文時代・平安時代・中世の3時期の造構の存在が想定されるのである。城下遺跡の名称は、遺跡のある字名が城下であり、この名称は谷戸城の南下に位置する集落を意味している。この集落の立地している尾根は谷戸城の南東麓から南に伸び、東側には東衣川、西には西衣川が流れている。この尾根は城南麓から南100メートル付近から中央に浅い谷が形成されており、谷の奥には貯水池がある。貯水池の南東に広がる水田を今回の試掘調査対象地としたが、貯水池南の浅い谷中にある水田は遺物の散布が見られないので試掘対象外とした。

② 原田遺跡の経緯

大泉村西井出の集落の南に広がる水田地帯が、圃場整備事業の対象となった。そのため、標高770メートル前後の南北に伸びる尾根上にある桑畑を中心に表面採取を行い、平安時代の遺物の散布を確認した。そのため、試掘調査を城下遺跡と並行して行ったところ、住居址の存在を確認したため、本調査を城下遺跡の本調査終了後にを行うこととした。

③ 調査の経過

1981年4月17日 器材搬入

4月20日 納入れ式（試掘調査開始）

4月21日 城下遺跡で平安時代の住居址を確認

4月27日 下井出地区の試掘調査開始

5月7日 城下遺跡調査打ち合わせ（県北土地改良事務所）

5月8日 城下遺跡の本調査開始

7月23日 原田遺跡の本調査開始
8月10日 城下遺跡の調査終了
8月4日 原田遺跡の調査中断
8月8日 原田遺跡の調査再開
8月29日 原田遺跡の調査終了
1988年4月～ 造物・図面整理作業を開始
1989年3月 整理作業を終了
1989年4月～ 報告書原稿執筆
1990年2月 報告書原稿執筆終了

2. 調査の方法と概要

① 城下遺跡の調査方法

試掘調査によって調査範囲と遺構確認面を確定したので、本調査では重機による表土剥ぎ作業から着手した。遺構確認面は耕作土層の下10～30センチであったため、まず耕作土を剥ぎ、調査区内に盛り上げ、畦反部分は石垣があるため別にまとめておいた。更に石を多く含む床土は畦反部分と一緒に盛り上げておいた。

表土剥ぎを終了した時点で10メートル単位のグリットを設定し、東西ラインを南からA・B・C南北ラインを東から1・2・3とした。グリット名称はグリットの西南の杭番号とした。

遺構の確認作業はジョンによって行い、確認された遺構はセクションベルトを残し掘り進め、住居址と土塁及び溝は土層図面を作成した。住居址は床面まで掘った後に竈を縮尺1/10で作成しながら掘り上げた。

② 城下遺跡の概要

調査対象地とした約8,000m²からは、縄文時代中期の土塁が2基、平安時代の住居址が26軒、平安時代の掘立柱建物址が10棟、平安時代以降の溝が5本、近世の土塙墓が10基検出された。縄文時代の土塁は中期後半に位置付けられる逆位の土器が出土している。平安時代の遺構の広がり特徴は、住居址は遺跡全体にみられるが、掘立柱建物址は中央から南西に集中している傾向がある。1号住居址は3軒が複数している。遺跡中央を南に流れる溝は4軒の住居址を切っており、またこの溝から南西に分流する小さな溝が2本、南東に分流する溝が1本みられる。近世土塙墓は遺跡の南端近くに集中している。

出土している遺物は、縄文時代中期から後期の土器と石器、平安時代の土師器・灰釉陶器・須恵器・石塔・綠釉陶器・貞觀通宝など、12世紀から13世紀の中国青白磁、近世陶器などである。中でもこの時期の貿易陶磁は遺構に伴わないが本県では初めての発見である。また石塔の発見も初めてであるが、時期の明確な遺構からの出土ではないのが残念である。

掘立柱建物址の配置は遺跡中央から西側によって東西に2列並んでいる。列の間には建物は無く広場のような機能が想定される。これらの建物の北西には建物の棟方向と直行する柵列と



①城下遺跡 ②原田遺跡 ③金生遺跡 ④寺所遺跡
 ⑤御所遺跡 ⑥天神遺跡 ⑦豆生田遺跡 ⑧木下大坪遺跡
 ⑨小和田遺跡 ⑩小和田館跡 ⑪姥神遺跡 ⑫谷戸城

第1図 遺跡位置図

も考えられる柱穴が1列直線に並んでいる。この掘立柱建物址と住居址は一部で重複しているが、掘立柱建物址が新しいものと考えられる。

③ 原田遺跡の概要

調査面積は400m²であり、集落全体の調査ではなかったが、平安時代後半の住居址が5軒、掘立柱建物址1棟、土括5基、溝4本が検出されている。住居址は南北に直線的に並んでおり、掘立柱建物址の主軸も南北と考えられる。遺物は、土師器や須恵器、灰釉陶器とともに石器が出土しており、城下遺跡と比較すると集落規模ははるかに小さいが、平安時代に比定される出土遺物のバリエーションは大差はないものと言えよう。

遺構に伴わない遺物としては、縄文中期の土器片や石器及び近世陶磁器破片がある。縄文の遺物は、近くに遺跡が存在していることを意味するのであろうが、近世遺物は、耕作時の混入と考えられる。

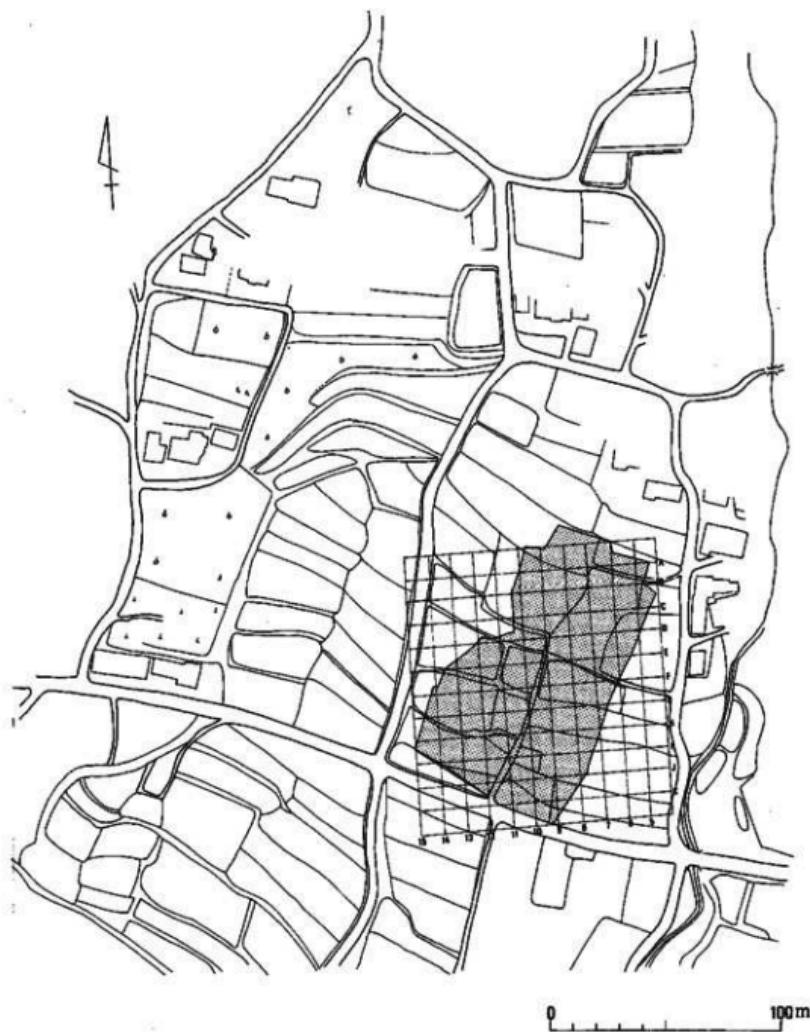
第2章 地理的歴史的環境

1. 城下遺跡の地理的歴史的環境

城下遺跡は八ヶ岳南麓の標高800m前後の舌状台地上に立地する。この台地は南に傾斜し、北には谷戸城が、この台地上の南には城下集落があり、この集落の南には近世初頭以降に開田された水田が広がっている。この水田の下に本遺跡がある。台地の左右には浅い沢があり東を東衣川、西を西衣川とよんでいる。この河川の水量は比較的安定しているが、それは標高1,100m付近からの湧水によるためである。谷戸城は、新羅三郎義光の孫である逸見冠者黒原太清光が築城したと伝えられ、山梨の中世の幕開けに登場する城である。清光は義光の三男義清とともに常陸国での乱行を訴えられ、甲斐国市川庄に配流となった。この乱行を訴えられた時の状況は『長秋記』の大治5年の条に見えるが、その結果として配流されたものと考えられている。配流については『尊卑分脈』に「甲斐国市川庄配流」と記されているが、その時期を示す資料はない。『甲斐国志』などは父義光が甲斐国司をしていたことから甲斐国との関係が強く、その因縁から市川庄の庄官として甲斐国に赴いたもので、『尊卑分脈』にある配流を記載間違いとしており、この説は、近年まで説得力を有していた。しかし、茨城キリスト教大学の志田淳一学長が『勝田市史』中世編で上記した『長秋記』を紹介しながら清光は常陸国で誕生していたことを指摘したのである。この指摘で、甲斐源氏の平安時代末の動向の解釈に大きな変化が生じ、従来の研究成果が総合的に見直されてきている。

本遺跡の南には清光の男である辺見光長の居館とも戦国期の武将堀内下総守の館とも伝えられる深草館がある。堀内下総守は天正4年に死亡していることが高野山にある『武田家日記帳』に見えるが、この一族の動向については不明である。この館は、南台地に広がる水田地帯への灌漑用水を堀から供給している形態がよく残っており、この館の南にある長坂町大八田字南新井の集落の中央には、本遺跡の立地する台地先端からの湧水と堀からの用水路が立体交差する場所があり、このことから中世の開発過程をも知ることができる。このように、中世城郭と開発とのかかわりを具体的に示す遺構として深草館は著名である。

谷戸城は逸見清光の居城と伝えられているが、この城と本遺跡の関係は少なくないものと言える。1982年度にこの城の一部で試掘調査がなされ、その結果では15世紀を中心とする遺物の出土が確認されている。その後にも2回の遺構確認調査が行われ、横堀や土塁を検出している。この城の現在確認できる遺構は、天正10年に北条氏の修築によると『甲斐国志』は記している。この時は八ヶ岳南麓一帯が北条氏の勢力下に入ったため、この地域にいた土豪層も北条氏方に付いて徳川氏と対陣したものと考えられる。しかし、北条氏の敗北は、北条氏に味方したこの地域の土豪層の支配構造を根底から覆したことは容易に想像できる。この事件によって北巨摩郡下の土豪層の多くが没落したものと言えよう。堀内下総守の主税助の時に疲弊したという『甲斐国志』の記述内容も理解できるのである。この時に津金衆に属していた塙川流域の武士団の多くが、また釜無川流域を本拠地としていた武川衆が徳川方として戦い、以後長く繁栄し



第2図 城下遺跡周辺現状図 (1/2000)

たとは対照的である。八ヶ岳南麓台地に割拠していた土豪層の伝承は、天正10年の武田家滅亡と徳川・北条の戦い（天正壬午の戦い）によって消滅していったのではなかろうか。

深草館の南西に小和田館がある。この館は伝承もなく『甲斐国志』などの歴史書の記述もなく、全く知られていなかったが、圃場整備事業に先立つ遺跡分布調査によって掘跡が確認され、小字が「古里敷」であることから、中世城郭が所在する可能性が高いと判断され、発掘調査が行われたのである。1983年には地下式土壙と南北に走る薬研堀、石組井戸、天目茶碗、硯などが、1984年にはこの館の東の水田が調査され、四耳壺に入った古錢が刺の状態になって二千枚、その他容器に入らない古錢が2箇所からそれぞれ二千枚づつ合わせて約六千枚が出土し、方形堅穴状造構も多数検出された。この遺跡は15世紀を中心とする集落と考えられる。また、1985年にはこの集落の北側が調査され、平安時代の銅鏡が出土している。これらの遺跡と金生遺跡（深草館）との関係は不明である。またこの地域は、武田氏が戦国時代に信濃攻略のために整備したと伝えられる棒道が走っており、この棒道は上・中・下の3本があったと『甲斐国志』は記している。本遺跡の南から北西に伸びている幅2m足らずの農道がこの棒道であると伝えられている。深草館の東には東衣川を挟んで東に方形の区画がある。この区画は北を幅10mほどの堀で切り、川沿いには土塁を築いている。やはり中世土豪屋敷の一部と見るべきであろう。この地域は中世開発の足跡を知る上で、貴重な遺構が豊かである。

本遺跡の東南には衣川を挟んで1979年にやはり圃場整備事業に先立って調査した平安時代集落址である寺所遺跡がある。この調査では10世紀後半を中心とした集落で、綠釉陶器が出土し、2棟の大型住居址の間には、掘立柱建物址が2棟並び、その周辺に小型の住居址が点在していることが確認された。天神遺跡は圃場整備事業にかかり1982年に調査された縄文時代前期の大集落址であるが、平安時代の堅穴住居址も多数検出している。本遺跡のある八ヶ岳南麓には多くの平安時代の遺跡が周辺に点在しており、中でも大泉村や長坂町には集中している。この点に注目した萩原三雄氏は注目すべき論功を行っている。平安時代の遺跡は9世紀後半から10世紀代に位置付けられるものがほとんどであり、この傾向は今後とも大きな変化はないものと言えよう。八ヶ岳南麓台地上に急増した事実は、牧の衰退や気象の温暖化との関係も考慮する必要がありそうである。何回かの開発が繰返し行われ八ヶ岳南麓には、広大な耕地の間に多くの集落が営まれていたことと想像できる。比較的安定した水が確保でき、土地の起伏も少なく、日照時間も多いという地理的条件を有する南麓西部を基盤として、甲斐源氏が平安時代末に勢力を伸ばしていったとの説には説得力がある。

2. 原田遺跡の歴史的地理的環境

本遺跡は、城下遺跡の南東1kmの水田地帯の中央にあり、北に下井出集落がある。西には泉川を挟んで平安時代の寺所遺跡が、東には泉川を挟んで縄文時代中期の甲ヶ原遺跡がある。また、南西2kmには縄文中期と平安中期の集落である柳坪遺跡がある。

平安時代の遺跡が集中している地域であることは城下遺跡のところで述べたが、本遺跡の西で寺所遺跡の手前には、木下大坪遺跡がある。この遺跡は10世紀中葉から後葉に比定されてい

る集落遺跡で、工場の建設に先立って1981年に大泉村教育委員会によって発掘調査が行われた。この時期の土師器の坏には墨書きが多く見られるが、この木下大坪遺跡でも墨書きされた多くの坏が出土している。また、1982年に大泉村教育委員会で調査した姥神遺跡では、「安曇」と底部外面に墨書きされた坏が出土した。この墨書きが地名を表しているものか姓を表しているものかは未だ明らかにはされていないが、安曇族の一集団が平安時代中期に八ヶ岳南麓の開発に参加していた可能性をも示す遺物である。

本遺跡の東には甲川が流れ、その東側は高根町である。この町は大泉村と比較すると水の確保が困難で、江戸時代以前から用水路の開削が盛んに行われていた地域である。この用水路は八ヶ岳から流れ出る須玉川の上流である川俣川西沢を堰でせき止めて台地上に数kmにわたって引水してきており、東から箕輪堰、六カ村堰（村山堰）がある。この二つの堰とは異なって隣接する小河川から水を引く小規模用水路が多いのは両町村の境を流れる甲川以西の特徴であろう。本遺跡の周囲を南流する水路も絶てがこの小規模用水路であり、水源は泉川や甲川である。甲川は当初は川俣川西沢の西上の台地上に流出する湧水を水源としていたが、水の需要の増大に伴ってやはり西沢から取水するようになったと考えられている。小規模な地域開発でも水の確保は不可欠な問題であり、更に重要な問題は刈敷きを行う山林原野の確保であった。しかし、用水確保は下流域に存在する水利権との調整が、また新たな入会山の取得にも既存集落との協議が必要であった。中でも入会山は、堆肥の収集以外に生活する上で必要な燃料である薪炭の確保や家畜のための飼料採取の場であり、別の視点からは水源林という意味をも有するわけで、開発を行う上での必要条件であった。この極めて重要な二つの問題を容易に解決できる人間が存在して始めて地域開発が可能となるのであり、空閑地と労働力あるいは開発に必要な資金だけではないのである。このような幾つかの問題を解決するためには一定以上の権力と財力が必要であり、ここに中世開発領主としての土豪層の関与が考えられるのである。この水と山という資源確保問題は、近世地方文書の多くが山論水論で占められているように近世に行われる新田開発によって更に増幅していくのである。



第3図 原田遺跡現況図

第3章 遺構と遺物

1. 城下遺跡の遺構と遺物

(1) 住居址

1号住居址

概要 この住居は3軒が重複しており、D-8グリットからD-7グリットに位置する。黒褐色土をベースにした土に黑色土のプランを確認したため、その時点では大型の1軒と考えられたが、掘り進んで行くと3軒の重複が明らかとなった。そのため便宜上A・B・Cとして遺物を取り上げた。新旧関係はセクションからA→B→Cと推測できる。出土した遺物の多くはB住居にかかるものであるが、遺物の年代からも同様な傾向が認められる。いずれの住居も床面か壁際に巨石が露出している。また、A住居の竈はB住居が造られる時に破壊されて明確な位置は明らかにはできないが、C住居の竈は東南隅に、B住居の竈はC住居と同様な位置に築かれている。本住居からは総量で12.6kgの遺物が出土しているが、土師器の环は6.1kg、土師器の壺が2.4kg、須恵器が1.1kg、灰釉陶器が0.4kg及び縄文土器が2.6kgが出土している。A号住居の壺の形態は玉状口縁が主体で、縄文土器の多くは繊維土器である。出土遺物の中で特筆すべきは縄軸の小皿であろう。B号住居の床下よりXII期に比定される壺が出土し、竈からもXII期の壺が出土している。また壺の多くは底部糸切り痕を有するものが多い。

(1) 1-A号住居址

形状 3軒の重複する住居の中では北西に位置し、最も古い住居である。東西に長い方形を呈するものと推測できるが、南と東をB号とC号に切られている。現存する壁は北壁が3.7m、西壁が2.8mを測る。北西隅には自然石が露出している。

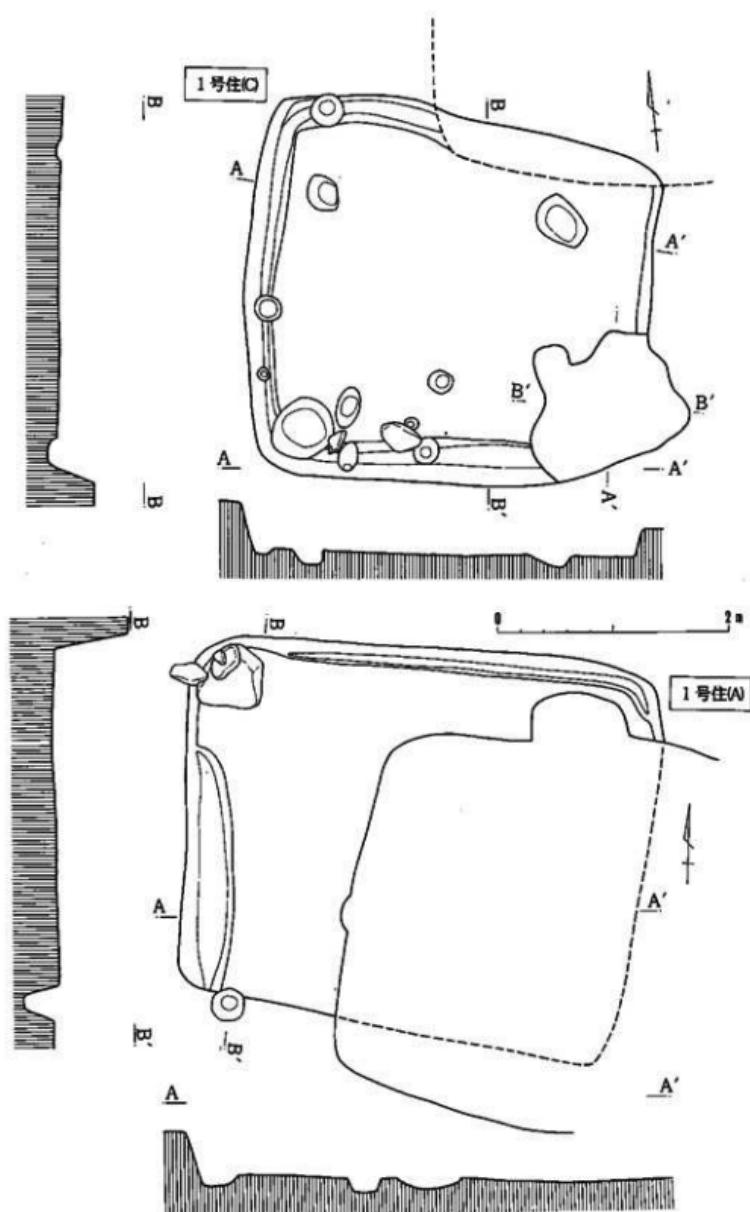
床面・壁 重複する3軒の住居の中では最も床面が高く、平坦で比較的堅くしまっていた。削平を免れた北壁は高さ64cm、西壁は36cmを測る。周溝は北と西で確認され幅は10cm前後である。

(2) 1-B号住居址

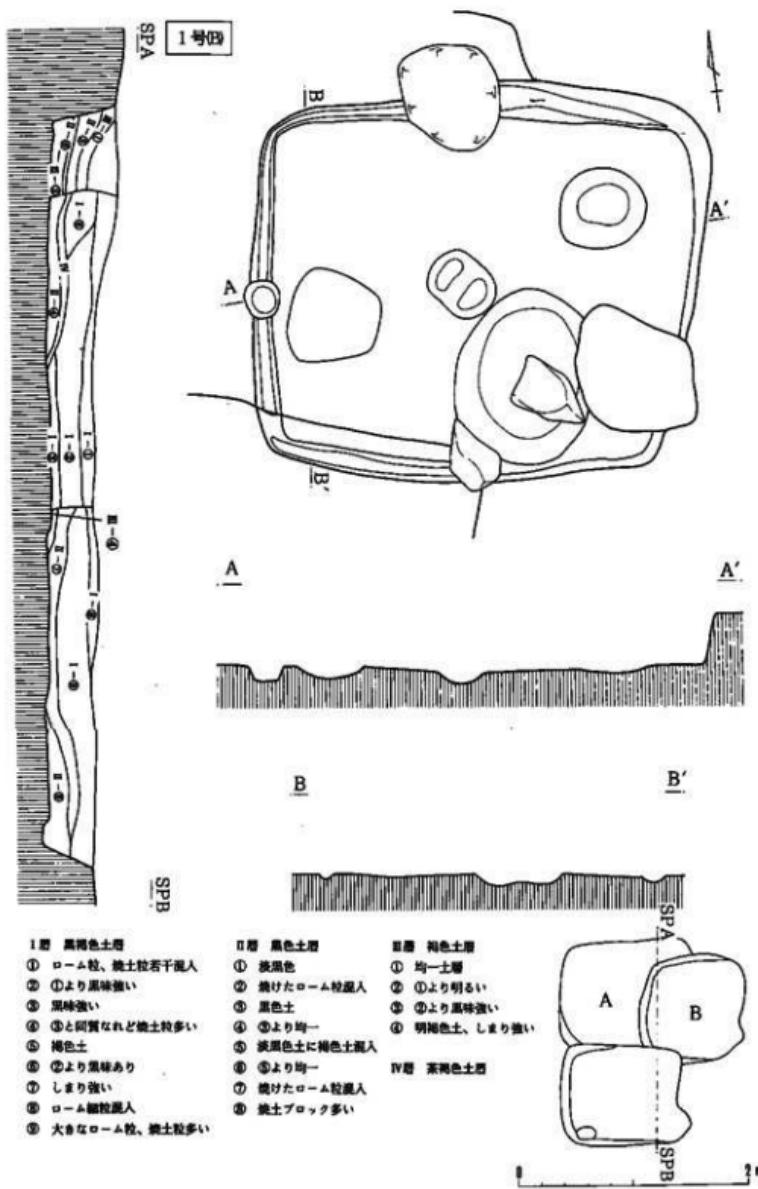
形状 重複する3軒の住居の中では中間の時期に位置し、竈の残存状況は良好であった。やや東西に長い方形を呈し、東壁2.7m、西壁2.6m、南壁3.2m、北壁3.5mを測る。南壁中央には自然石が一部露出している。

竈 平石を芯にして周囲を粘土で覆った構造で、東壁の中央やや南に位置している。(第38図参照)

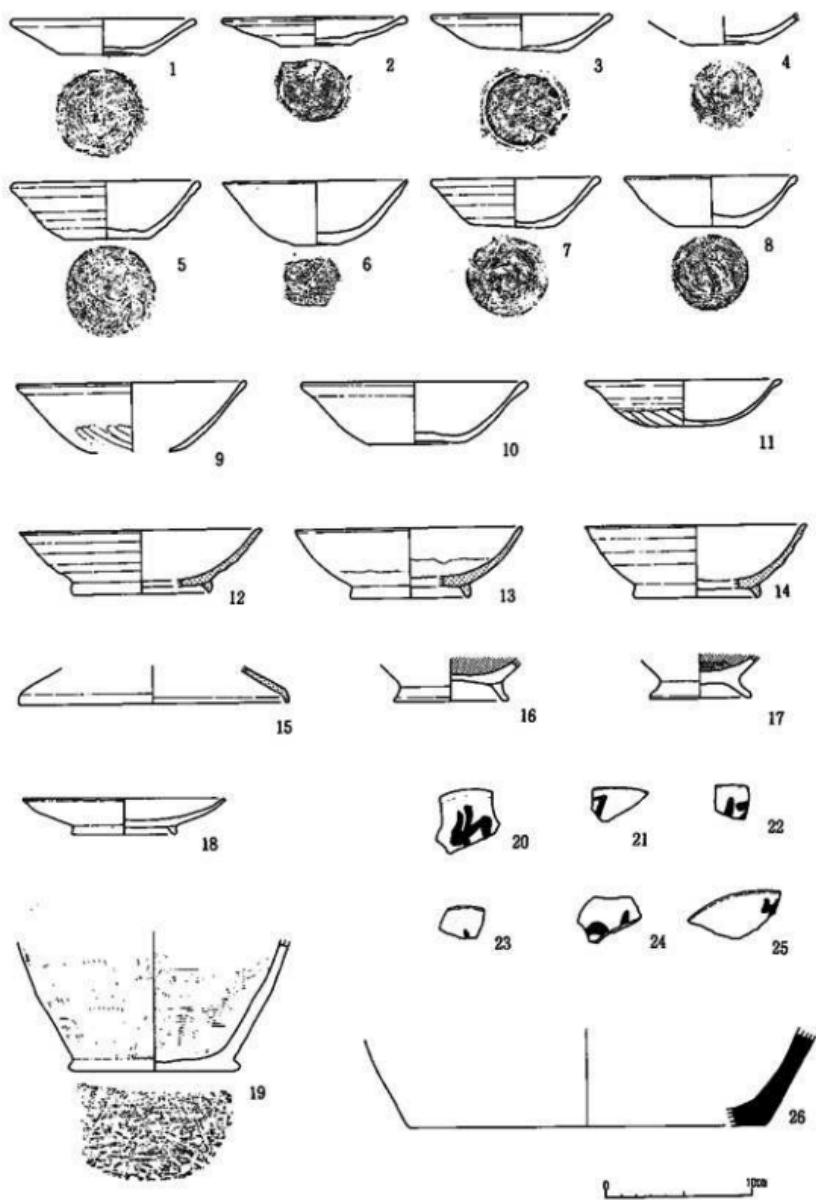
床面・壁 床面は堅くしまっているが中央部(長軸60、短軸48、深さ12cm)と北東(径74、深さ27cm)、西(長軸80、短軸70、深さ12cm)、南東(長軸150、短軸120、深さ54cm)、



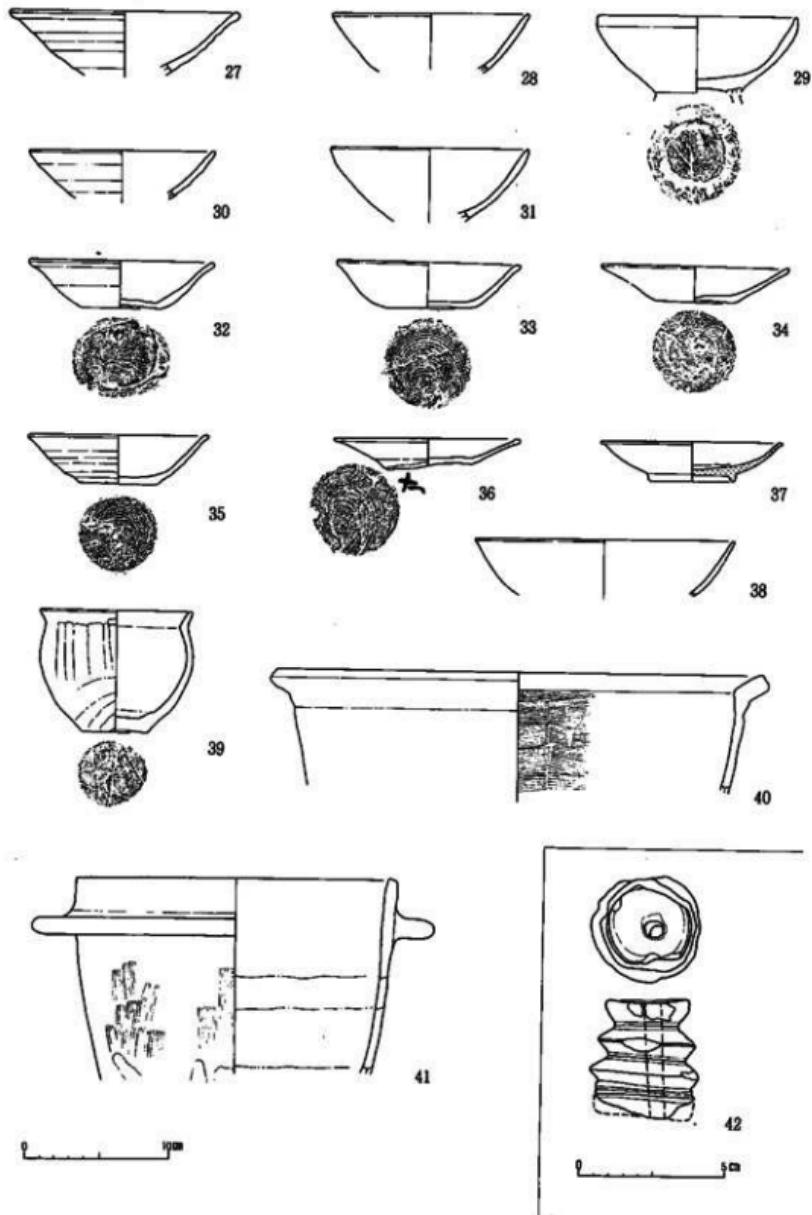
第4図 1号住居(A/C)実測図 (JG)



第5図 1号住居旧実測図 (1)



第6図 1号住居出土遺物 1 (1/4)



第7図 1号住居出土遺物 2 (1/4)、(1/2)

北壁中央にも円形（径85、深さ11cm）の土壙がある。残っている壁の高さは東で43cm前後である。周溝は幅10cm、深さ数cmで東を除いて巡っている。住居に伴うかどうかは明らかではないが西壁中央に径30cm前後、深さ15cmの柱穴がある。

遺物 最も多く出土している。第6図No.1は床面から20cmほど高い壁際の覆土中から出土した口径13cm、器高2.5cm、底径6.1cmを測る玉縁の糸切り底をもつ壺である。No.3は口径13cm、器高2.5cm、底径5cmを測る玉縁の糸切り底の壺である。No.6は床面から25cm上の壁際の覆土中出土の土器で、口径13cm、器高4.4cm、底径3cmを測り、底部は木葉底である。No.7は住居の南西壁際の床面から20cmの覆土中から出土した壺で、口径12cm、器高3.3cm、底径5.8cmを測る。No.8は南壁際から出土し、口径12cm、器高3.4cm、底径5cmを測る。No.9は東壁際の中央から出土した外面下半を節削り調整を行った口径16cmを測る玉縁の壺である。第7図No.8は東壁際中央から出土した口径12.6cm、器高2.4cm、底径5.3cmを測る壺である。竈から出土した遺物は第7図No.1～7・12～13であるが、No.12は口径10.6cmを測る小型の壺である。No.14は口径34cmの11世紀後半に位置付けられる壺の口縁部破片である。No.15は竈の南から出土したもので、10世紀末に位置付けられる羽釜である。

(3) 1-C号住居

形状 重複する3軒の住居では南に位置し、北東の隅が1-Bを切っている。竈は南東隅にある。東壁(2.4m)、西壁(2.6m)、南壁(2.7m)、北壁(3m)を測る方形である。遺物の出土量は少なく、覆土中には焼土と炭の粒子の混入が目立った。

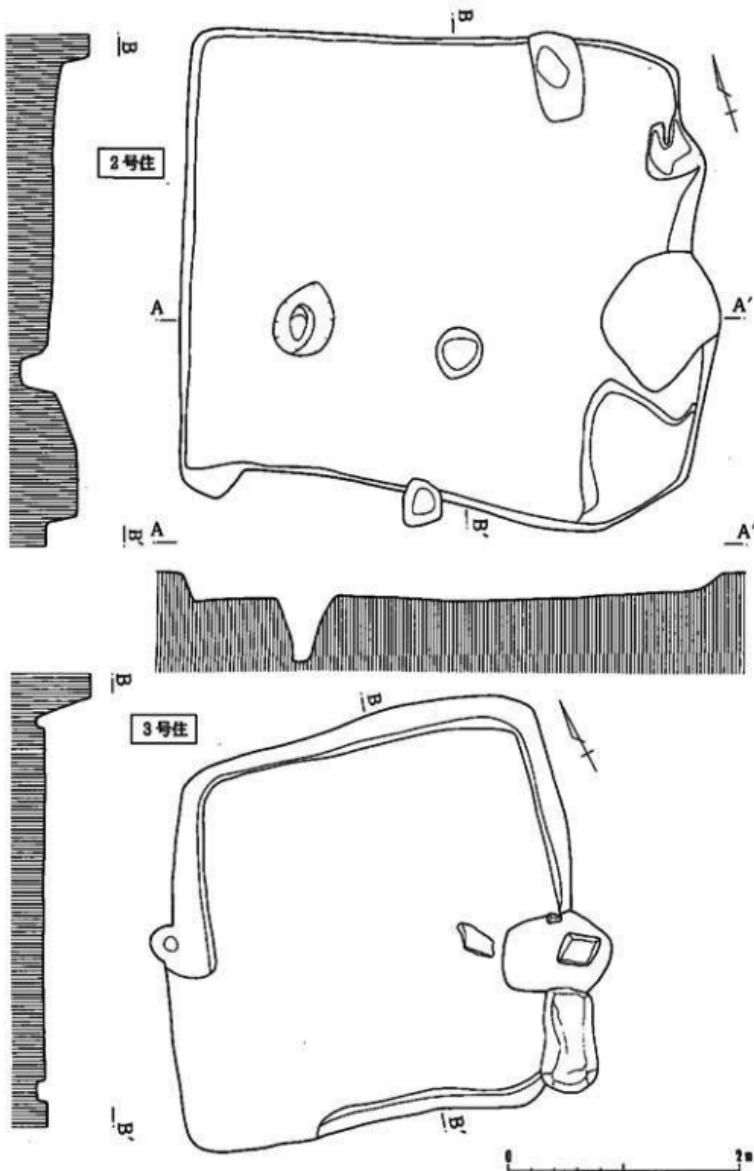
竈 住居の南東隅に作られており、芯に石を入れた構造は本遺跡の他の住居と同様であるが、残存状況は良くない。（第38図参照）

床面と壁 東壁は24cm程度の深さを測るが周溝はない。西壁は36cm前後を測り、深さ10cm前後の周溝がある。南壁は深さ30cmを測り、周溝の幅は20cm前後と広く深さは10cm前後である。北壁はA号B号と重複しているため深さを知ることはできない。

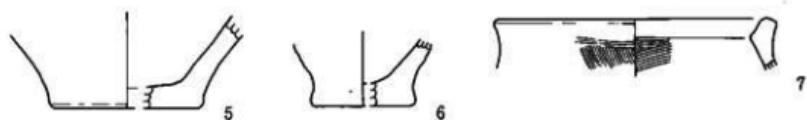
遺物 第6図No.13は口径17.8cm、器高4.9cm、底径8.4cmを測る灰釉陶器で、三日月高台を呈している。外面胴過半部の無釉のところには水挽きの指跡が残る。胎土は堅くしまった灰白色である。No.18は綠釉皿で口径14cm、器高2.5cm、底径7.2cmを測る。器面全体に施釉されており、断面三角形を呈する付け高台の疊付きにも施釉されている。口縁部は若干外反する。色調は全体に淡い緑色で胎土は若干赤みがかった黄土色で硬質で、5破片が接合して約半分まで復元されたが、最も大きな底部破片が本住居の西壁際から出土している。また2破片は住居址外の出土である。第6図No.19は壺の底部で胎土に金雲母を多量に含み、内外面が刷毛調整されているいわゆる甲斐型壺である。第7図No.16は層輪状土製品の一部で、幅3.8cm、長さ4cmを測る。

2号住居

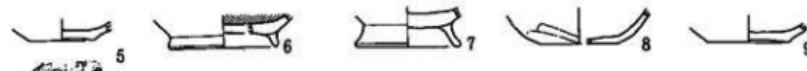
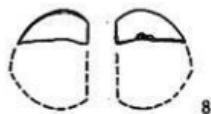
概要 1号住居の東5mにある、既に埋没している大きな沢の東に位置する小型の平安時



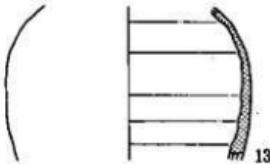
第8図 2・3号住居実測図 (1/50)



2号住



3号住



第9図 2・3号住居出土遺物 (1/4)



代の住居である。壁は床面近くまで削平されており、また床面も柔らかくしっかりとしたものではなく、木の根の擾乱を著しく受けている。遺物の総出土量は2.35kgを測り、土師器の壺が0.6kg、須恵器が0.2kg、灰釉陶器が0.15kg、繩文土器が1.4kgそれぞれ出土しているが、土師器の壺は極めて少ない。壺の多くはⅢ期に比定される玉状口縁を呈するものが多い。また鉄屑が1点出土している。

形 状 コーナーが直角に近くカーブし、東西に若干長い方形を呈しており、東壁3.5m、南壁4.3m、西壁3.7m、北壁4.1mを測る。

床面・壁 南壁中央に擾乱が見られるが、北壁の深さは25cm、東壁は15cm、西壁24cm前後である。床面は北側から西側は軟弱であるが、南側は良好に認められる。床の西には、長径65cm、短径50cm、深さ57cm、中央には径40cm、深さ20cm、北には長径80cm、短径40cmのピットがある。また、東壁の北側と南側には不整形の土括が認められる。

電 東壁の南よりに造られている。東西1m、南北1.2mを測る掘り方を有している。

遺 物 第9図No.1は口径13.2cmが推測され、No.2は口径12cmが推測される内黒土器、No.3口径10.6cmが推測される壺、No.4は灰釉陶器の底部破片である。No.5及び6は壺の底部である。No.8は石帶の丸軸で溝から出土している。

3号住居

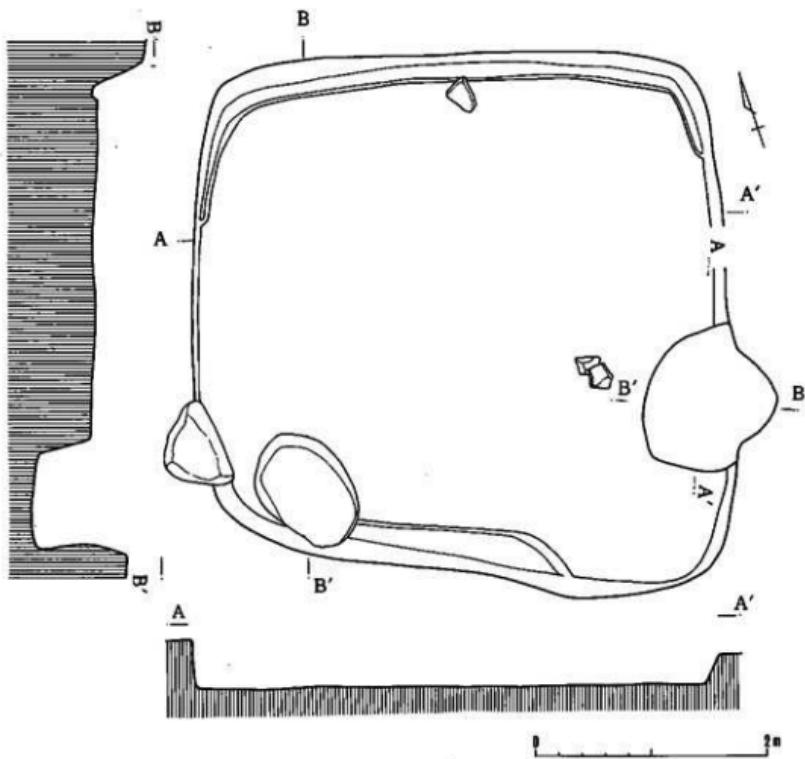
概 要 2号住居の南西10mに位置し、耕作による削平を著しく受けて東側半分は壁が消滅している。周溝は全体に確認され、床面は比較的平坦である。南東隅には大きな転石が住居内に突出している。遺物の出土量が全体で4.5kgを測り、内訳は土師器の壺が0.8kg、土師の壺の破片が0.4kg、須恵器の壺の破片が0.2kg、灰釉陶器の破片が0.2kg、繩文土器は2.9kgである。出土した遺物の特徴は、壺の量は少なく、壺も内面黒色土器の比率は低い。

形 状 方形を呈し、東壁2.9m、南壁3m、西壁3m、北壁2.7mを測る。深さ10cm前後、幅20cm前後の周溝が四囲に南巡っていたものと考えられるが、東側の壁は削平されており確認できない。

床面・壁 床面は比較的平坦で、柱穴の検出されていないが、南西部分では木の根の擾乱が認められる。

電 東西90cm、南北65cmを測る掘り方をもち、東南隅にある露頭の石の南側の袖として築かれているが、構造を把握できるような残存状況ではなかった。（第8図参照）

遺 物 第9図No.1口縁部が若干外反し底部糸切りを有する壺で、口径11cm、器高3cm、底径5.5cmを測る。No.2は口縁部が若干肥大し底部糸切りを有する壺で、口径12cm、器高2.9cm、底径5.5cmを測る。No.3は口縁部が若干外反し、肉厚の薄い壺の口縁部破片で、口径13.4cmを測る。No.4も同様な破片で口径11.4cmを測る。No.5は糸切り痕のある底部破片で、底径4.5cmを測る。No.6は高台付きの内面黒色土器の底部破片で底径9.4cmを測る。No.7は外反する高台の破片で、底径7.4cmを測る。No.8は外面

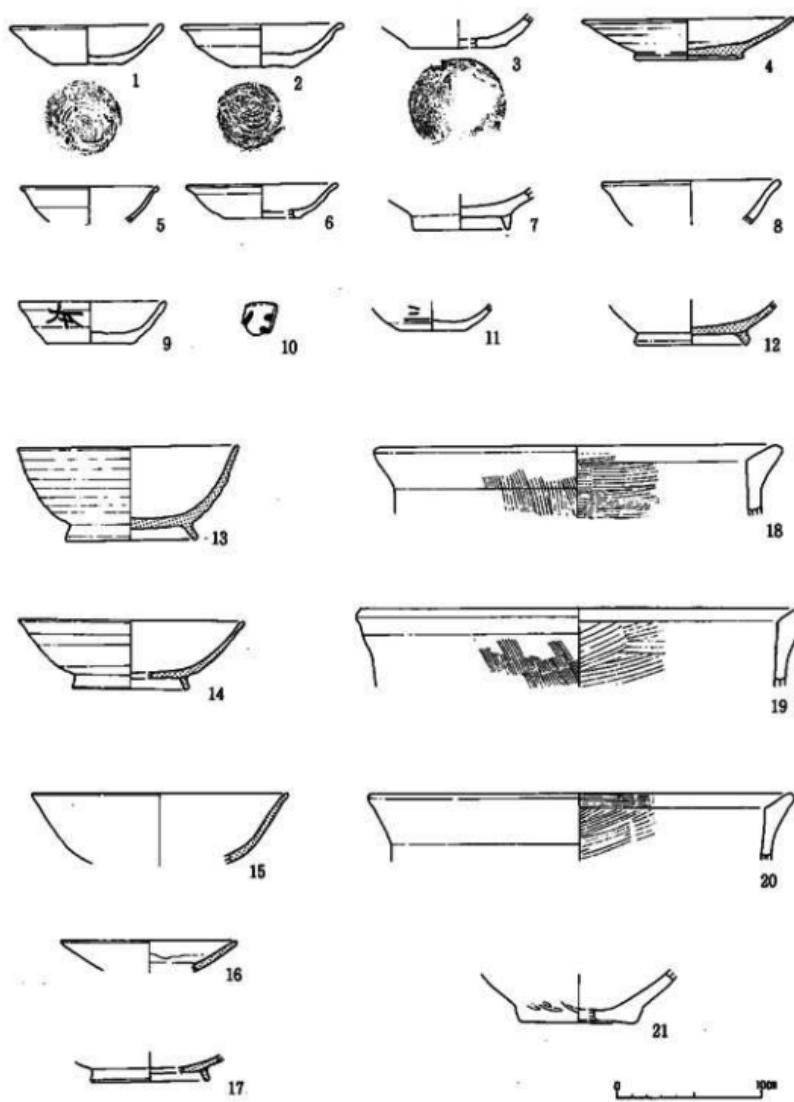


第10図 4号住居実測図 (J.)

に範調整痕のある底部破片で底径5.4cmを測る。No.9は底径6cmを測る壺の底部破片である。No.10は甕の口縁部破片で、口径40cmを測る。No.11は墨書土器の底部から胴部中央の破片で、底径7cmを測る。No.12は甕の口径24cmを測る口縁部破片である。No.13は灰釉陶器の長頸壺の胴部破片である。

4号住居

概要 1号住居の南西20m、F-8杭N北に位置し、比較的削平を受けて居ない残存状態の良好な住居である。甕の北側には灰釉陶器が多く出土し、南西隅の土括と壁の間からは完型の壺が出土している。出土した遺物の総量は5.4kgで、内訳は甕は2kg、土師器の壺が0.8kg、須恵器が0.3kg、灰釉陶器が0.3kg、縄文土器が0.2kgである。甕が多く出土したのは甕であるが、胎土は厚く内外面に調整痕が僅かに残るものと胎土は薄く内外面に刷毛目の調整痕が残るものとに分けられるが、口縁部破片が無い。また、片口の壺の破片も出土しているが、図示はしていない。遺物の傾向からXII期が主体と考えられる。



第11図 4号住居出土遺物 (1/2)

形 状 西壁が若干短い方形を呈し、東壁4.1m、南壁3.7m、西壁3.2m、北壁3.7mを測る。南西隅には露頭する石がみられる。

床面・壁 床面は平坦で良好に残されており、周溝も北壁と南壁に検出され、幅15cm、深さ10cm前後を測る。南西隅には長径1.1m、短径0.7m、深さ0.5mの土塗がある。

電 東壁にあり、東西1.15m、幅1.2mの掘り方を有する。袖に石を立てる構造であるが、石が確認されたのは南側の袖である。(第38図参照)

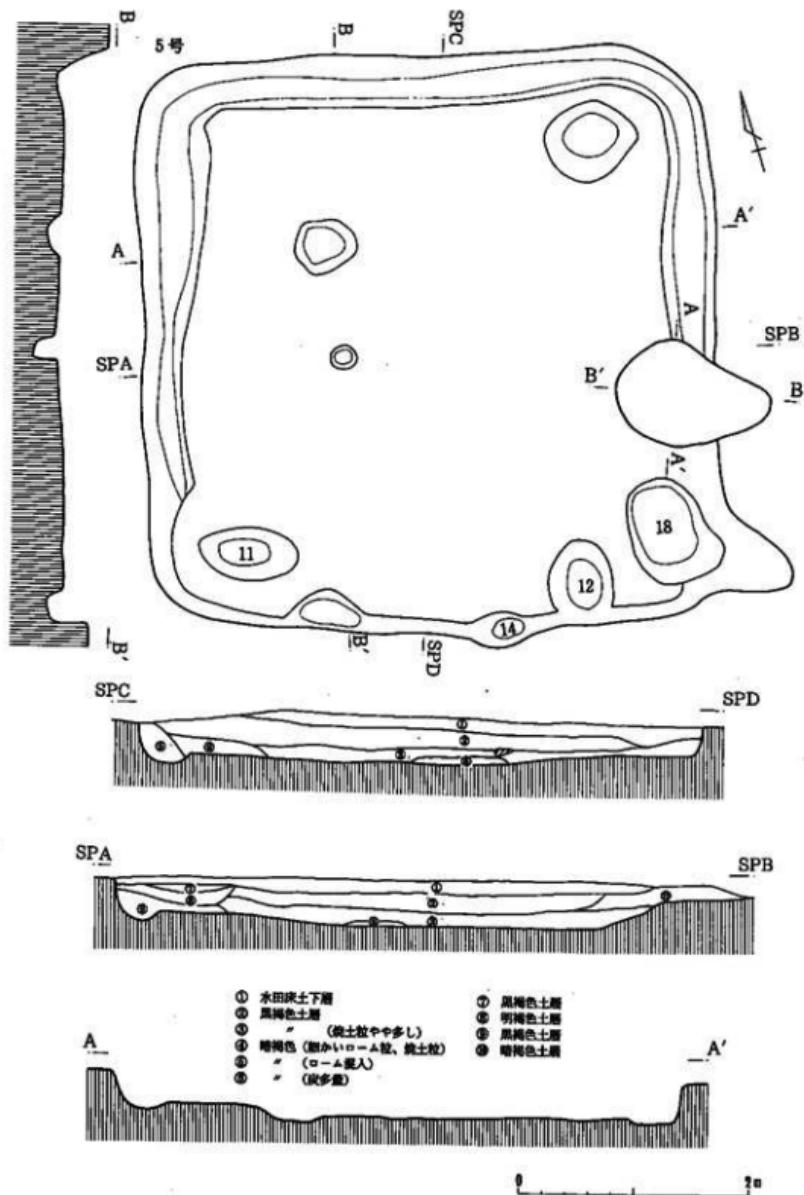
遺 物 第11図No.1は南壁の西側にある土塗内から出土し、口径10.4cm、器高2.7cm、底径4.8cmを測る底部糸切りの壺で、底部から若干肩が張りながら口縁部手前で外反する。No.2は東壁中央付近から西に50cmの覆土中から出土し、大きく外反する玉状口縁を呈し、底部糸切り痕を有する壺で、口径11.3cm、器高2.7cm、底径4.8cmを測る。No.3は底部糸切りの底部破片で底径6.8cmを測る。No.4は灰釉陶器で、No.5は玉状口縁を呈する口径9.6cmを測る口縁部破片である。No.6は若干外反する口縁部を有する口径10.6cm、器高2.4cm、底径5cmを測る口縁部から底部にかけての破片である。No.7は高台付き碗の底部破片で、底径7cmを測る。No.8は竈内出土の若干外反する壺の口縁部破片で口径12.4cmを測る。No.9は東北壁隅から中央へ80cmの床面から出土し、外面胴部中央に『本』の墨書のある壺で口径10.2cm、器高2.9cm、底径8cmを測る。No.10は墨書の口縁部破片であるが、書かれている文字は不明である。No.11は底径4.8cmの底部破片で墨書されている『三』を読み取れる。No.12は三日月高台の灰釉陶器の底部破片で、底径8cmを測る。No.13は灰釉碗で、口径15.2cm、器高6.5cm、底径9cmを測る。No.14は灰釉碗で口径15.7cm、器高5cmを測る。No.15～17は灰釉陶器の破片で、No.16は口径12.2cm、No.17は竈内出土で底径8.1cmを測る。No.18～21は甌の破片で、口径はそれぞれ28.6cm、31.4cm、29.8cm、No.21の底径は8cmを測る。

5号住居

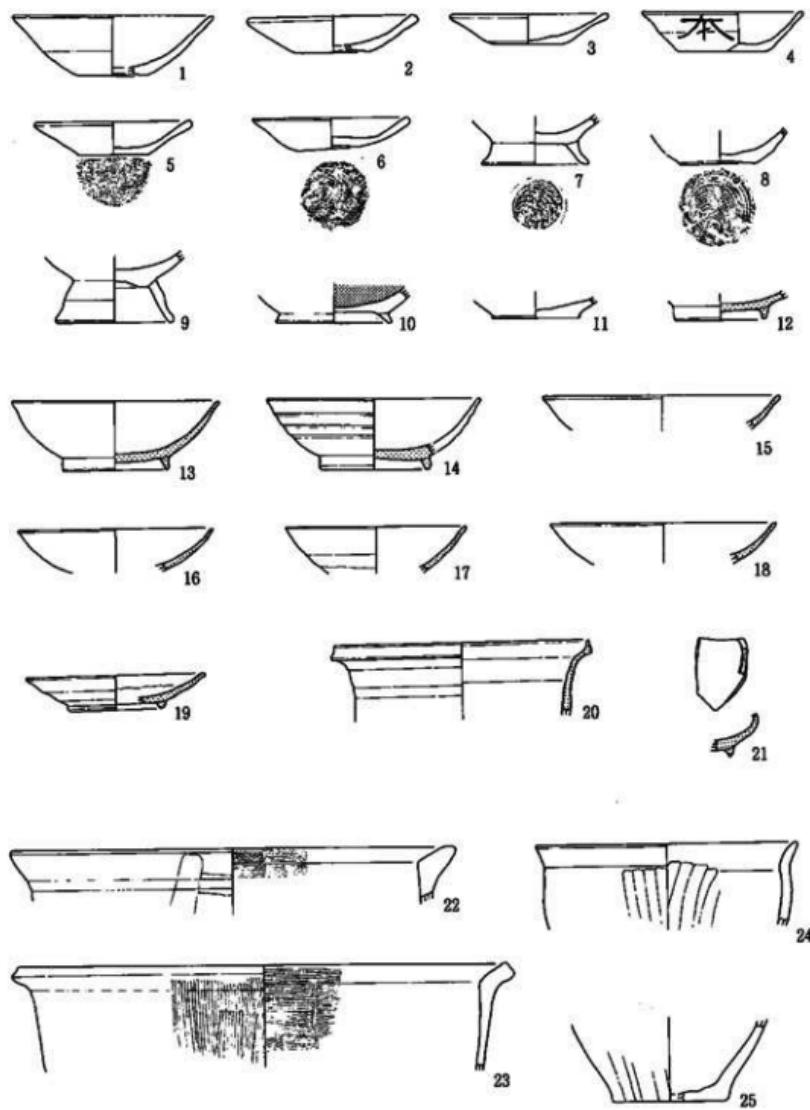
概 要 4号住居の南20mのH-9グリットに位置する正方形に近いプランをもち、東壁際に2連式の竈をもつ住居であるが、一方この竈は築き直したものとも考えられる。床の中央には長径50cm前後の梢円形の転石があり、その南には柱穴がある。床面は堅くしまっている。南壁際にから灰釉陶器が出土している。幅の広い周溝が竈の北側から北壁、西壁まで掘られている。出土した遺物の総量は7.6kgを測る。土師器の壺は3.9kgを測り、糸切り痕を有し厚い底部が主体を占め、玉状口縁及び内面黒色土器は少ない。また、底部が厚く白色胎土の壺は内面黒色が目立つ。土師器の甌は1.9kgを測り、須恵器は0.7kg、灰釉陶器は1kg、繩文土器は0.1kgであるが、灰釉陶器の甌には15号住居出土遺物を接合する破片があり、耳皿も出土している。

形 状 東壁4.3m、南壁4.4m、西壁4m、北壁4.1mを測る方形を呈する。

床面・壁 床面の中央は低く、西から東に若干傾斜している。北東隅の浅い土塗は径70cm、深さ数cmで、焼土と土器が出土している。



第12図 5号住居実測図 (Y)



第13圖 5號住居出土遺物 (%)

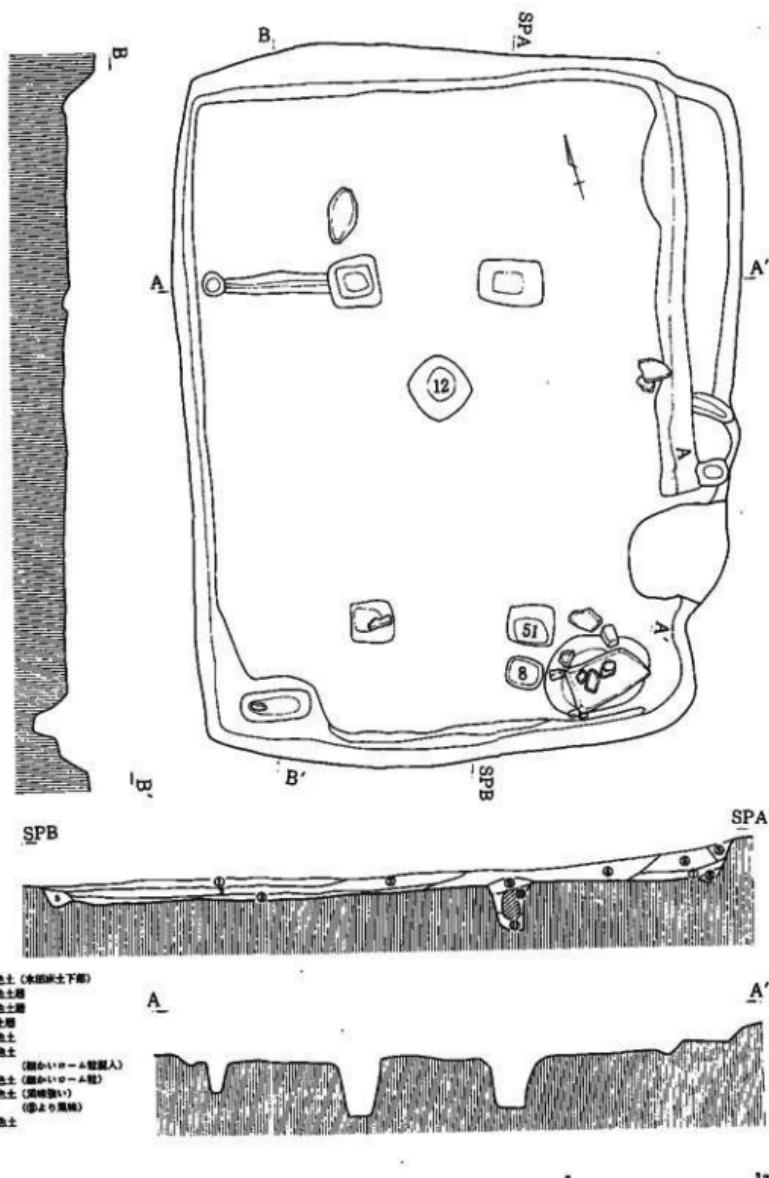
- 21 -

- 竈 東壁南に並んで2基築かれているが、新旧関係があり南竈は北竈より古いと考えられる。袖に石を立てる構造で、北竈では石が抜かれてた痕跡が確認され、中心には柱穴状の土壙がある。焼土は東西1m、南北0.7mの範囲にあり、その厚さは20cm前後を測る部分もあった。（第39図参照）
- 遺 物 第13図No.1は底部中央部分を欠く破片で、口径14cm、器高4.2cm、底径4.8cmを測る。No.2は竈内から出土したもので、全体に肉厚があり口径12cm、器高2.5cm、底径5cmを測る。No.3は床面中央やや西よりから出土した坏で、玉状口縁を呈する口径11cm、器高2.1cm、底径5cmを測る。No.4は墨書が外面の胴部中央にあり「本」と書かれている。口径11cm、器高2.7cm、底径6.2cmを測る。No.5は糸切りのある凌ぎが強い坏で口径11cm、器高2.3cm、底径5cmを測る。No.6は口径11cm、器高2.1cm、底径4.4cmを測る糸切り痕を有する。No.7は底部裏面に糸切り痕を有する高台付き碗で、底径7.4cmを測る。No.8は糸切り痕を有する底部破片で底径5.3cmを測る。No.9は高さ2.4cmの高台が付く坏の底部破片で、底径8.2cmを測る。No.10は高台付き内面黒色土器の底部破片で、底径8cmを測る。No.11は底部破片で、底径は6cmを測る。No.12は灰釉碗の底部破片で、胎土は緻密で灰白色を呈し底径6.3cmを測る。No.13は南壁際中央やや西より出土の灰釉碗で口径14.4cm、器高4.7cm、底径7.4cmを測る。No.14は北東隅から中央へ1.5m付近の床面から出土の灰釉碗で、口縁部から内面に刷毛で施釉され、口径13cm、器高4.9cmを測る。No.15～18までは灰釉陶器の口縁部破片である。No.19は灰釉の小皿で高台疊付き部分が断面三角形を呈し、口縁部を中心に施釉され、口径12.4cm、器高2.4cm、底径6.7cmを測る。No.20は長頸壺の口縁部破片で、口径17.8cmを測る。No.21は灰釉の耳皿で、内面全体に施釉されている。No.22～25は甕の口縁部破片である。

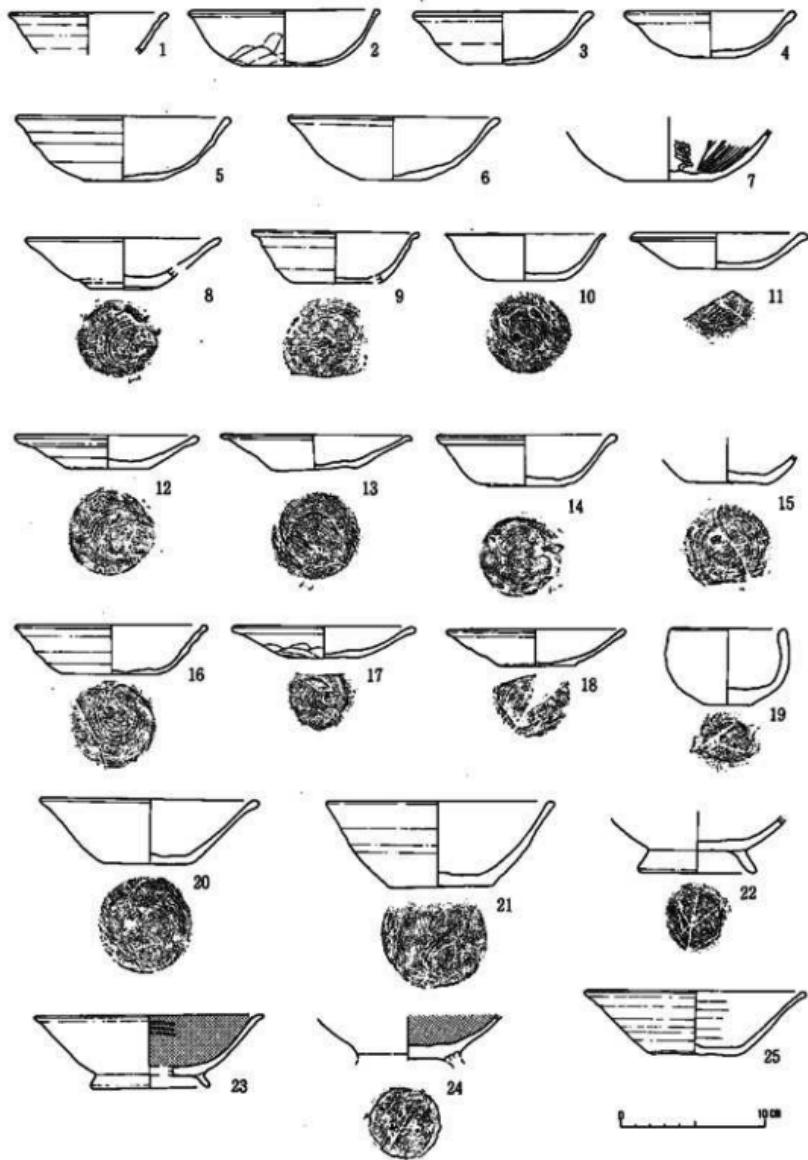
6号住居

- 概 要 遺跡の最も南で、K-11グリットに位置している大型の住居で主柱穴4個が住居の中央に掘られている。東側の壁は竈より北側が拡張されたように張り出しているが、この可能性は床面のレベルに段差が生じているため、考えにくい。重複関係は造構確認の時点では判断できなかったが、小型の住居の方が古いため、プランとしては確認できなかったと考えられる。この住居の西には大型の1号溝が南北に流れている。この溝の中には2軒の平安時代の住居があり、また隣接して井戸も検出されている。出土遺物の総量は8.3kgを測るが、最も多いのは土師器の坏での5.4kg、次いで灰釉陶器は1.3kg、土師器の甕が0.8kg、須恵器0.7kg、繩文土器0.1kgである。坏の形態は底部糸切り痕が残るものと箇調整されたものとの比率は半々である。また玉状口縁を呈する坏が多く、内面黒色土器には暗文や木葉痕を有するものが認められる。胎土が白色の坏は検出されず、須恵器の出土量も少ない。

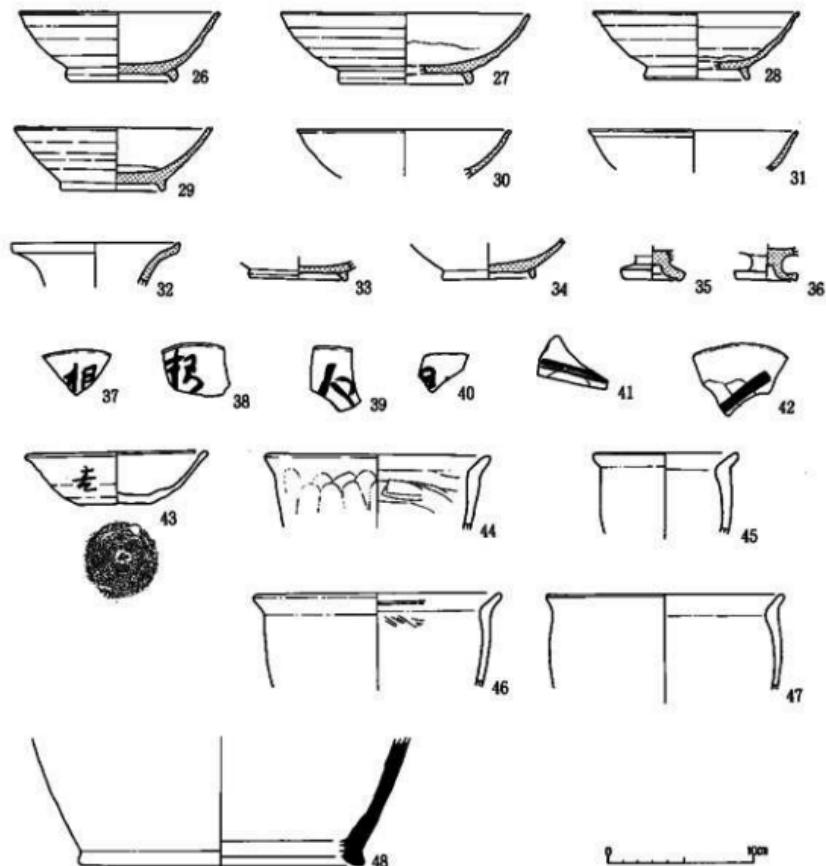
- 形 状 南北に長い方形の住居で、北壁4.7m、東壁6.5m、南壁4.7m、西壁6.5mを測るが、



第14図 6号住居実測図 (X)



第15圖 6號住居出土遺物 1 (1/4)



第16図 6号住居出土遺物2(1/4)

概要で記述したように東側には重複した小型の住居が存在している。この小型住居の竈は本住居の竈の北側に隣接して検出されている。この小型の住居の大きさは東壁が4.5m前後を推測できる。

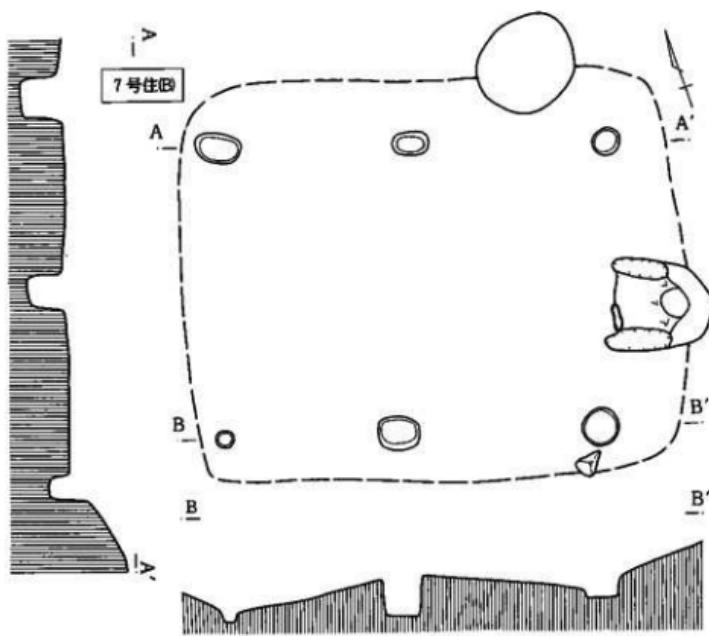
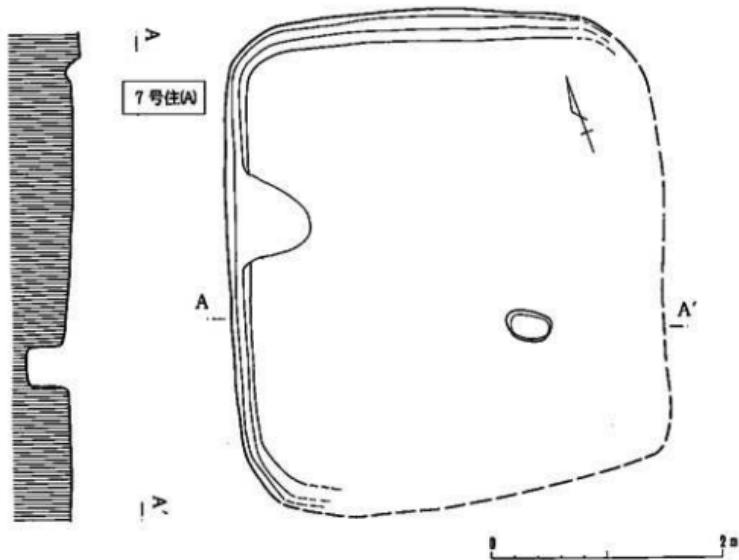
床面・壁 床面には中央やや南よりに東西1.75m、南北3.5mの間隔で4個の柱穴がある。この間隔から柱間の単位を1.75mと考えることができる。東壁及び西壁と柱穴との距離も1.75m前後である。床面は全体に平坦で堅く締まっている。柱穴の深さは50~60cmである。

竈 竈は東南隅から1.5m北側の東壁に造られており、掘り方は東西1m、南北0.8mである。(第39図参照)

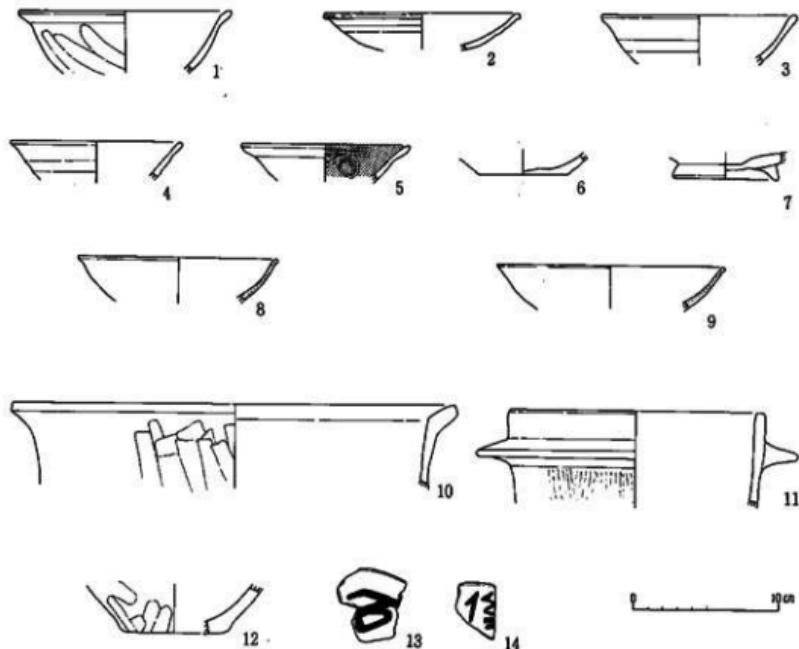
遺物 第15図No.1は口縁部が外反する口径10.6cmを測る口縁部から胴部下半までの破片である。No.2は外面範調整を施した玉状口縁を呈する口径12.8cm、器高3.8cmを測る。No.3は玉状口縁の坏で、口径12.6cm、器高3.6cm、底径5.5cmを測る。No.4は玉状口縁を呈し、口径11.8cm、器高3.2cm、底径3cmを測る。No.5は玉状口縁を呈し、口径15cm、器高4.5cm、底径5.6cmを測る。No.6は玉状口縁を呈し、口径15cm、器高4.4cm、底径4.6cmを測る。No.7は内部に渦巻き状の暗文がある底径4cmを測る。No.8は竈内出土の糸切り痕を有し底部から直線的に立ち上がりながら口縁部は若干肥大する坏で、口径13.2cm、器高3.5cm、底径4.6cmを測る。No.9は竈内出土で糸切り痕を有し、玉状の口縁部が外反する口径11.8cm、器高3.5cm、底径6cmを測る。No.10は糸切り痕を有する口縁が若干違反し、口径11.2cm、器高3.2cm、底径5.2cmを測る。No.11は比較的大きな玉状口縁を呈し、口径12cm、器高2.5cm、底径6cmを測る。No.12も同様な性格の坏で口径12cm、器高2.3cm、底径5.9cmを測る。No.13も同様な性格の坏で口径13.5cm、器高2.3cm、底径6cmを測る。No.14は玉状口縁を呈し、口径12.8cm、器高3.4cm、底径5.4cmを測る。No.16は口径13cm、器高3.4cm、底径7cmを測る。No.17は若干玉状口縁を呈し、胴部下半から底部にかけて範調整が見られる口径13cm、器高2.2cm、底径4.2cmを測る坏である。No.18は底部からの立ち上がりに丸みをもち、口縁部が若干厚くなる口径12.6cm、器高2.5cm、底径5cmを測る。No.20は玉状口縁を呈し、糸切り痕を有する坏で口径15.2cm、器高4.5cm、底径6.2cmを測る。No.21は東壁北側出土の糸切り痕を有する坏で、口径15.7cm、器高7.2cm、底径6cmを測る。No.23は高台付きの口縁が外反する内面黒色土器で、口径15.8cm、器高5.1cm、底径8cmを測る。No.22と24も高台付きの内面黒色土器で、底部には木葉痕がある。No.25は口縁は著しい凌ぎがあり、口径15.4cm、器高4.4cm、底径6.2cmを測る。No.26は灰釉陶器碗で、口径14cm、器高4.8cm、底径7.7cmを測る。No.27は灰釉碗で、口径17.4cm、器高4.9cm、底径9cmを測る。No.28は灰釉碗で口径14.2cm、器高4.7cm、底径9cmを測る。No.29~30は口径14cm代の灰釉碗の口縁部破片である。No.31は灰釉長頸壺の口縁部破片で口径11.6cmを測る。No.32・33は灰釉陶器碗の底部破片で底径はそれぞれ7cmと6.4cmを測る。No.42は住居東壁際の中央やや北で出土した坏で、口径12.6cm、器高3.5cm、底径5cmを測る外面には「吉」の墨書がある。No.43~46は甕で口径はそれぞれ15.4cm、9.8cm、17cm、16.2cmを測る。No.47は灰釉の壺の底部で底径19.8cmである。本住居から出土した土師器はNo.1・8がXV期に比定される以外はXIV期と推定される。

7号住居

概要 6号住居の西にある大型の溝の中にある2軒の小型の住居で、西側に位置するものを7-A号住居、東側に位置する住居を7-B号住居とした。B号住居は1号溝に切られているが、この溝はI-10杭の北で二手に別れて並行して流れている。A号住居の竈は溝によって削られており、痕跡も認めることはできない。B号住居では



第17図 7号住居(A)・(B)実測図 (1/6)



第18図 7号住居出土遺物 (1/4)

4個の主柱穴と竪の掘り込みが検出された。床面は溝によって中央部分を除いて削られている。この2軒の時期的前後関係については、把握できなかった。坏の底部は糸切り痕が残り、口縁部は玉状口縁を呈するものが多く認められた。遺物の出土量は、土師の坏が0.35kg、土師の甕が0.1kg、須恵器の破片が1点であり、灰釉陶器と須恵器と須恵器の出土量は他の住居址と比較すると少ない。

(1) 7-A号住居
形 状 住居は1号溝によって竪を除いて掘られているため、明確な形態は把握できなかつたが、東西に長い長方形を呈し、東壁3.2m、南壁3.8m、西壁3.3m、北壁3.7mを推測できる。また住居内柱穴が東西2間3.4m、南北1間2.5mで合計6カ所検出されている。

床面・壁 壁は削平されており、推測することも困難であるが、1号溝の東側と床面との比高差は60cmを測る。床面は南側では溝の浸食を受けているが、北側では比較的良好である。

竪 東壁の中央やや南に造られており、両袖には石を芯とする一般的な形態である。

(2) 7-B号住居
形 状 A号住居と南東部分で重複しているので、東壁と北壁は削られてはいるが、東壁3m、南壁3.5m、西壁3m、北壁3.5mを測る。

床面・壁 周溝は西壁及び北壁に確認されるが、他の壁は削平のため検出できなかった。床面は比較的平坦で、北東よりに深さ35cmの長方形の土壙がある。南壁は10cmを測る。

電 南壁の中央やや西よりにあり、掘り方は東西70cm南北65cmを測る。

遺物 第18図No.1は底部中央を欠くが、口縁部が大きく外反し、胴部以下は範調整がなされている坏で口径14cm、器高4.2cm、底径4.8cmを測る。No.2は肉厚がある底部中央を欠く破片で、玉状口縁を呈し、口径14cmを測る。No.3は玉状口縁を呈する口縁部破片で、口径13.6cmを測る。No.4は口径12cmを測る坏の口縁部破片である。No.5は形態はNo.1に良く似た口縁部を有する内面黒色土器で、暗文が認められる。口径は12cmを測る。No.6は底径6.2cmを測る底部破片である。No.7は高台付き坏の底部破片で、底径9.4cmを測る。No.8は口縁部は外反する灰釉陶器の口縁部破片で、口径14cmを測る。No.9は灰釉陶器の口縁部破片で口径15.8cmを測る。No.10は外面範調整の壺の口縁部破片で、口径31cmを測る。No.11は外面刷毛調整のある羽釜の破片で口径18cmを測る。No.12は壺の底部破片で底径7.4cmを測る。No.13・14は墨書のある坏の口縁部破片である。

8号住居

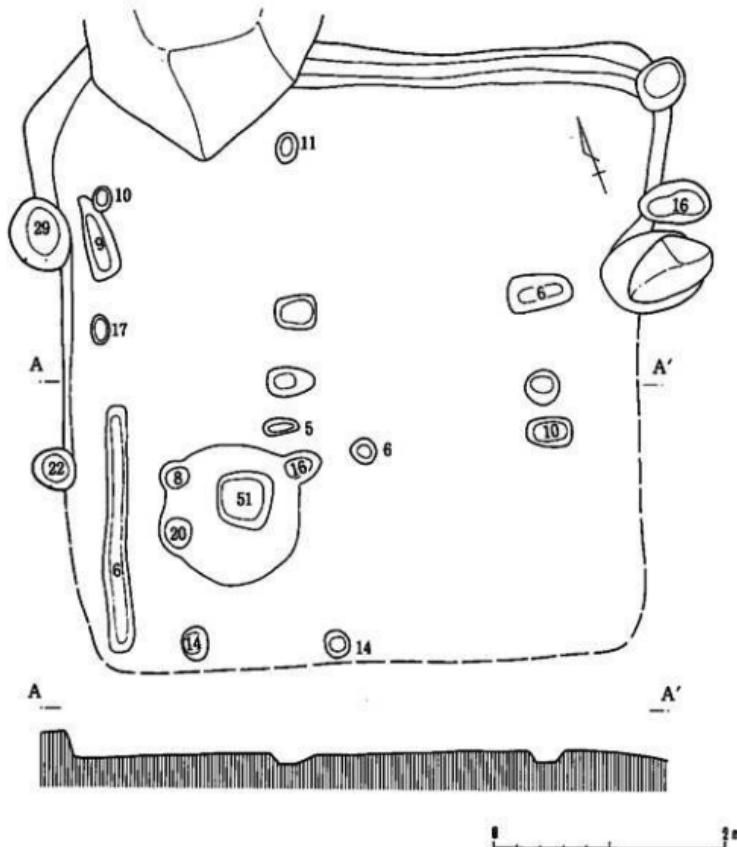
概要 G-10グリットの北側からF-10グリット南側に位置する比較的大きな平安時代の住居である。この住居の南東側の大半は1号溝によって削平されており残存状況は良くないが、西側には若干の覆土が残されている。住居の北西隅には大きな石が露頭している。出土した遺物の総量は2.9kgで、注目されるのは須恵器の出土量が0.8kg、次いで灰釉陶器の0.4kgであるのに対しても土師器の坏が2.1kgと、他の住居からの土師器と須恵器及び灰釉陶器との出土比率からすると特異な状況である。本遺跡で唯一の山茶碗の底部が出土している。また、土師器の蓋と考えられる内面に刷毛目が残る破片が1点出土している。一方、坏の多くは玉状口縁を呈している。なお、本住居址出土の灰釉陶器と10号住居址出土の灰釉陶器が接合する。

形状 方形で、東壁4.6m、南壁4.5m、西壁5m、北壁4.8mを測る。

床面・壁 周溝は北壁の露頭の石から東側のみに確認され、幅30cm、深さ cmを測る。

電 東壁に造られており、1号溝によって削平されているが、焼土は確認された。

遺物 第21図No.1は底部糸切りで、中胴部に丸みをもち外面範調整の施された坏で口径13.5cm、器高4.2cm、底径6.6cmを測り、玉状口縁を呈している。No.2は底部から口縁部に直線的に立ち上がり、玉状口縁を呈する坏で口径12cm、器高3.8cm、底径5cmを測る。No.3は底部糸切りの坏で、口縁部は凌ぎ口縁を呈し、口径13cm、器高3.8cm、底径6.8cmを測る。No.4は底部糸切りの坏の底部破片で、底径6.8cmを測る。No.5は底部糸切りで玉状口縁を呈する坏で、口径11.4cm、器高2.6cm、底径5.4cmを測る。No.6は底部から口縁部に直線的に立ち上がり、玉状口縁を呈する坏の口縁部から底部

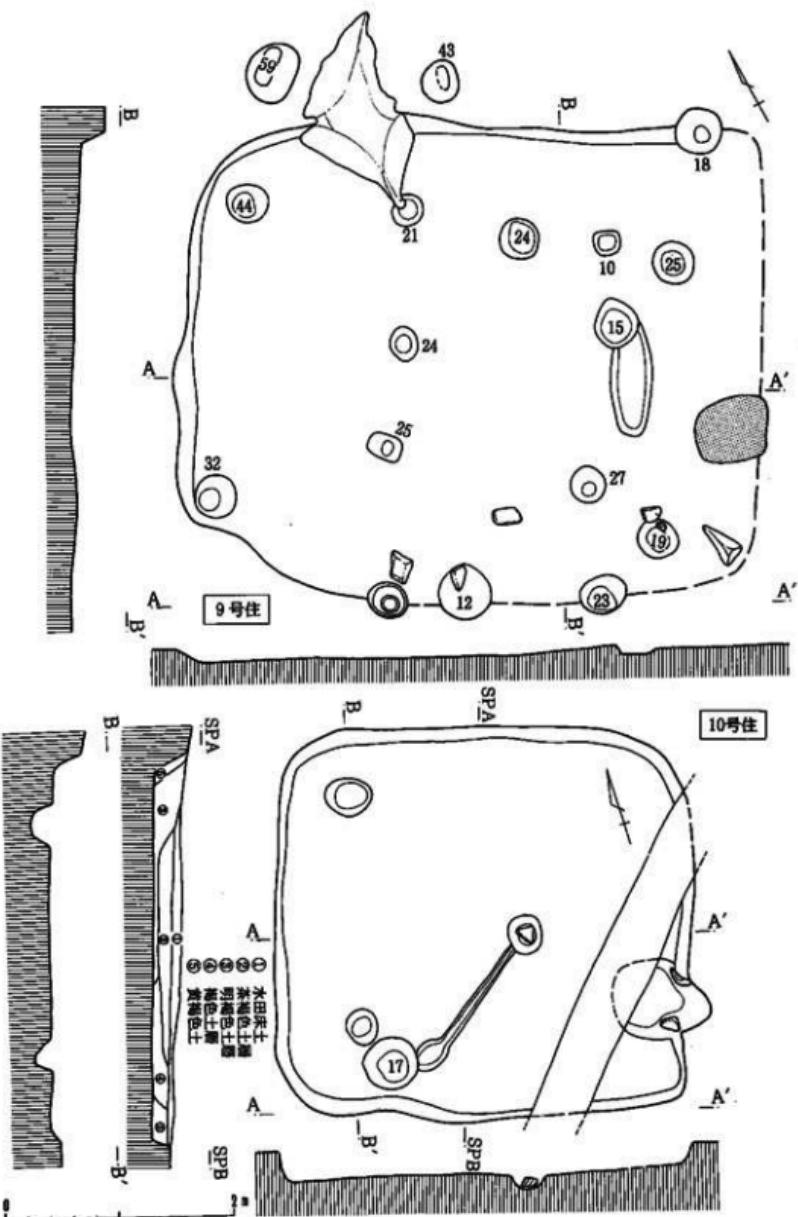


第19図 8号住居実測図(%)

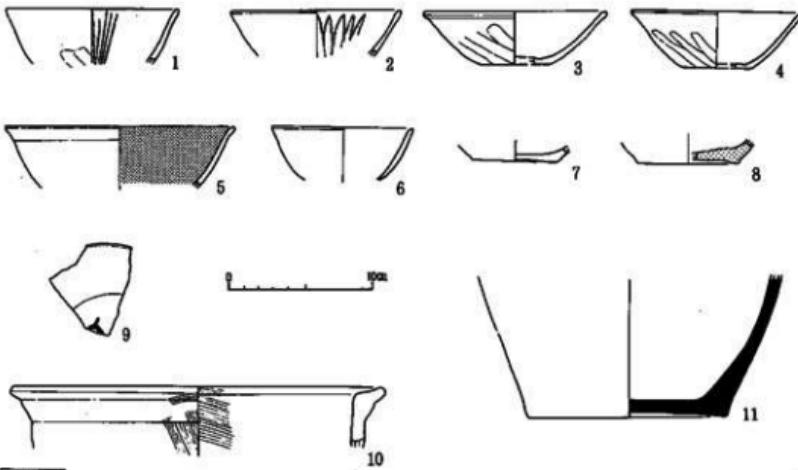
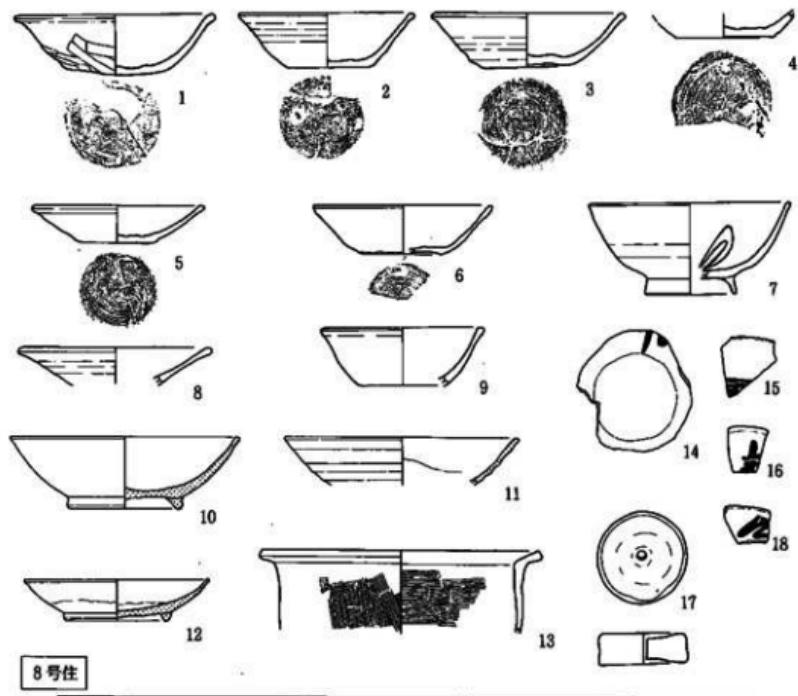
の破片で、口径12.6cm、器高3.4cm、底径5.7cmを測る。No.7は高台付きの碗で、口径14cm、器高6.3cm、底径6.4cmを測り、内面に暗文がある。No.8は玉状口縁部を呈する壊の口縁部破片で口径13.5cmを測る。No.9は玉状口縁を呈する壊の破片で口径11.2cmを測る。No.10は灰釉陶器で、口径15.8cm、器高5cm、底径7.8cmを測る。No.11は灰釉陶器の口縁部破片で、口径16.3cmを測る。No.12は灰釉陶器で、口径12.8cm、器高2.9cm、底径7cmを測る。No.13は内外面刷毛調整の臺で口径19.4cmを測る。No.14～16は墨書き土器の破片である。No.17は土製紡錘車で径3.1cm、穿孔3mmを測る。

9号住居

概要 F-10棟が住居の中央にあり、8号住居の西に隣接している東西に若干長い方形を



第20図 9・10号住居実測図 (単位)



第21図 8・9号住居出土遺物 (1/2)

呈する。耕作によって、東側と南側は一部床面まで削平されているが、北側と西側は20cm前後の壁が残っている。竈は東側にあり、住居内外に柱穴が検出されているが、この柱穴群は重複している掘立柱建物に伴うものと考えられる。北壁には自然石の露頭がある。出土した遺物の総量は1kgであるが、内訳は須恵器が0.7kg土師の壺が0.1kg土師の壺が0.1kg灰釉陶器は2片縄文土器が0.05kgである。縄文土器の多くは中期であるが、壺には糸切り痕を有する玉状口縁と暗文のある内面黒色土器がある。

形 状 東壁3.7m、南壁4.8m、西壁3.2m、北壁4.7mを測るが、南西隅は住居内張り出しがある。

床面・壁 床面は中央から南が若干低いが、全体としては平坦である。床面全体に掘立柱建物址の柱穴が検出されている。壁が残っている北側では深さ20cm前後を測る。

竈 竈は東壁の中央やや南に造られているが、削平されて焼土が残る程度である。

遺 物 第21図No.1は外面範調整で内面には暗文が施された壺の口縁部破片で、口径12cmを測る。No.2は玉状口縁を呈する壺の破片で口径12cmを測る。No.3は外面範調整を施した玉状口縁の壺の破片で、口径13cm、器高3.7cm、底径5cmを測る。No.4は外面範調整をした壺の口縁部から底部の破片で、口径12.9cm、器高3.9cm、底径4cmを測る。No.5は口縁部が若干外反する内面黒色土器破片で、口径16cmを測る。No.8は灰釉陶器の底部破片で、口径7cmを測る。No.9は墨書き土器の破片である。No.10は壺の口縁部破片で、口径26cmを測る。No.11は須恵器の壺で、底径7cmを測る。

10号住居

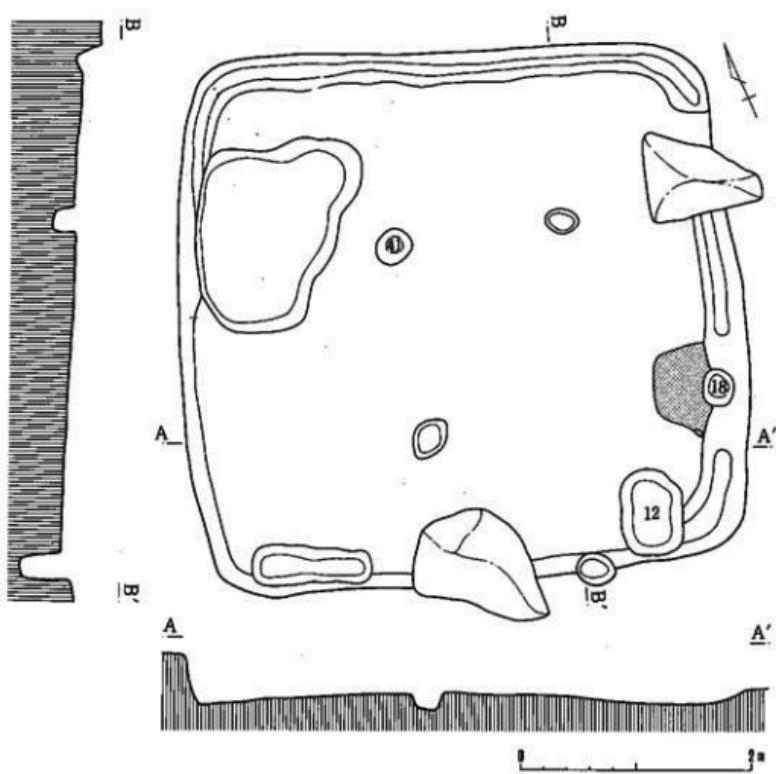
概 要 9号住居の北西に位置するが、この地区は掘立柱建物址に伴うと考えられる柱穴が多く検出されているところで、本住居にも柱穴が4カ所検出されている。覆土の厚さは、北壁付近では30cmを測るが、南壁付近では15cm前後である。竈の西半分は水田の排水用暗渠によって切られている。出土した遺物の総量は1.4kgで灰釉陶器が0.5kg、須恵器が0.2kg、土師の壺が0.7kg、土師の壺が0.6kg、縄文土器は2片である。また灰釉陶器の破片が8号住居出土遺物と接合している。

形 状 東西に若干長い方形を呈し、東壁2.75m、南壁3.2m、西壁2.8m、北壁3mを測る。

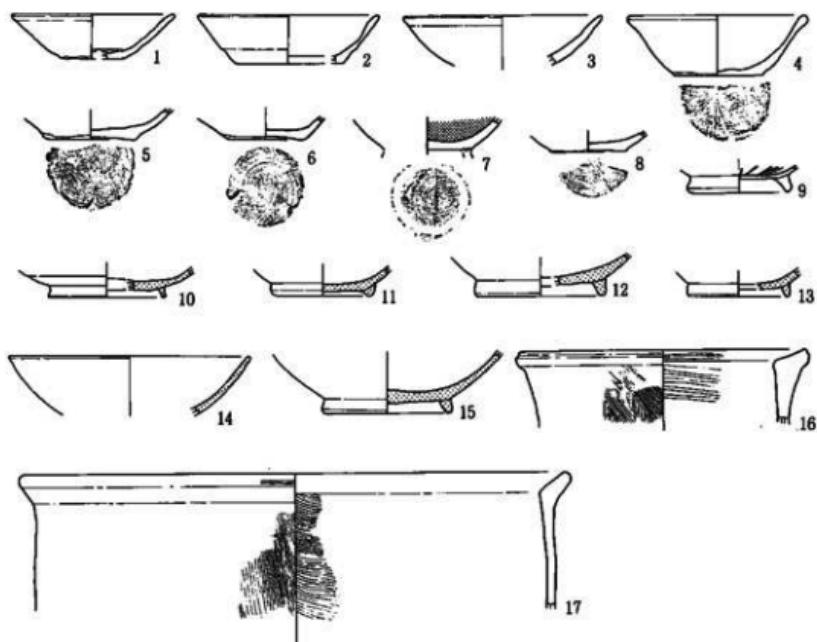
床面・壁 床面は南に若干傾斜するが、内部の起伏は無く平坦である。西壁から50cm、東に2m間隔で長径30~35cmの柱穴が2カ所検出され、床面からの深さは北側が20cm、南側が15cmである。南壁際にも径45cm、深さ18cmの柱穴がある。床の中央にも径35cm、深さ15cmの底部に石が入った柱穴がある。

竈 両袖の芯に石を立てた形態であるが、暗渠によって炊き口部分は壊されている。

遺 物 第23図No.1は底部から直線的に立ち上がり、若干外反する口縁を有し、口径11.2cm、器高3.1cm、底径4.4cmを測る。No.2は胴部下半に稜があり、口縁部下が肥大する壺で、口径12.6cm、器高3.4cm、底径7.4cmを測る。No.3は底部から丸みをもって立ち上がる壺の口縁部破片で、口径13.8cmを測る。No.4は底部糸切り痕が残る玉状口縁を



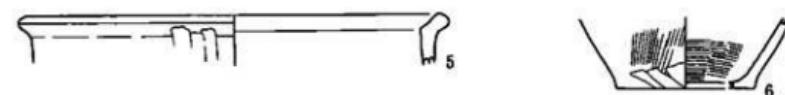
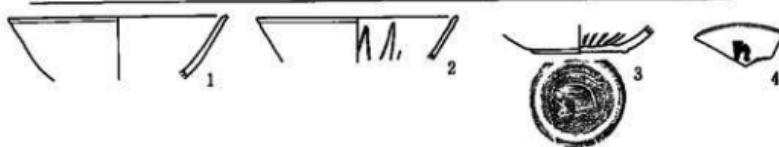
第22図 11号住居実測図 (%)



10号住



11号住



12号住

0 10mm

第23図 10・11・12号住居出土遺物 (1/4)

呈する壺で、口径12.4cm、器高4.2cm、底径6cmを測る。No.5は底部糸切りを有する壺の底部破片で底径6.2cmを測る。No.6も同様で底径5cmを測る。No.7は高台付きの内面黒色土器の底部破片である。No.9は暗文のある高台付き壺で、底径6.7cmを測る。No.10～13は灰釉陶器の底部破片で底径はそれぞれ8.1cm、6cm、9cm、6cmを測る。No.14は灰釉陶器の口縁部破片で14.4cmを測る。No.15は灰釉陶器の口縁部を欠く破片で、底径8.4cmを測る。No.16と17は壺の口縁部破片で、口径は19.6cmと38cmを測る。

11号住居

- 概要 E-11グリットに位置する住居で、南壁と東壁には露頭する1.5m前後の自然石がある。床面は南側に傾斜しているが、比較的堅くしっかりしている。
- 形状 東西に若干長い方形を呈し、東壁3.7m、南壁4m、西壁4m、北壁3.7mを測る。西壁北側には不整形で東西1.3m、南北1.6m、深さ22cmを測る土壙がある。
- 床面・壁 床面は全体としては南側に傾斜しているが、中央部分は若干高くなっている。また柱穴が3個あり、西側土壙よりが径30cm、深さ40cm、東側は長径30cm、短径20cm、深さ19cm、南側は長径40cm、短径28cmを深さ13cmを測る。東南隅には長径75cm、短径55cmを測る楕円形の土壙があり、南西隅には東西105cm、南北30cm、深さ8cm前後の周溝状の凹がある。周溝は南壁と西壁を除いて巡り、幅30cm、深さ5cm前後を測る。南壁中央にある自然石の東には径26cm、深さ38cm前後の柱穴がある。
- 塗 東壁の南よりに築かれており、焼土は東西50cm、南北80cmを範囲に確認された。焼土より東の壁には径30cmの柱穴があり、竈は擾乱されている。
- 遺物 No.1と2は綠釉陶器の口縁部破片で、口径はそれぞれ11cm、9cmを測る。

12号住居

- 概要 出土した遺物は0.7kgで、内訳は須恵器が0.2kg、灰釉陶器が0.05kg、土師の壺が0.1kg、土師の壺が0.25kg、繩文土器が0.1kgである。壺の形状からXII期と考えられるが、壺は口縁部が玉状口縁を呈するものが多い。水田造成や耕作によって著しく削られしており住居の形態などは把握できなかった。
- 遺物 第23図No.1は口縁部が若干外反する壺の口縁部破片で、口径15.2cmを測る。No.2は口縁部が若干屈曲する壺の口縁部破片で口径14cmを測り、内面に暗文がある。No.3は内面に暗文のある削り出し高台の壺の底部破片で、底径6.8cmを測る。No.4は墨書き土器の口縁部破片である。No.5は壺の口縁部破片で口径30cm、No.6は底部破片で、底径9.6cmを測る。

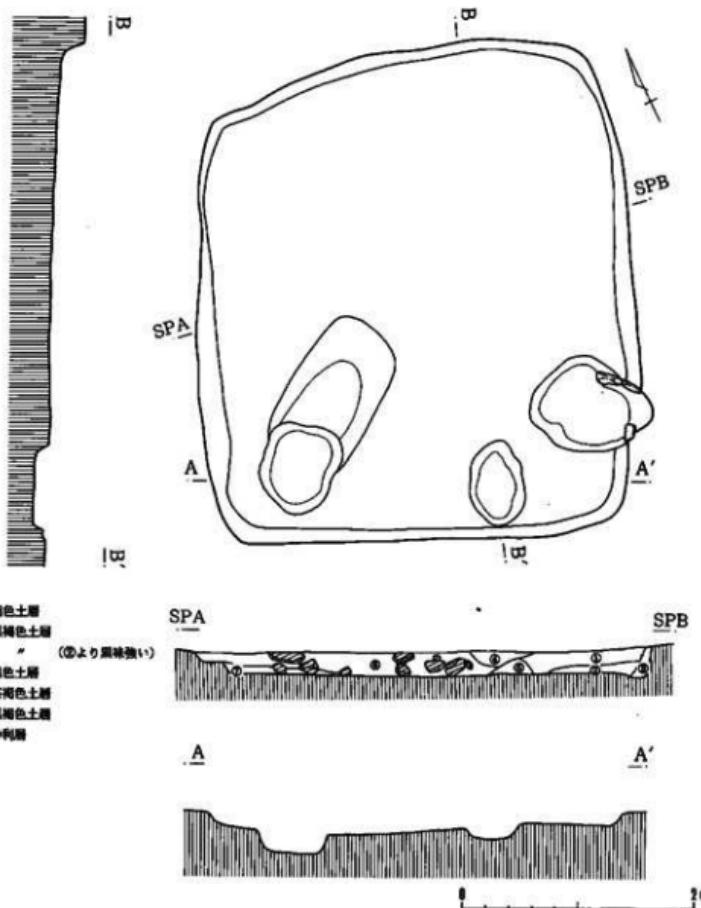
13号住居

- 概要 この住居はJ-12坑の北に位置し、西側を5号溝に切られている住居で、出土遺物の多くはXIV期であるが、若干XIII期やXII期が認められる。出土した遺物総量は4kg

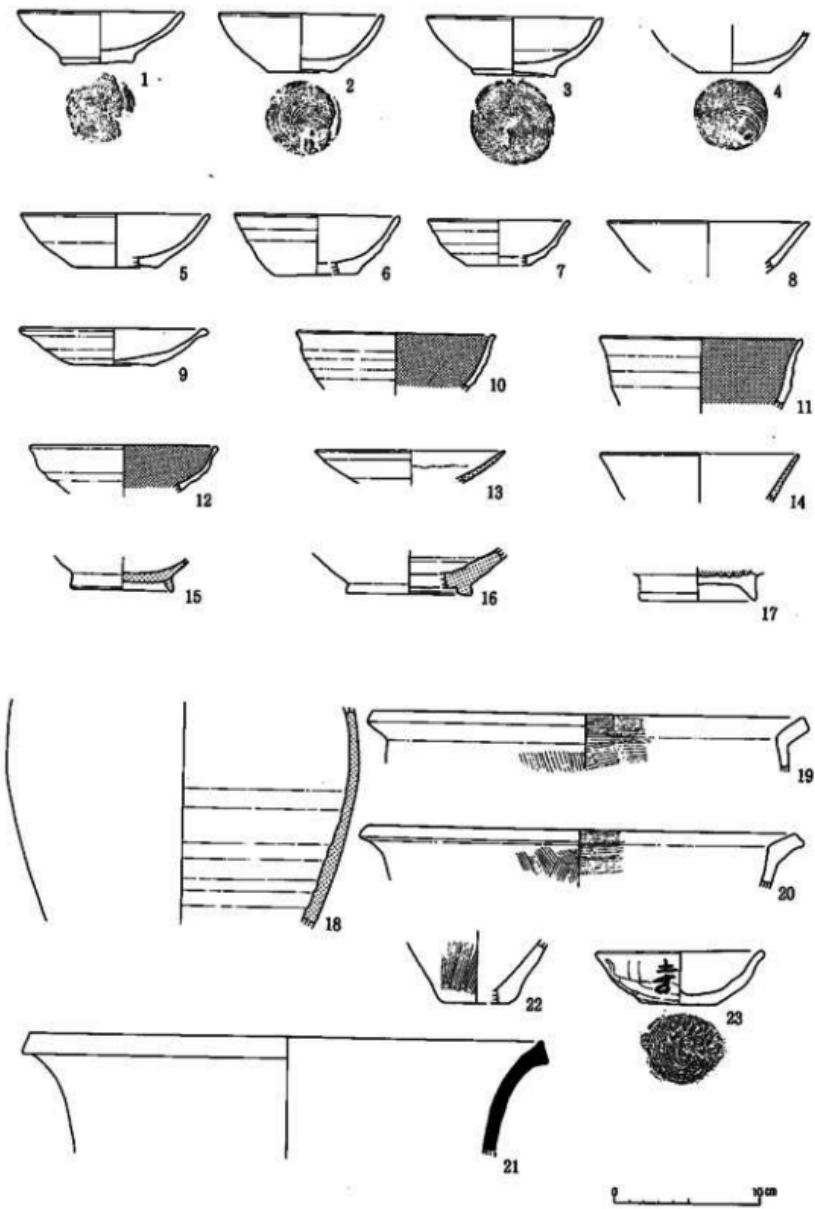
を測り、灰釉陶器が0.7kg、須恵器が0.6kg、土師の壺が2kgで、土師の甕は0.4kg、繩文土器は0.3kgである。壺は玉状口縁は認められず、底部は糸切り痕を有し、胴部に縫が入るものが多く認められるが、箇調整がなされたものは少ない。また内面黒色土器は少なく、高台付きの大型壺が2点ある。

形 状 東壁より西壁の長さが短い方形を呈し、東壁3.8m、南壁3.1m、西壁3.5m、北壁3.1mを測る。

床面・壁 周溝は無いが壁際には若干低くなっている。壁は東壁が20cm、南壁5cm、西壁数cm、北壁17cmを測る。床面は比較的水平で、南東には長径70cm、短径50cm、深さ数cmの



第24図 13号住居実測図 (Jm)



第25圖 13号住居出土遺物 (1/4)

土壤が、南西には径75cm前後の土壌と長径130cm短径80cm、深さ20cmの橢円形の土壙が重複している。

電 東西105cm、南北85cmの掘り方を有し、袖の芯に石を用いた構造で、東壁の南に造られている。

遺 物 第25図No.1は底部糸切り痕のある壺で、口径12.4cm、器高4cm、底径5.8cmを測り、底部が厚く造られている。No.2もNo.1と同様な器形を呈し、口径11.6cm、器高4cm、底径5cmを測る。No.3も同様な器形を呈し、口径11.6cm、器高4cm、底径5.1cmを測る。No.4も同様な器形であるが口縁部を欠き底径5cmを測る。No.5は口縁部から底部にかけての破片で口径13cm、器高3.37cm、底径5.6cmを測る。No.6も同様な破片で口径11.6cm、器高4.1cm、底径6.1cmを測る。No.7は小型の壺の口縁部破片で、口径10cmを測る。No.8は口縁部破片で口径14cmを測る。No.9は玉状口縁を呈し、口径13cm、器高2.5cm、底径6cmを測る。No.10は内面黒色土器の屈曲する口縁部破片で、口径14cmを測る。No.11も内面黒色土器の口縁部破片で、口径14cmを測る。No.12は内面黒色土器の屈曲する口縁部破片で、口径13cmを測る。No.13は灰釉陶器の口縁部破片で、口径13cmを測る。No.14~17は灰釉陶器の口縁部及び底部破片である。No.18は灰釉陶の胸部破片である。No.19~20は壺の破片で口径いずれも30cmを測る。No.21は須恵器の口縁部破片である。No.23は墨書き土器で口径11.5cm、器高3.7cm底径5.4cmを測る。

14号住居

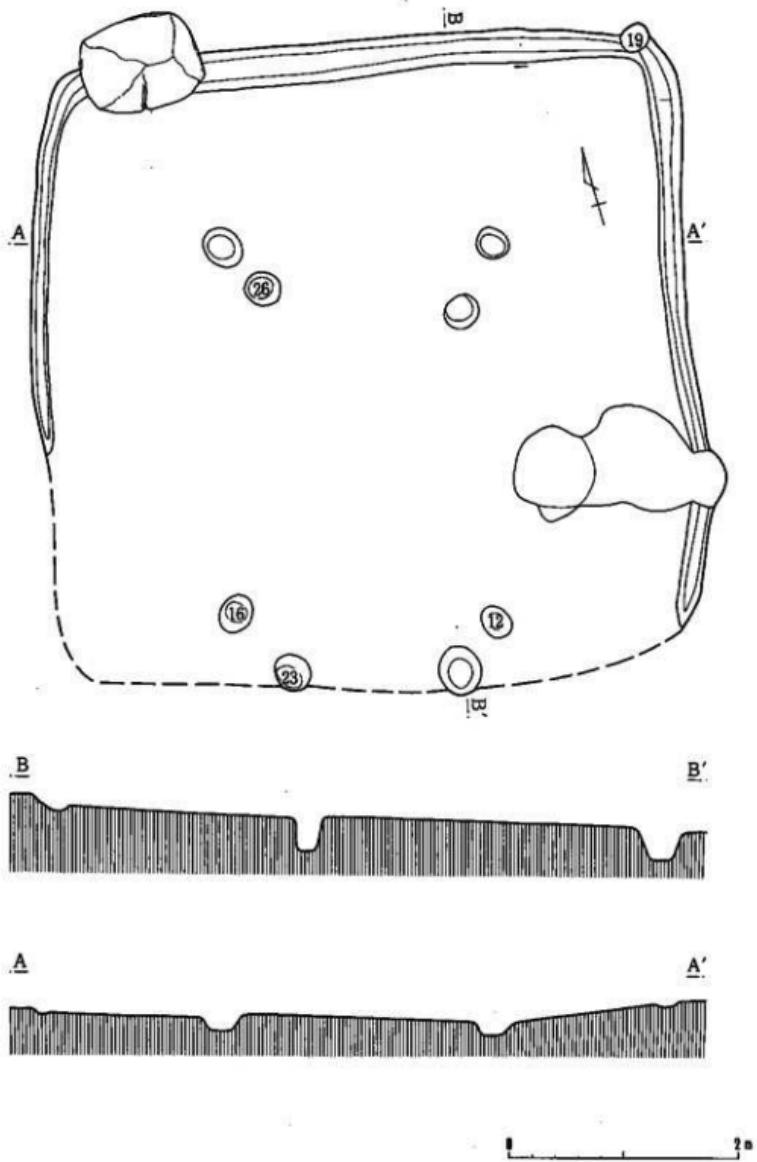
概 要 遺跡の南I-11グリットに位置し、北には15号住居、南西には13号住居、南には7号住居、東には1号溝がある。南西に傾斜している地形のため、水田造成時に住居の南西側の壁は削平されている。ローム層の堆積が浅い場所のため住居は疊層を掘り込んでおり、周辺には1mを越える石が露出している。出土した遺物の総量は0.65kgを測り、壺の底部は糸切り痕が残り、口縁部は玉状口縁が主体である。内面黒色土器との比率は概ね4:1である。羽釜と壺の破片が出土しているが、壺の時期はⅡ期が中心である。

形 状 東壁4.9m、南壁5.3m、西壁5m、北壁4.9mを測る方形を呈する。

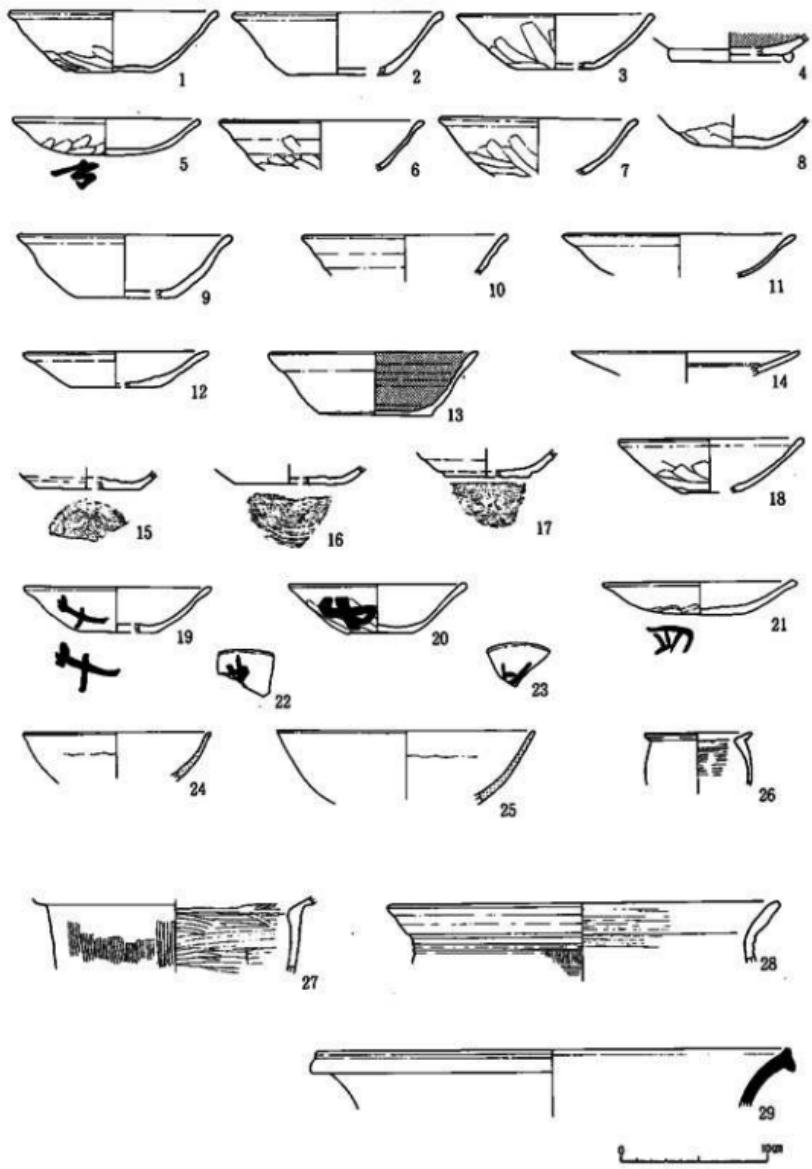
床面・壁 床面には径30cm、深さ20cm前後の柱穴が8個検出されているが、住居に伴うかは不明である。残っている北壁は6cm、東壁も6cm前後を測る。周溝は幅20cm、深さ3cm前後を測り、全体に掘られていたが南・西壁については削平で確認できない。

電 東壁南よりに位置しているが、著しい擾乱を受けており東西1.8m、南北0.8mの電の掘り込み部分を確認したのみである。

遺 物 第27図No.1は外反する玉状口縁を呈し、底部範調整を施した口径14.6cm、器高4.2cm、底径6cmを測る壺である。No.2は外反する玉状口縁を呈し、口径14.8cm、器高4.3cm、底径7cmを測る。No.3は玉状口縁を呈し、外面範調整を施し、口径13.6cm、器高3.8cm、底径5.4cmを測る。No.4は高台付き内面黒色土器の底部破片で、底径2cmを測る。

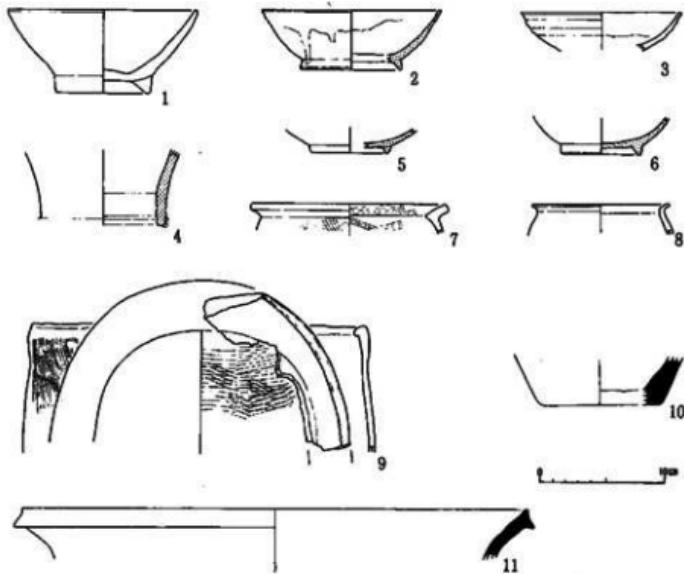


第20図 14号住居実測図 (%)

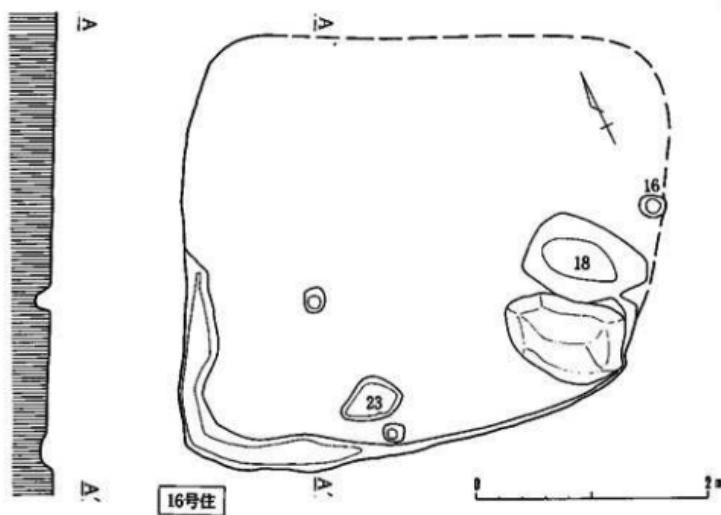
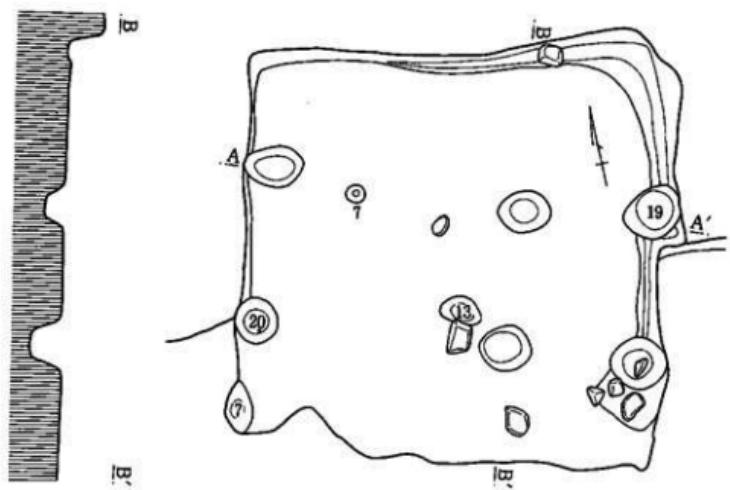


第27图 14号住居出土遗物 (1/4)

No.5は外面範調整された外反する玉状口縁を呈する壺の口縁部破片で、口径13.8cmを測る。No.6は外面範調整された外反する玉状口縁を呈する口縁部破片で、口径14.2cmを測る。No.7は外反する玉状口縁を呈し、肩部下半が範調整された破片で、口径13.6cmを測る。No.8は底部外面が範調整された壺の破片で底径4.6cmを測る。No.9は全体に肉厚があり、内部底部にはタール状物質が付着し、口縁部が外反する壺で、口径15cm、器高4.3cm、底径6.8cmを測る。No.10は口径14.4cmを測る壺の口縁部破片である。No.11はいわゆる折り返し縁状の玉状口縁を呈し、口径16cmを測る。No.12は底部コーナーが肥大する壺で、口径13cm、器高2.4cm、底径6cmを測る。No.13はいわゆる玉状口縁を呈する若干口縁部が歪んでいる内面黒色土器で、口径14.6cm、器高4.5cm、底径6cmを測る。No.14は縦軸の段皿で、口径15.7cmを測る。No.15～17は底部糸切り痕を有する壺の底部破片である。No.18は外面範調整され若干内湾する壺の底部を除く破片で、口径12.8cm、器高3.7cm、底径4cmを測る。No.19は外反する玉状口縁を呈する壺で、口径12.8cm、器高3.5cm、底径4.8cmを測り、墨書がある。No.20は口縁部は肥大し、外面範調整の壺で、口径12.4cm、器高3.5cm、底径4.8cmを測り、「巾」の墨書がある。No.23と24は灰釉陶器の口縁部破片で口径13cmと18cmを測る。No.25は内面に煤が付着した小型の壺で口径7.4cmである。No.26は内面に煤が付着した壺の口縁部付近の破片で、No.27はろくろ整形の壺の口縁部破片で口径27.2cmを測る。No.28は須恵器の壺の口縁部で口径33cmを測る。



第28図 15号住居出土遺物 (1/4)



第20図 15・16号住実測図 (1/6)

15号住居

概要 溝を挟んで14号住居の北側に位置し、南半分はその溝に切られている。また掘立柱建物址とも重複しており、住居の床面には柱穴が多く検出されている。出土した遺物の総量は1kgを測り、内訳は灰釉陶器が0.3kg、須恵器が0.5kg、土師器の坏が0.2kgである。羽釜と置竈の破片が出土し、須恵器は胴部破片が主体である。坏の口縁部は玉状口縁で、底部は範調整されているものが主体である。また内面黒色土器との比率は概ね3:1で内面黒色土器が少ない。灰釉陶器の破片には5号住居からの出土遺物と接合するものが検出されている。

形状 方形を呈し、東壁3.2m、南壁3.5m、西壁3.1m、北壁3.2mを測る。

床面・壁 床面は平坦で、周溝は北から東側に検出されており、幅20cm、深さ5cm前後を測る。残存している東壁は15cm、西壁は15cm、北壁は25cm前後である。

窓 東壁に築かれていたと考えられるが、柱穴の攢乱を受けていて残存部分も確認できなかった。

遺物 第28図No.1は高台付き坏で内外面を刷毛調整が施されており、口径15.2cm、器高6.5cm、底径7.5cmを測る。胎土には金雲母が含まれ高台裏には木葉痕が残る。No.2は灰釉陶器瓶で、口径14.4cm、器高4.7cm、底径8.3cmを測る。No.3は灰釉陶器の口縁部破片で口径13cmを測る。No.4は長頸壺の頸部中央の破片である。No.5は灰釉陶器の底部破片で、底径6.5cmを測る。No.6は灰釉陶器の底部破片で、底径6.3cmを測る。No.7は小型の甕の口縁部破片で、口径16cmを測る。No.8は小型の甕の口縁部破片で口径11cmを測る。No.9は置竈の破片で口径27.5cmを測る。No.10は須恵器の甕の底部破片で、底径10cmを測る。No.11は須恵器の口縁部破片で口径41cmを測る。

16号住居

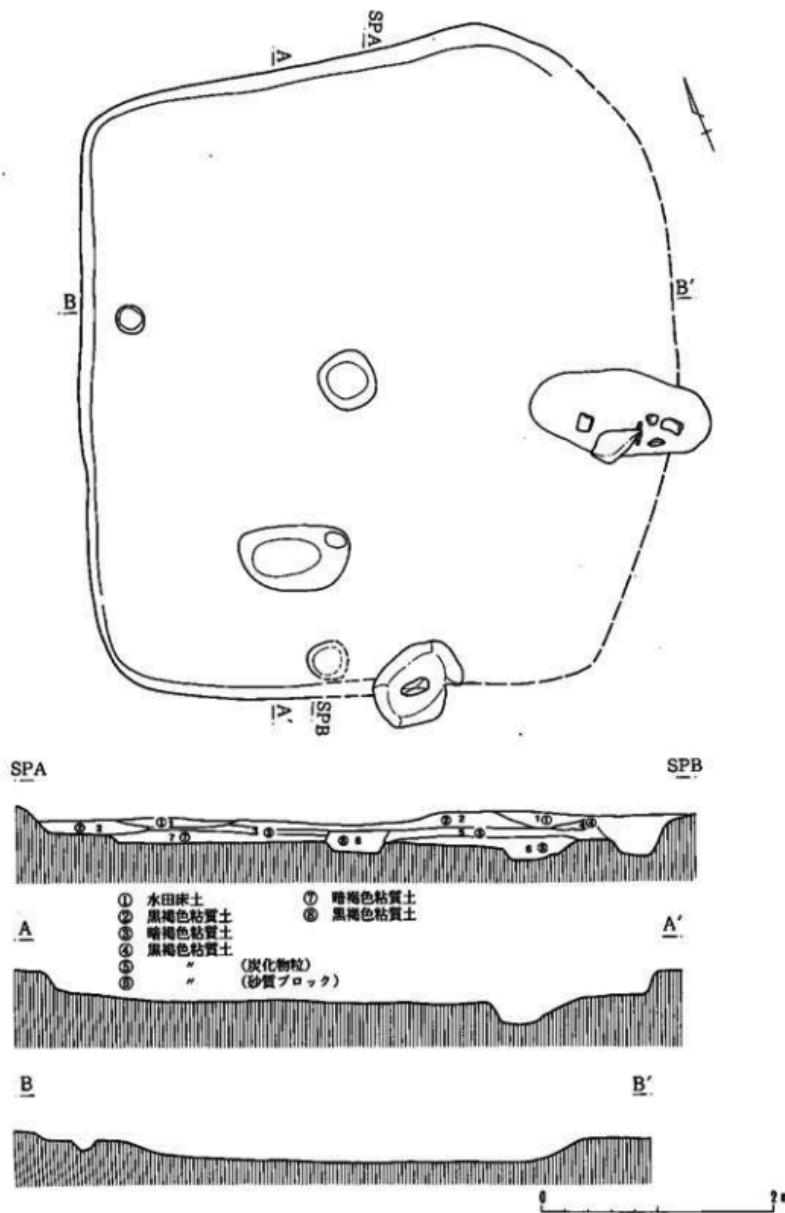
概要 G-11グリットにあり、南には15号住居、北には9号住居がある。南西及び西には掘立柱建物址がある。北壁と東壁は削平されており住居の範囲は明確ではなく、南東隅には自然石が露頭している。出土した遺物の総量は坏の口縁部形態は、若干肥大する程度で、高台付き坏も出土している。甕はいわゆる甲斐型甕が主体である。

形状 東西に長い方形を呈するものと考えられるが、北東側は床面まで達する削平を受けている。東壁3.7m、南壁2.7m、南壁3.5m、西壁3.4mを測る。

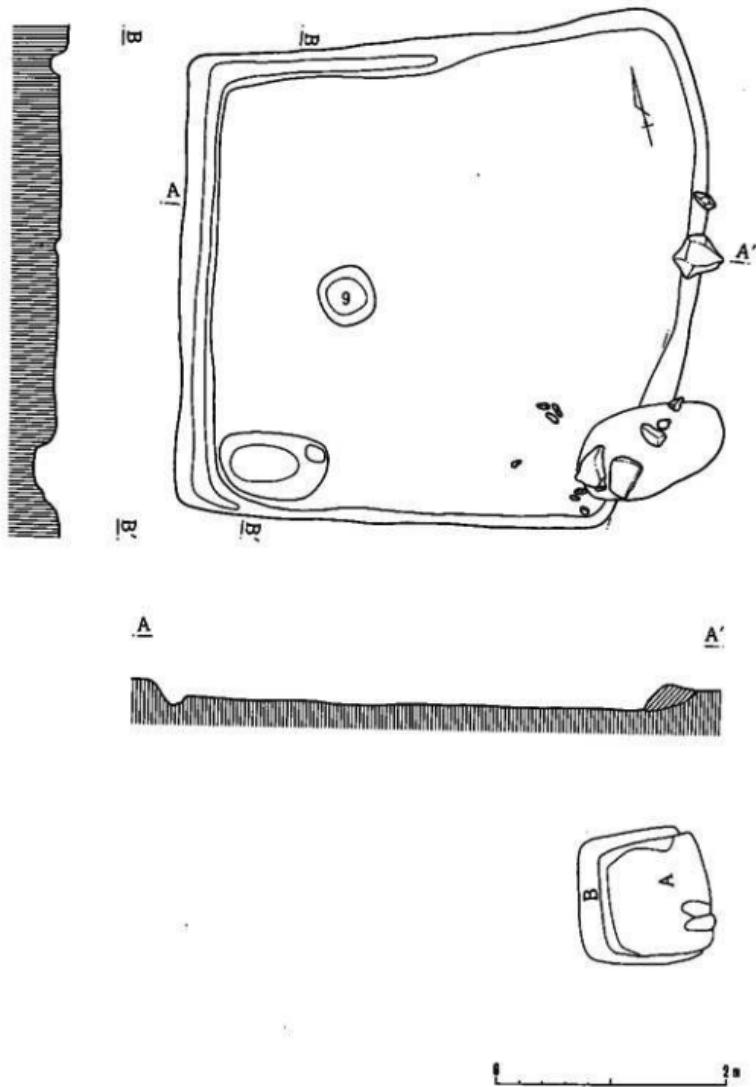
床面・壁 床面は若干南に傾斜しているが平坦である。周溝は北西隅を中心に幅30cm、深さ5cm前後を測る。

竈 東壁南側にある自然石の露頭を袖として築かれているが、著しい攢乱で原形を止めている。

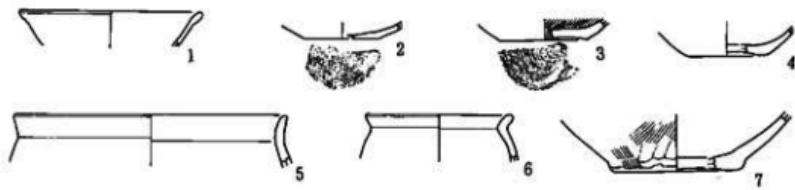
遺物 第32図No.1は玉状口縁を呈する坏の口縁部破片で、口径12.8cmを測る。No.2は糸切り痕を残す坏の底部破片で、底径5.2cmを測る。No.3は暗文が施されている内面黒色土器の糸切り痕を残す底部破片で、底径6cmを測る。No.4は坏の底部破片で底径



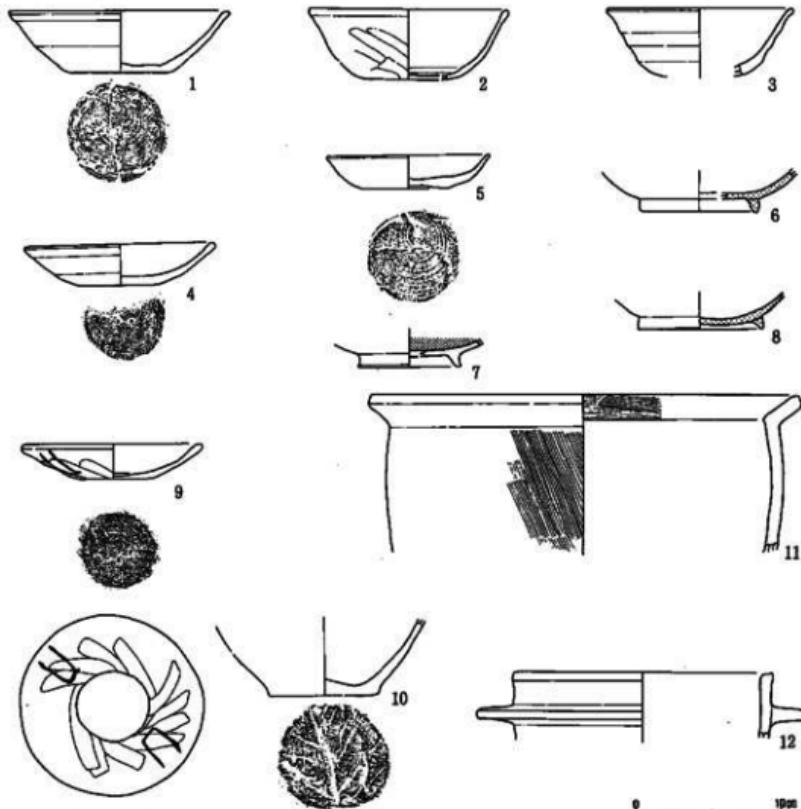
第30図 17号住居(A)実測図 (Y%)



第31図 17号住居の実測図 (%)



16号住



17号住

第32圖 16・17号住居出土遺物 (1/2)

5 cmを測る。No.5は壺の口縁部破片で口径19cmを測る。No.6は小型壺の口縁部破片で、口径10.3cmを測る。No.7は外面刷毛調整が施された壺の底部破片で、底径8.6cmを測る。

17号住居

概要 最も西で検出された住居で、I-14グリットにある。2軒が重複しており、窓は東側に築かれている。大型の住居であるA号住居を小型のB号住居が切っており、また住居の東側を排水用暗渠が南北に継続している。A号住居は覆土中に多量の焼土と炭が含まれているため、火災を受けたものと考えられる。B号住居の覆土中にも焼土や炭が含まれており、やはり火災痕跡と推測できる。出土遺物の多くはB号住居に伴うものと考えられるが、B号住居と重複していない部分からの遺物も若干検出されている。出土した遺物の総量は、1.5kgを測り、内訳は須恵器は0.5kg、灰釉陶器が0.2kg、土師器の壺が0.4kg、土師器の壺が0.4kgである。須恵器の壺の底部破片には14号住居出土遺物と接合する破片が検出されている。

形状 A号住居の南東隅は水田造成のときに削平されている。方形を呈するが、東壁は若干曲線を描いて5.5m、南壁3.8m、西壁4.8m、北壁3.8mを測る。B号住居も方形を呈し、東壁4.1m、南壁3.3m、西壁3.5m、北壁3.6mを測る。

床面・壁 A号住居の東壁は削平されているが、南壁は12cm、西壁13cm、北壁20cm前後の深さを測る。床面には焼土と炭が多量に検出されている。B号住居は東壁数cm、南壁6cm、西壁18cm、北壁10cmを測る。幅40cm、深さ数cmの周溝がB号住居の西から北側に認められる。床面は柔らかく締った三和土状の床は検出されない。

竈 住居の東壁には2基の竈が検出されているが同時に存在したものではなく、それぞれA号住居に伴う竈は北側、B住居に伴うものは南側と考えられる。

遺物 第32図No.1はB住居出土で、底部から直線的に立ち上がり、口縁部が若干外反する糸切り痕の残る壺で、口径15.2cm、器高4.2cm、底径7.5cmを測る。No.2は玉状口縁を呈し上半部には撫で痕、下半部調整が施されている壺で、口径14cm、器高4.9cm、底径7.2cmを測る。No.3は外反する口縁部を有し、胴部には水引痕の稜がある壺の破片で口径13cmを測る。No.4はB号住居の窓南側土塗からの出土で、若干内挽ぎみに立ち上がり、玉状口縁を呈する壺で、口径13.2cm、器高2.8cm、底径5.6cmを測る。No.5もNo.4と同じ土塗からの出土で、底部糸切り痕を有し、口径11.2cm、器高2.3cm、底径5.1cmを測る。No.6は灰釉陶器の底部破片で、底径8.2cmを測る。No.7は灰釉陶器の底部破片で、底径7.2cmを測る。No.8は灰釉陶器の底部破片で、高台は三日月高台を呈し、底径8.6cmを測る。No.9は玉状口縁を呈し、糸切り痕を残す墨書き土器で、口径12.5cm、器高2.4cm、底径5cmを測る。No.10はB号住居の東壁際から出土し、底部に木葉痕を残す壺の底部破片で、底径7.6cmを測る。No.11は壺の口縁部破片で、口径29.6cmを測る。No.12はB号住居出土の羽釜の破片で、口径18cmを測る。

18号住居

概 要 1号溝の上流の中州とでも表現できるC-9グリットに位置し、東壁に竈を有する方形の平安時代の住居である。また、南東10mには1号住居、北4mには19号住居が位置している。住居と溝の新旧関係は、この住居の状況からは溝は新しいと言える。削平を著しく受けしており、東壁を除いて壁は消滅している。出土した遺物の総量は0.6kgを測り、内訳は須恵器が0.2kg、灰釉陶器が0.2kg、土師器の壺が0.2kgである。壺の形態は玉状口縁を呈し、底部は窓調整を受けたものが主体であるが、糸切り痕を残す壺及び内面黒色土器も若干認められる。壺の口縁部形態はⅩが主体であるが、Ⅷ期の特徴を有する口縁部破片が1点出土している。

形 状 東西に長い方形を呈し、東壁2.5m、南壁2.9m、西壁2.4m、北壁2.9mを測る。

床面・壁 床面は1号溝に削られ、壁も東側で15cmを測ることができる程度である。

竈 削平のため原形を留めていないが、焼土で東壁の南に築かれていたことが確認された。

遺 物 第34図No.1は玉状口縁を呈する壺で、口径11.8cm、器高2.2cm、底径6cmを測る。No.2は小型の壺で、口径10.5cm、器高8.9cm、底径6cmを測り、外面下半に窓調整されている。No.3は小型壺の底部破片で、底径6cmを測る。No.4は高台付き壺の底部破片で、高台裏面には糸切り痕が残る。底径7cmを測る。No.5は墨書き土器の底部上の破片であるが書かれている文字は不明である。No.6は壺の口縁部から肩部の破片で、口径18cmを測る。外面は継、内面は横の刷毛調整が施されている。No.7は壺の底部破片で、底径9cmを測る。外面は継、内面は横の刷毛調整が施されている。

19号住居

概 要 本遺跡の北東に位置する住居群の中の1号溝右岸にある5軒の内の1軒で、C-9グリットの北側に位置する。南側は溝によって切られている方形を呈する平安時代の住居である。出土した遺物は造構の残存状況が良くなかったのに比較すると豊富である。出土した遺物の総量は1kgで、内訳は土師の壺が0.5kg、土師の壺が0.1kg、繩文土器が0.3kg、須恵器が2片、灰釉陶器が1片である。壺の形態はⅪ～Ⅼ期であるが、壺は若干玉縁を呈し、糸切り痕を窓調整したものが多い。

形 状 圓丸方形を呈し、東壁2.3m、南壁2.2m、西壁2m、北壁1.8mを測る小型の住居である。

床面・壁 南側は溝によって削平されているが、壁が残っているのは北及び西側北半分で、北壁の高さは30cmを測る。周溝は東壁北側と北壁から西壁に認められ、深さ6cm前後を測る。床面は木の根によって擾乱されており、小さな穴が無数にあるが、全体としては南に若干傾斜している。

竈 東壁南に東西70cm、南北80cmの掘り方を有し、両袖の掘り方は確認された。

遺 物 第34図No.1は玉状口縁を呈する壺の口縁部破片で、口径13cmを測る。No.2は底部から立ち上がり部分にかけて丸みをもち、口径13cm、器高2.8cm、底径4.5cmを測る。

No.3は玉状口縁を呈し、底部から直線的に立ち上がる坏で、口径14cm、器高3.1cm、底径6.5cmを測る。No.4は口縁部直下から若干外反する坏の口縁部破片で、口径13cmを測る。No.5は内面に見込みから口縁部にかけての放射状の暗文がある高台付きの坏で、口径14cm、器高4.8cm、底径6.4cmを測る。No.6は凌のある坏の口縁部破片で口径15.6cmを測る。No.7は底部付近の外面に箒調整を施し、口径15.4cmを測る。No.8は若干凌口縁を呈する坏の口縁部破片で、口径14cmを測る。No.9はいわゆる甲斐型の墨書き土器で、口径12.4cm、器高4.3cm、底径5.4cmを測る。No.10は灰釉陶器の外反する口縁部破片で、口径16cmを測る。No.11は鉢の口縁部から胴部の破片で、胴部下半に箒削りが施されて、口径27cmを測る。No.12は羽釜の口縁部破片で、口径21.4cmを測る。No.13は土錐で幅1.6cm、長さ5.1cmを測る。No.14は須恵器の壺の底部破片で底径23.4cmを測る。

2号住居

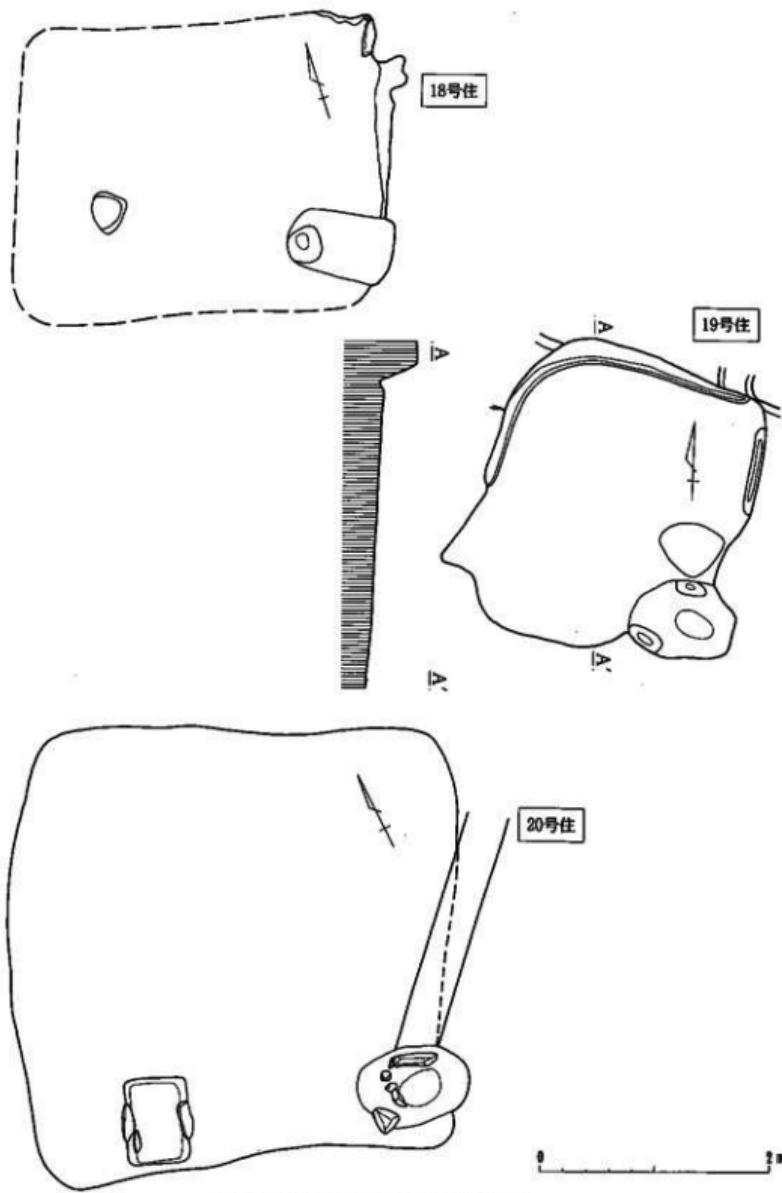
概要 本遺跡の北東側に位置する住居群の中で1号溝の西側の1軒で、南に19号住居、北西に21号住居がある。住居の東壁は排水用暗渠によって切られ、床面は木の根の擾乱を受けている。南壁際には東西の壁に平石が立てられている方形の土括がある。深さは17~20cmを測り、底部は平坦である。出土した遺物の総量は1.4kgであり、内訳は須恵器が0.3kg、土師の坏が0.65kg、土師の壺が0.35kg、繩文土器が0.1kg、灰釉陶器が2片である。壺の形態はⅦ~Ⅷ期、坏はⅨ期と考えられる。

形状 方形を呈し、東壁3.6m、南壁3.3m、西壁3.9m、北壁3.3mを測る。

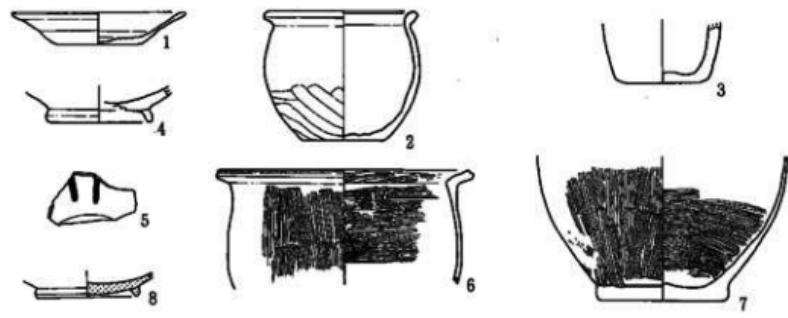
床面・壁 床面は緩やかに南に傾斜し、北と南の壁際の比高差は5cm程度である。周囲の壁は削平され、僅かに数cmの痕跡を認められる。

竪 東壁の南よりに築かれているが、暗渠によって一部切られ、耕作による削平で、東西100cm、南北60cmの掘り方が確認されている。

遺物 第35図No.1は玉状口縁を呈し底部糸切り痕を有する坏で、見込部分には同心円状の段が5段あり、胎土は黄褐色で口径15.6cm、器高4.9cm、底径6.6cmを測る。No.2は著しく玉状口縁が口唇部が外反する坏で、口径13.8cm、器高3.9cm根底径5.8cmを測る。No.3は底部糸切りの坏で、直線的に立ち上がり玉状口縁を呈し、口径13.2cm、器高3.7cm、底径5.2cmを測る。No.4は竪内出土の底部糸切りの坏で、直線的な立ち上がりを示し、口縁部は若干厚くなる。口径13.6cm、器高2.8cm、底径6cmを測る。No.5は竪内出土の坏で、口径13.4cm、器高3.2cm、底径5cmを測り、底部糸切り痕を有し、胴部下半には箒調整痕が残り、著しい玉状口縁を呈する。No.6は内面黒色土器で、口径13.4cm、器高3.7cm、底径4.8cmを測り、内面には暗文が認められる。No.7は高台付き破片で、底径7.6cmを測る。No.8は糸切り痕のある底部破片で、底径6.3cmを測る。No.9は玉状口縁を呈する坏の口縁部破片で口径13.5cmを測る。No.10は玉状口縁を呈する口縁部破片で、口径12.8cmを測る。No.11は玉状口縁を呈する坏で口径13.8cm、

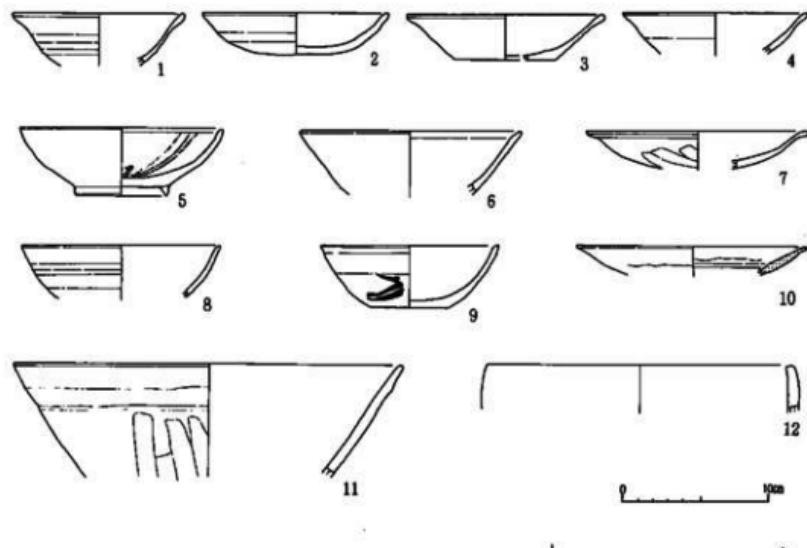


第33図 18・19・20号住居実測図 (1/6)



18号

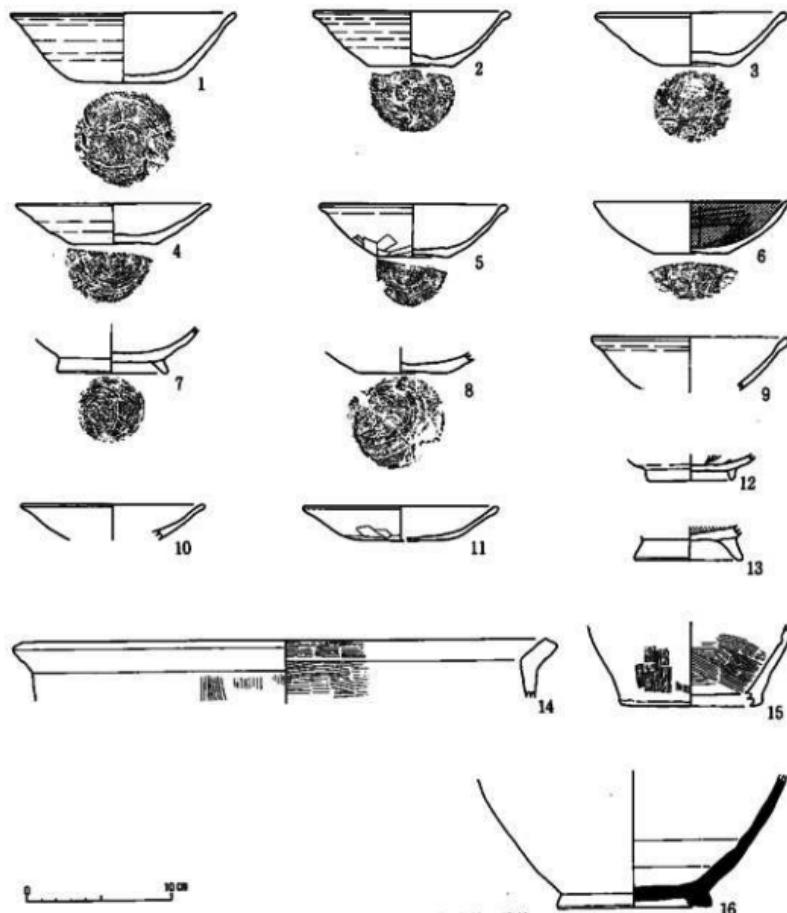
18号住



12



第34図 18・19号住居出土遺物 (1/4)・(1/2)



第35図 20号住居出土遺物 (1/4)

器高2.4cm、底径6cmを測り、底部付近には範調整痕が認められる。No.12は竈内出土の内面に暗文のある高台付き壺の底部破片で、底径6cmを測る。No.13は高台付きの内面黒色土器の底部破片で、底径7.5cmを測る。No.14は外縁、内面横の刷毛調整がなされた壺の口縁部破片で、口径38cmを測る。No.15は外縁、内面横の刷毛調整が施された壺の底部破片で、底径10cmを測る。No.16は竈内出土の須恵器の壺の底部破片で、底径10.6cmを測る。

21号住居

概 要 1号溝の西岸にある5軒の住居の中の1軒で、B-9、B-10グリットの中間に位

置し、平面形はやや台形を呈する。住居の北壁中央から西壁中央にかけて暗渠が横断している。出土した遺物の総量は1.65kgで、内訳は灰釉陶器が0.35kg、土師の甕が1.1kg、土師の壺が0.05kg、縄文土器が0.15kgで須恵器の出土は少ない。甕の主体は甲斐型で壺は内面黒色土器や玉状口縁は若干見られる。

形 状 南壁がやや長い台形を呈し、東壁2.9m、南壁3.5m、西壁3.6m、北壁2.3mを測る。南東隅は石の投げ込まれた土塗があり、この部分で住居が張り出している。

床面・壁 床には大小の不整形の土塗があり、北東の土塗が重複したもので東西80cm、南北140cm、深さ10cmを測る。壁は低く、東壁は10cm、南壁10cm、西壁8cm、北壁8cmを測る。

竈 竈は東壁南より位置し、東西60cm南北50cmの掘り方を有する。

遺 物 第37図No.1は玉状口縁を呈する壺の口縁部破片で、口径16cmを測る。No.2は若干外反する玉状口縁を呈し、口径17cmを測る壺の口縁部破片である。No.3は玉状口縁を呈する壺の口縁部破片で、口径13cmを測る。No.4は甕の口縁部破片で、口径32cmを測り、外面は箇調整が施されている。No.5は小型甕の口縁部破片で、口径14cmを測る。No.6は甕に口縁部破片で、口径30cmを測り、外面は継、内面は横の刷毛調整が施されている。No.7は鉢の口縁部破片と考えられ、口径30cmを測り外面継、内面横の刷毛調整を施している。No.8は須恵器の長頸甕の口縁部破片で、口径13.8cmを測る。

22号住居

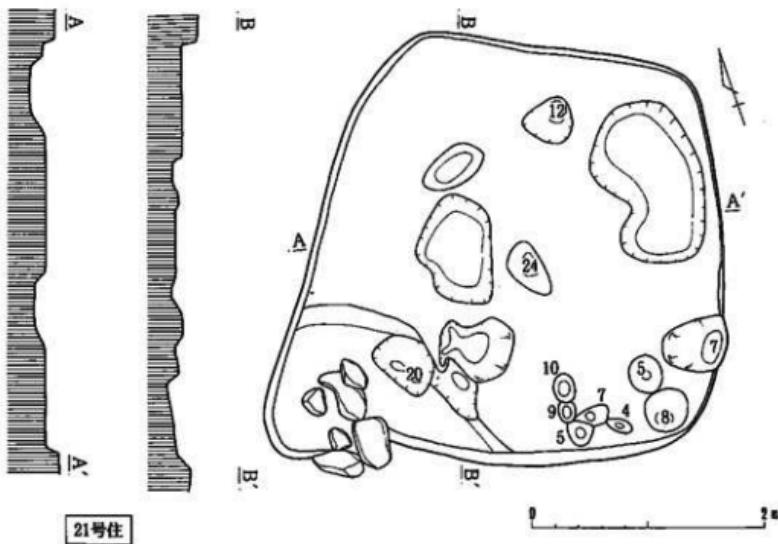
概 要 1号溝の北西にある5軒の住居群の中で最も北に位置する住居で、A-10グリットにある。覆土は4層に分けられ、幅の広い周溝が巡っている。出土した遺物の総量は0.85kgで、内訳は須恵器は0.2kg、灰釉陶器が0.1kg、土師の壺が0.35kg、土師の甕が0.1kg、縄文土器が0.1kgである。壺の口縁は玉縁で底部には若干糸切り痕も認められる。甕は甲斐型が主体で小型も甕も出土している。

形 状 東西に長い方形を呈し、東壁2m、南壁2.6m、西壁2m、北壁2.5mを測る。

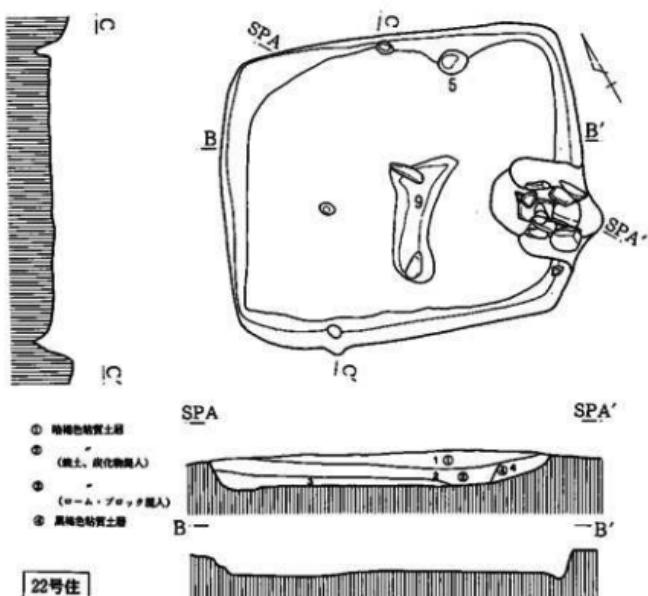
床面・壁 床面は平坦で、部分的には良好な堅い床面が検出された。中央やや東に南北に長い溝状の土塗があり、南北110cm、東西30cm、深さ10cmを測る。壁の深さはそれぞれ東壁は13cm、南壁22cm、西壁20cm、北壁5cmを測る。周溝は断面V字状で周囲を巡り、東は幅25cm、深さ5cm、南は幅20cm、西は幅10~25cm、深さ6~10cm、北は幅10~20cm、深さ10cmを測る。

竈 竈は東壁南より位置し、両袖は石を芯としたが立った状態での検出ではなく、焼土も明確な状態では検出されていないが、これは竈の底には平石が敷かれていたためと考えられる。セクションは4層に分けられる。

遺 物 第37図No.1は底部糸切り痕を有する口径12.4cm、器高3cm、底径6.6cmを測る壺で、胎土は黄褐色を呈している。No.2は底部糸切りの壺の底部破片で、底径5.5cmを測る。No.3は口唇部が玉状口縁を呈する壺で、口径14.4cmを測る。No.4は底部から直

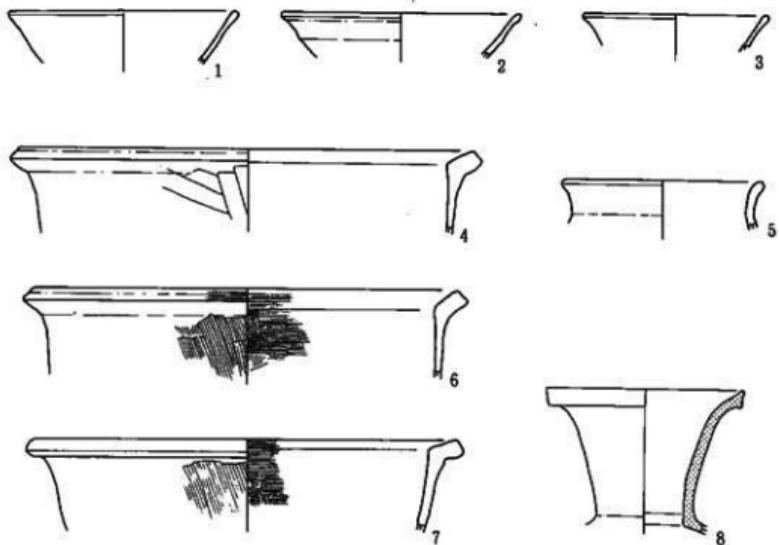


21号住



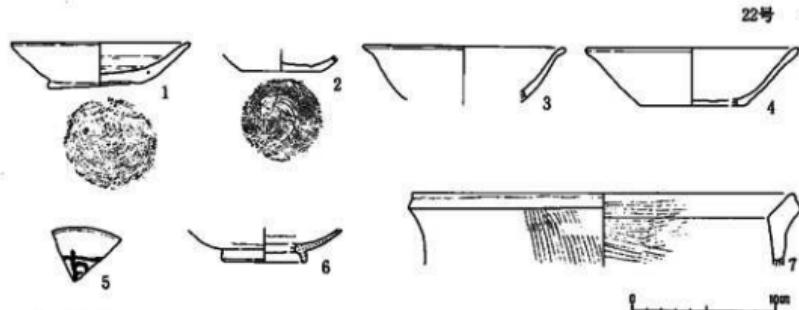
22号住

第36図 21・22号住居実測図 (J6)



21号住

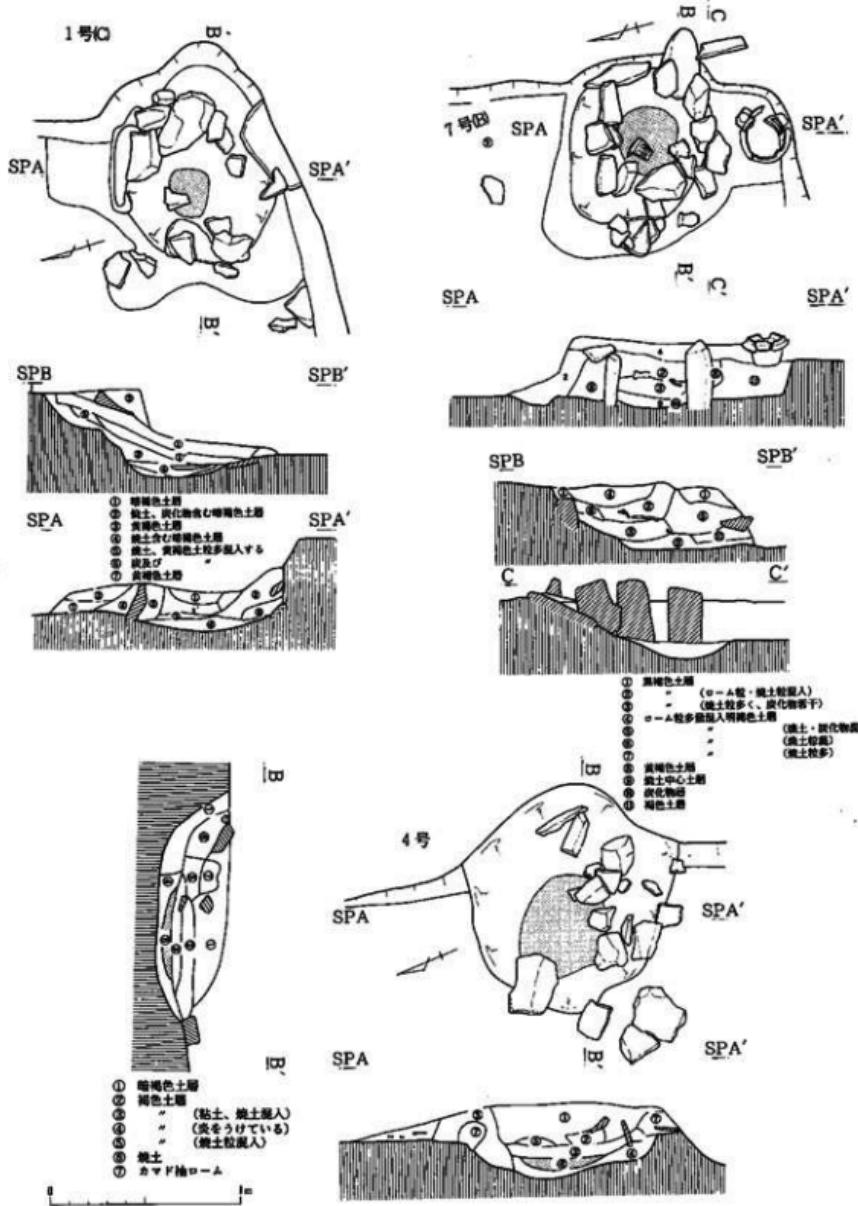
21号



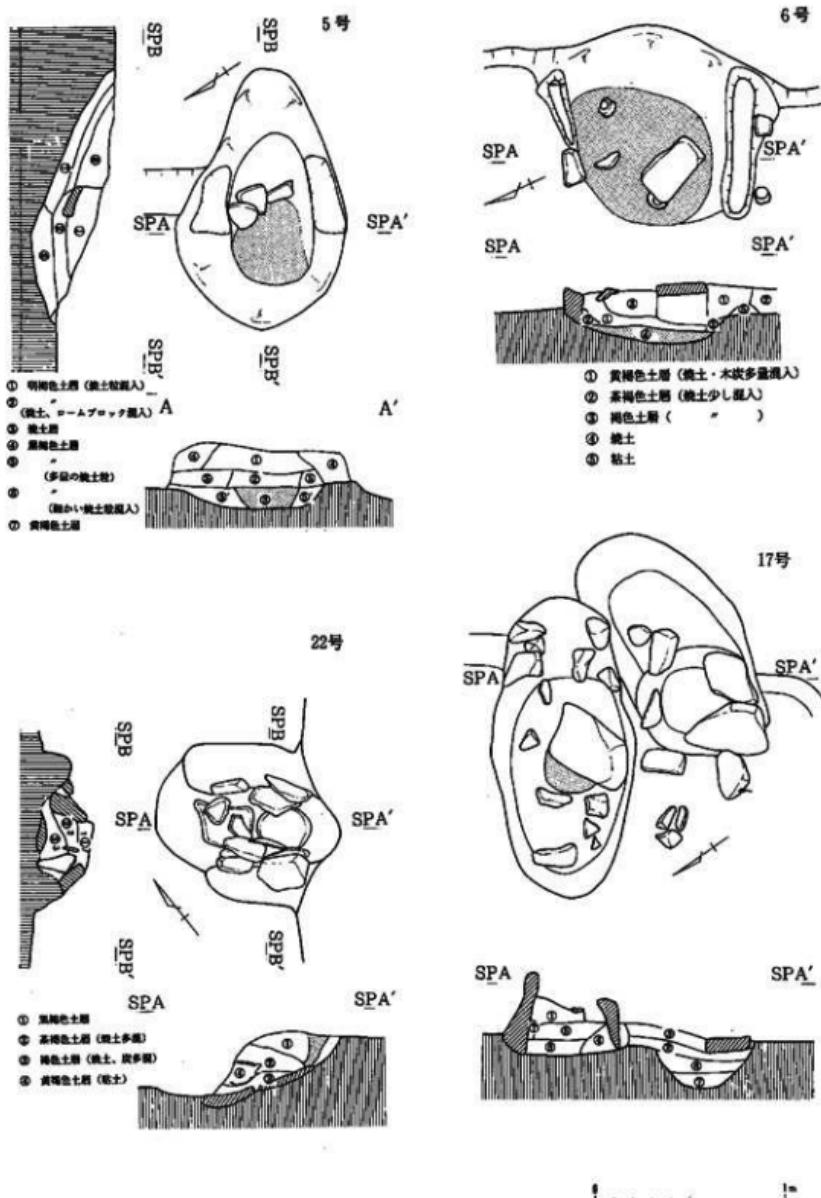
22号住

第37図 21・22号住居出土遺物 (1/4)

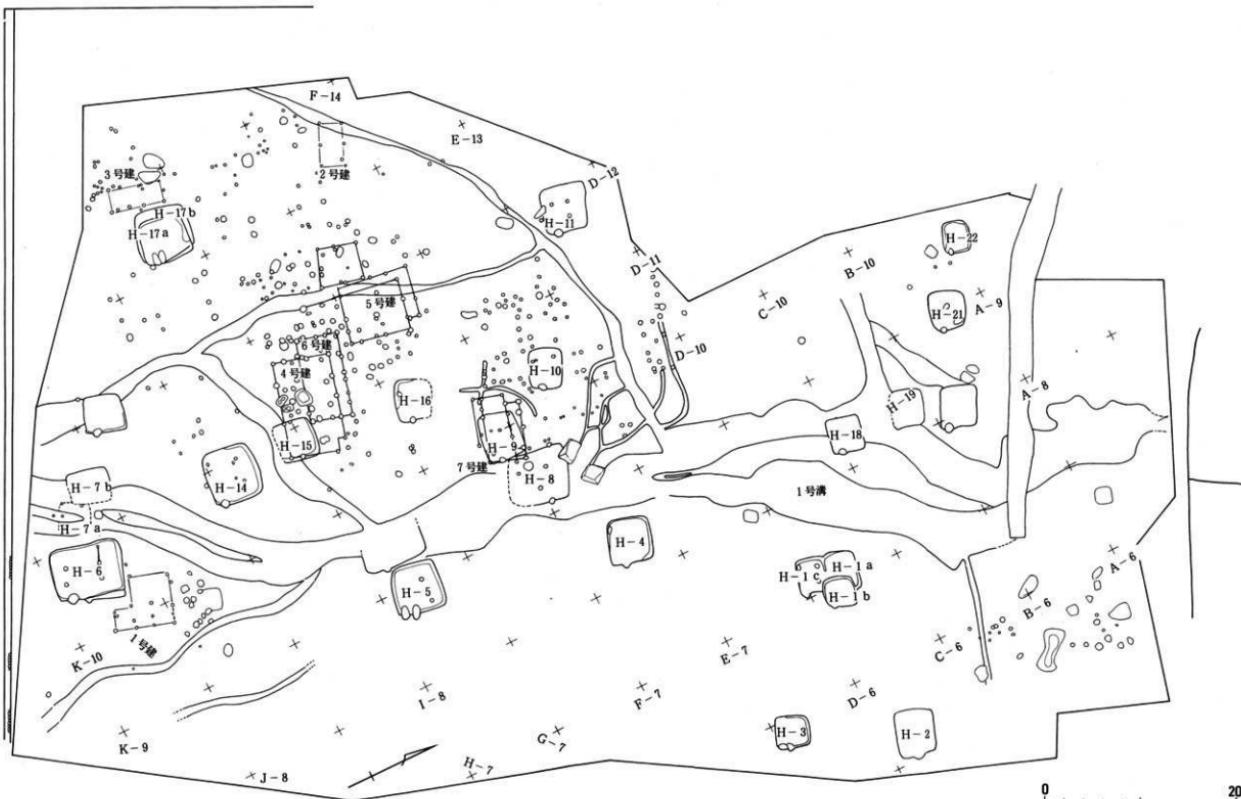
線的に立ち上がる壺で、口径14.8cmを測る。No.5は墨書き土器の口縁部破片であるが、書かれている文字は破片のため判読できない。No.6は灰釉陶器の底部破片で底径8cmを測る。No.7は壺の口縁部破片で、口径37cmを測る。



第38図 1・4・7号住居カマド実測図 (%)



第39図 5・6・17・22号住居カマド実測図 (Y%)



第40図 城下遺跡全体図 (Ym)

(2) 堀立柱建物址

本遺跡で確認された建物は7棟であるが、これらの多くが東西棟で棟方向も比較的近い数値を示している。建物の集中する地区は遺跡の中央から西側部分で、遺跡の中でも比較的平坦な場所である。この地区には建物として関連付けなかった多くの柱穴と考えられる小ビットが検出されているので、実際には更に多くの建物の存在が推測される。特に7号掘建の北西部、4号掘建の北西部で5号溝周辺には集中している。このような地区には竪穴住居が少ない傾向も認められる。北東の小型の竪穴住居の多く分布する地区には堀立柱建物址は少なく、1号溝以東にも堀立柱建物址は1号掘建以外は柱穴群はない。

1号建物址

6号住居址の北西に隣接し、J-10グリットに位置する南北に長い建物で、東西2間、南北2間の総柱である。棟方向はN-23.5°-Eで、柱間は南北が長く2.22~1.86mの範囲の数値をもつが、東西は1.60~1.8mを測る。

2号建物址

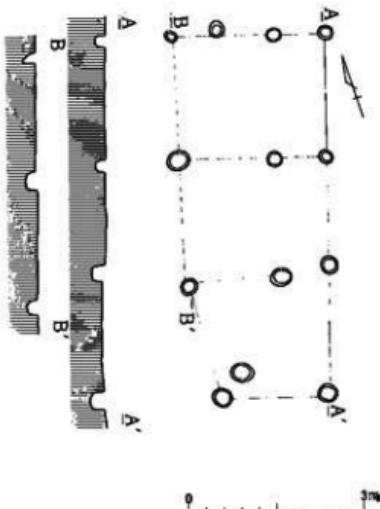
調査区西端のG-14グリットに位置する建物で、東西2間、南北1間の総柱である。規模は東西2.46m、南北4.38mを測るが、東側の柱列は若干北東に延びる可能性もある。この建物の西側は6号溝と重複しているが、溝が新しい。東西棟の方位はN-66.5°-Wである。東西の柱間は2.46mで南北の柱間は、2.26m前後を測る。柱穴の深さは遺構確認面から35~25cmを測る。

3号建物址

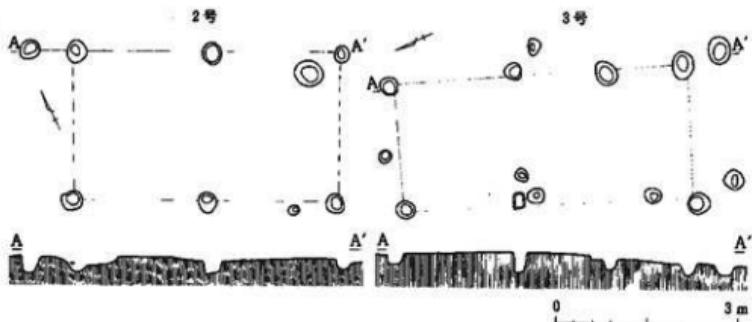
17号住居址の西に隣接し、I-14グリットに位置している南北に棟をもつ建物で、棟方向はN-20°-E、東西1間、南北2間、東西2.28m、南北4.94mを測る。柱穴の深さは、確認面から35~15cmを測る。

4号建物址

調査区中央やや南に位置する東西13.21m、南北5.96mの大型の建物である。東西棟の方位はN-73°-W、モヤは東西5間(10.69~10.77m)、南北2間(4.59~4.7m)で、東、南、西に1間の底が設けられている。主柱穴の柱間は東西間隔が2.09~2.20m、南北間隔



第41図 1号建物址実測図 (1/100)



第42図 2号・3号建物址実測図 (Yas)

が2.29~2.36mを測り、庇の柱間は東が1.17~1.22m、南が1.24~1.29m、西が1.24~1.28mを測る。棟木を受ける中央の柱は大きく、中間は2カ所柱穴が欠けている。この空間は、東西6.51m、南北4.7mの規模の部屋と考えられる。庇部分の機能は廊下あるいは縁と推測される。建物の時期を決定できる遺物の出土はないが、周辺からは12世紀に比定される青磁の破片が出土している。

5号建物址

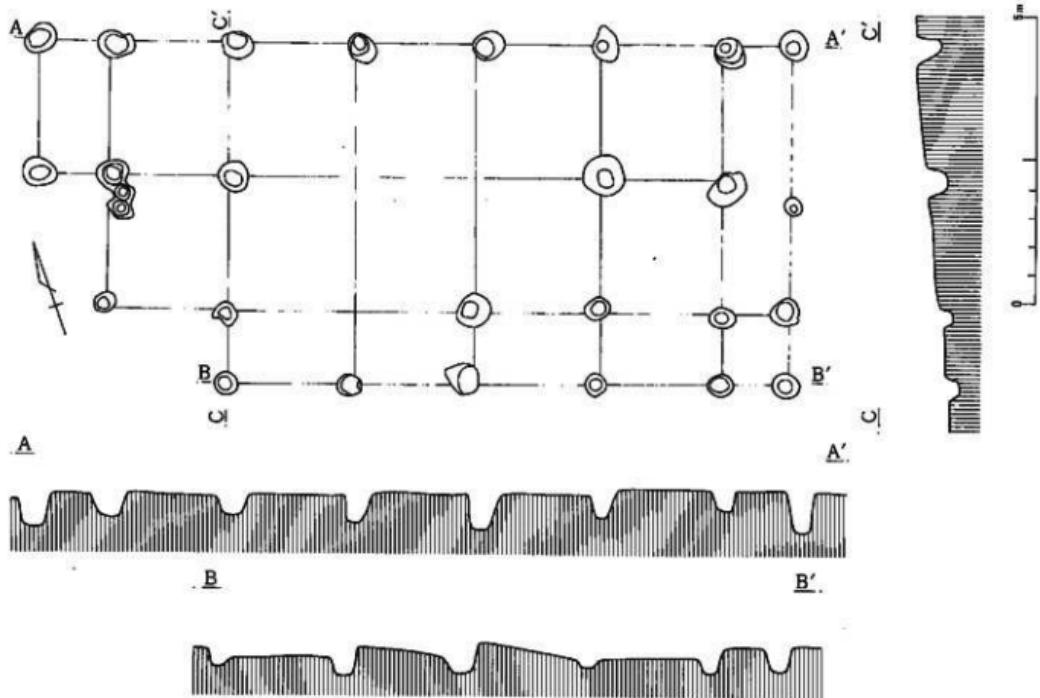
調査区西側に位置する南北に長い建物で、モヤは東西2間、南北2間で、北側と東側に間口2間（東庇間口柱間2.48~2.64m、北庇間口柱間1.9m前後）、奥行き1間（柱間1.20m前後）の庇が付いている。北側の庇は北西に1間四方（1.20×1.20m）が張り出している。東西棟の方位はN-73°-Eである。また西側に隣接して、東西3.77m前後、南北4.51m前後の方形の建物があり、柱間は東西3.77m、南北2.25mを測る。これらの建物は、接続していたとも考えられる。

6号建物址

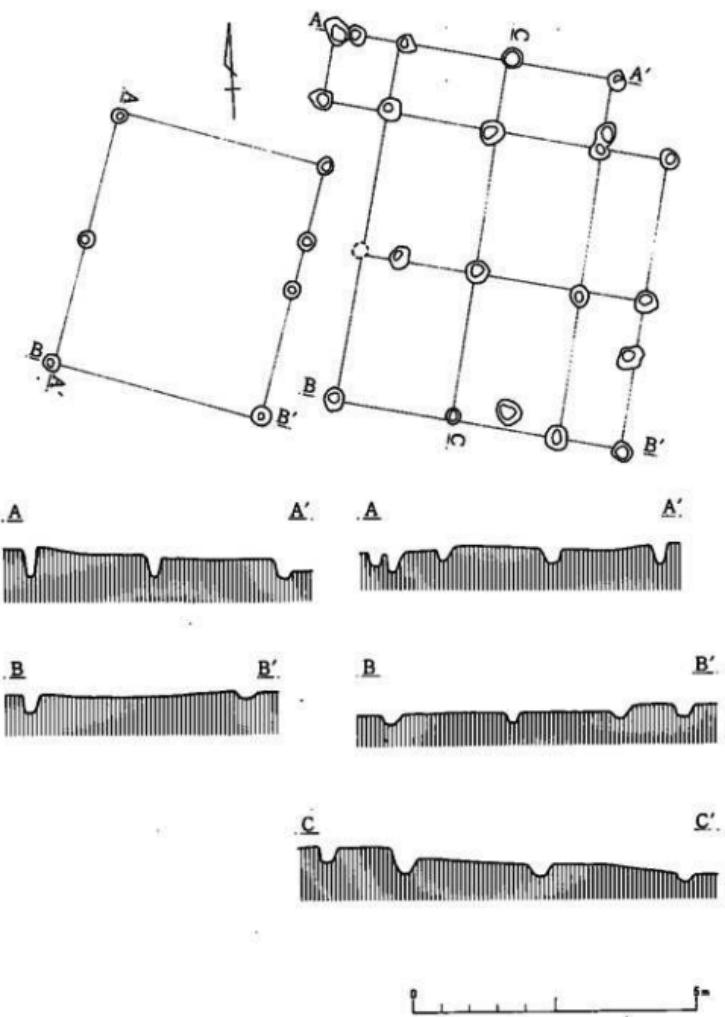
H-12グリットに位置し、SB04と重複する建物で、東西7.15m、南北4.08mを測る。東西棟をもち、棟方向はN-73°-Eである。モヤは東西3間、南北2間、南北の柱間2.10m前後、東西の柱間2.40m前後を測り、間口2間奥行き1間の庇が東、南、西に付く構造と推測できる。庇の間口は東が4.24m、南が4.84m、西が4.18m、奥行きは東が1.17m前後、南が1.3m前後、西が1.5m前後を測る。

7号建物址

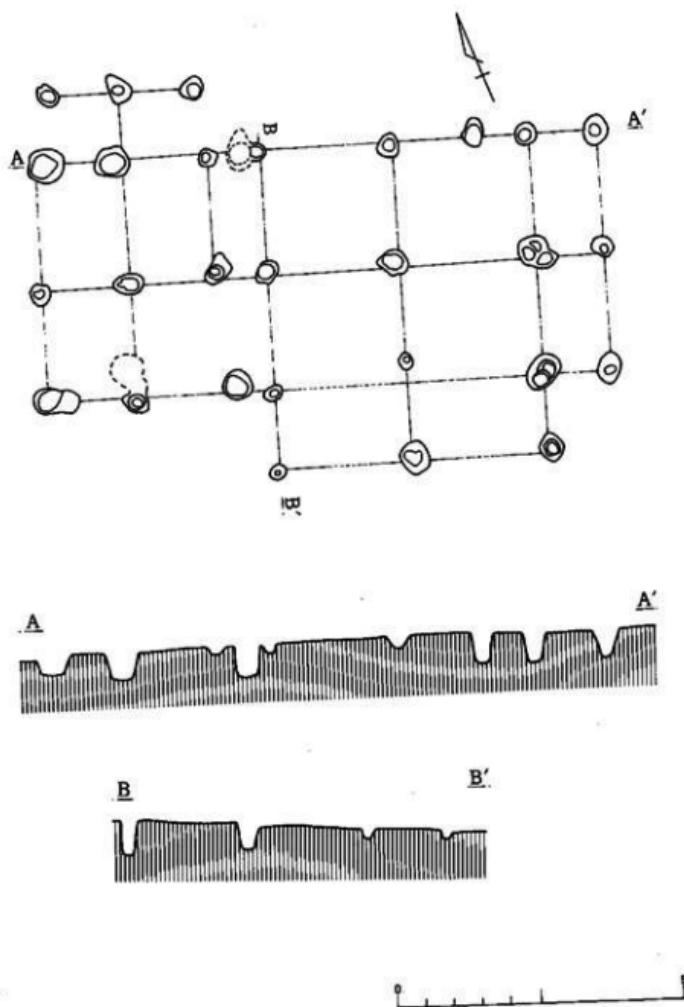
遺跡の中央、F-10坑を中心に東西7m、南北5mの範囲に柱穴が分布する建物である。東西6間（柱間0.92~1.38m）、南北1間（柱間1.93~2.18m）をモヤとし、北側に間口4間（柱間1.12~1.47m）、奥行き1間（柱間1.10~1.30m）の庇が造られ、南にも間口1間（柱間3.69m）、奥行き1間（0.99~1.24m）の庇が造られている。



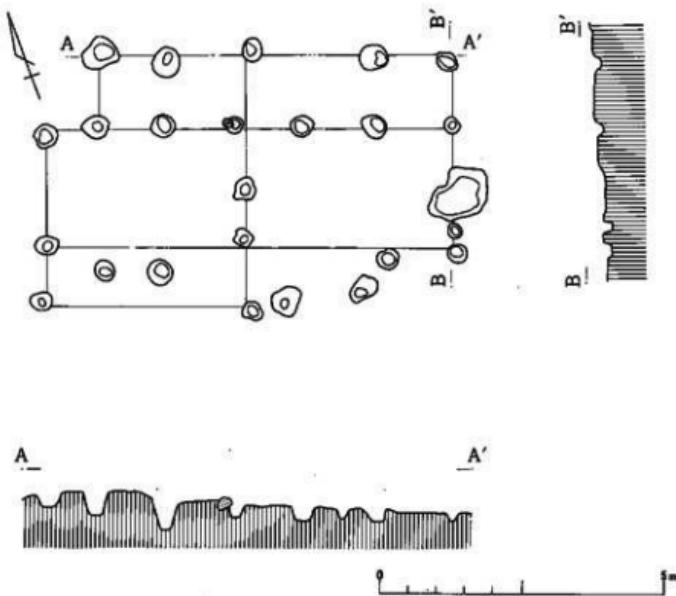
第43圖 4號建物址測量圖 (Yao)



第44図 5号建物址実測図 (Ym)



第45図 6号建物址実測図 (Ym)



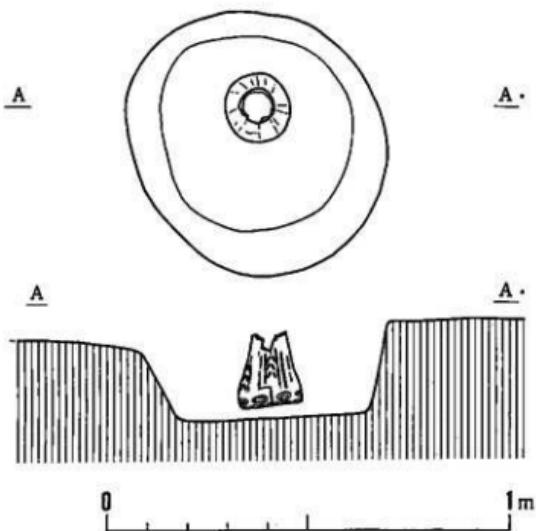
第46図 7号建物址実測図 ($\frac{1}{10}$)

(3) 繩文時代の遺構と遺物

本遺跡の南300mには繩文時代後期から晩期の配石遺構で有名な国指定史跡金生遺跡があり、北東400mには前期の大きな集落である天神遺跡があり、北西にはやはり前期の集落である御所遺跡がある。今回の調査においても、事前の試掘調査で多くの繩文時代の土器片を確認しているが、遺構を検出したのは繩文中期の後半の浅い土壌1基である。繩文土器の出土量は、遺跡の北側に多く南側には少ない傾向が見られる。中期の土器片の出土量から近くに住居が存在している、あるいは既に耕地の造成の時点で削平されたと推測することが可能である。

(1) 1号土壌

C-10グリッドの南端中央に円形の土壌がある。この土壌の中央には繩文時代中期半に位置付けられる小型の甕が逆位で検出された。この甕は口径16cm、残存部分の器高16cm前後を測る。



第47図 1号埋甌 (Jō)

(2) 石鎚と石匙

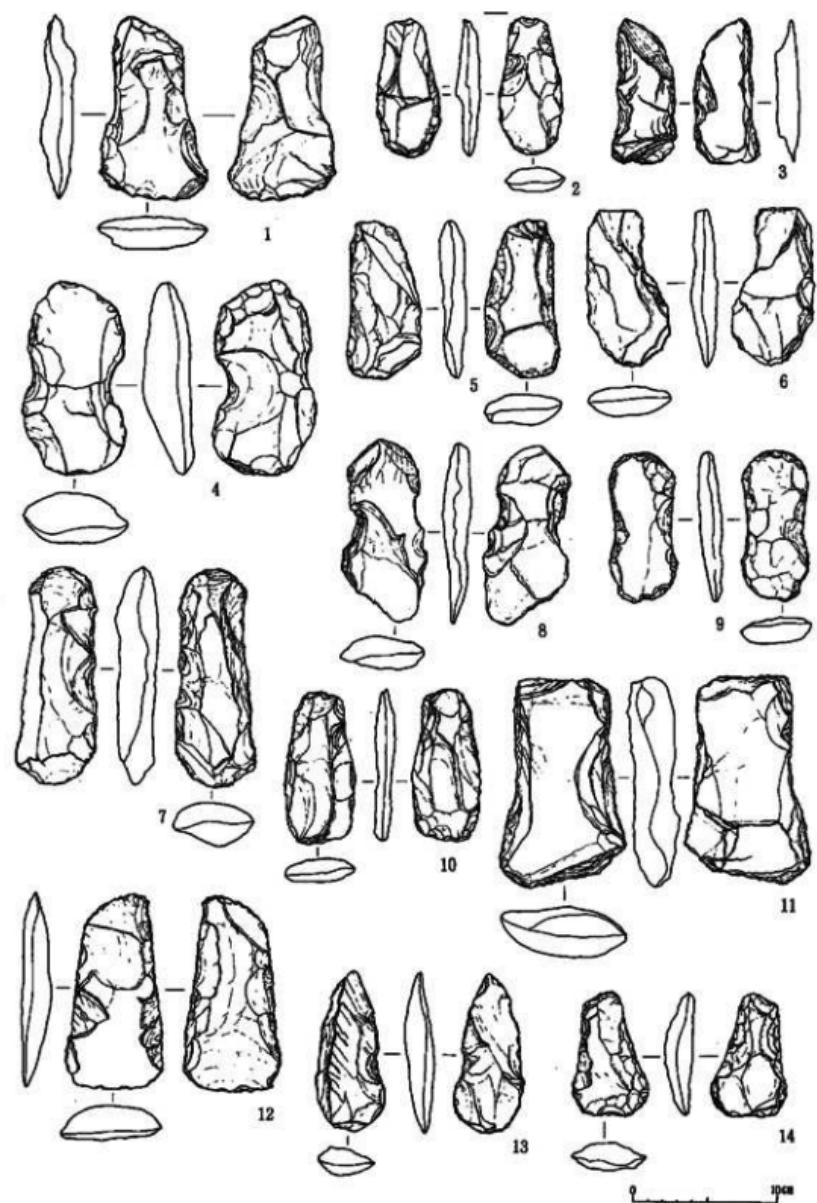
第48図No. 1～15は縄文時代の黒曜石製の石鎚で、破損品を含めて実測可能なものは、この15点である。形態としては殆どが凹基無茎鎚で、凹基有茎鎚はNo.14のみである。No.16は黒曜石製の石匙で、14号住居から出土している。

(3) 打整石斧

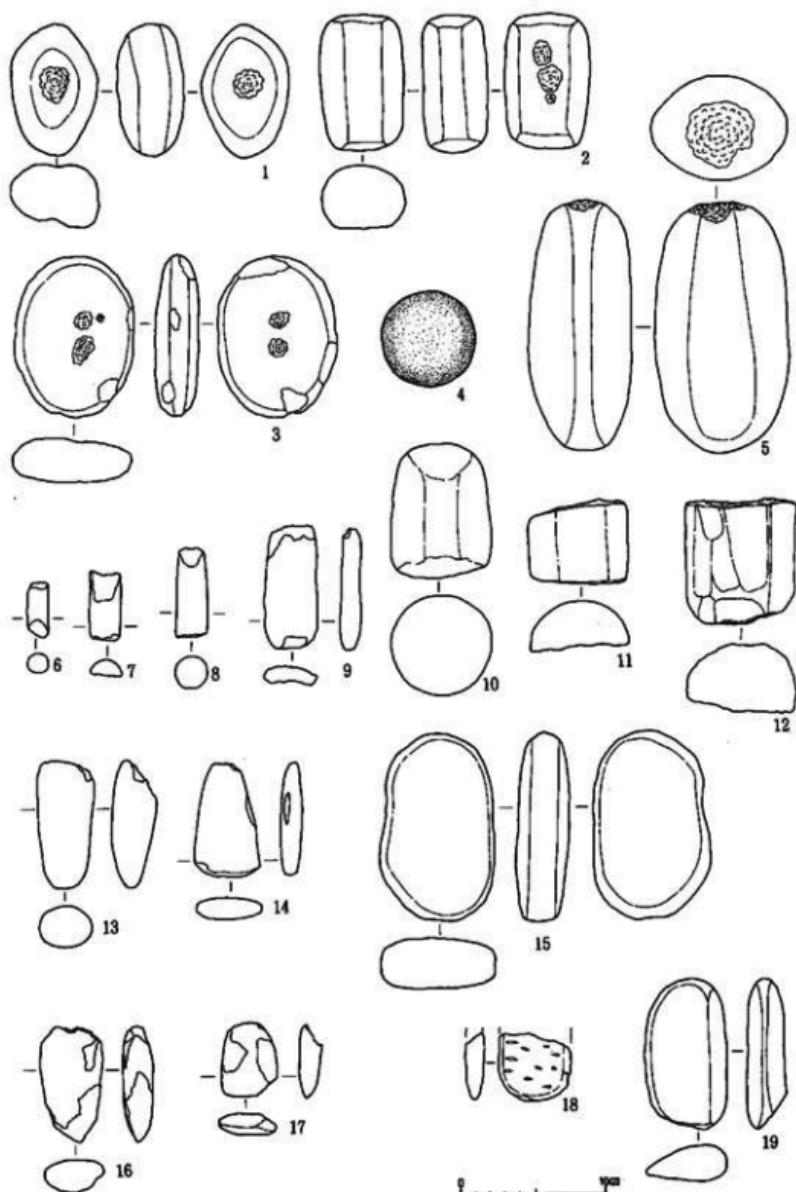
本遺跡より出土した打整石斧は、14点である。形態から分類すると、短冊型4点・分側型3点・撥型6点・不明1点である。石材は安山岩が多く、粘板岩も認められる。大きさは、縦15cm、幅5cm以上が1点、縦12cm、幅6cm以上が5点、縦10cm、幅5cm以上が4点、縦10cm、幅4cm以上が3点、その他1点である。(第49図参照)

(4) その他の石製品

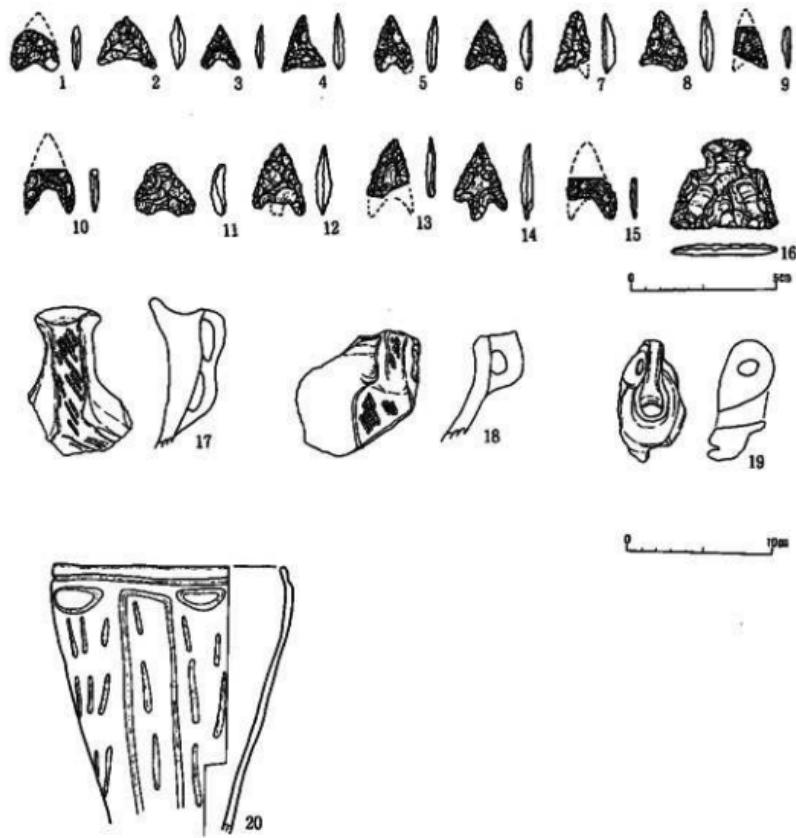
凹石は3点、敲石1点、丸石1点、石劍残欠4点、石鎚1点、石棒残欠3点、磨製石斧4点、



第48圖 打製石斧 (%)

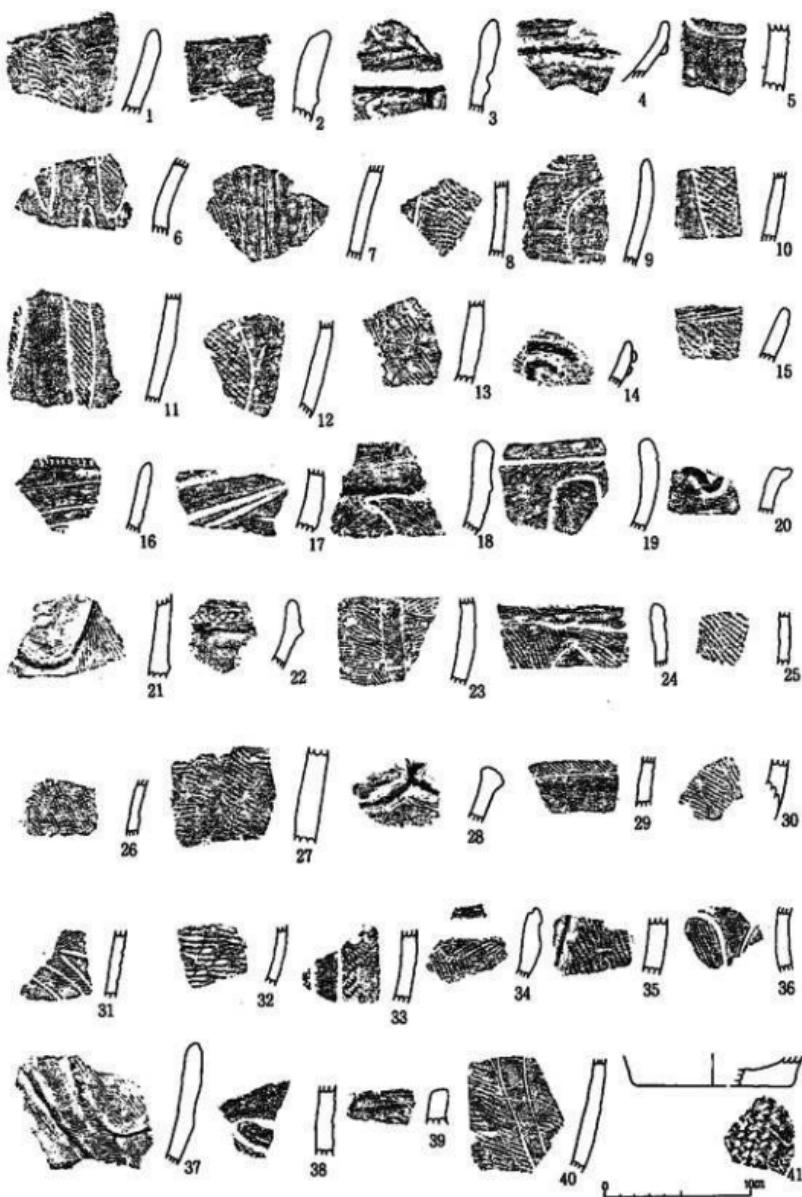


第49図 石器 (1/4)

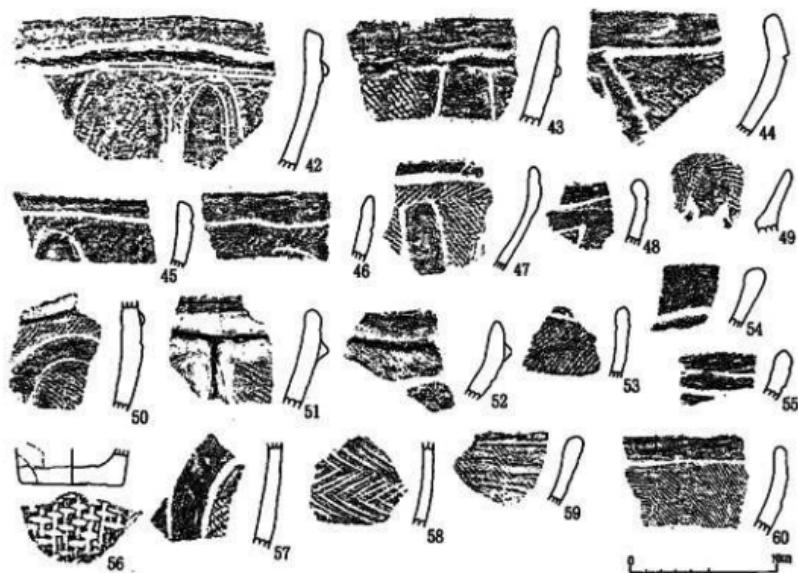


第50図 縄文時代出土遺物 (1/4)・(1/2)

磨石 1 点、輕石 1 点が出土した。No. 1 は縦 9.0cm、横 6.2cm、No. 2 は縦 9.4cm、横 5.6cm、No. 3 は縦 11cm、横 8.2cm を測る凹石である。No. 4 は径 6.6cm の丸石で、No. 5 は縦 17cm、横 9cm を測る敲石である。No. 6～9 は石劍の残欠で、長さは No. 6 は 4cm、No. 7 は 4cm、No. 8 は 6.2cm、No. 9 は 8.6cm を測る。No. 10～12 は石棒で大きさは No. 10 が長さ 9.2cm、径 7cm、No. 11 が長さ 6cm、径 6.8cm、No. 12 が長さ 8.4cm、径 7.4cm を測る。No. 13・14・16・17 は磨製石斧でそれぞれ長さ 9cm、幅 3.8cm、長さ 7.6cm、幅 4.6cm、長さ 8cm、幅 4.2cm、長さ 5cm、幅 4cm を測る。No. 15・19 は磨石で縦 13cm、横 8cm、長さ 10.6cm、横 5.4cm を測る。No. 18 は輕石で長さ 4.8cm、幅 5cm を測る。(第50図参照)



第61圖 美文土器拓本 1 (1/4)



第52図 繩文土器拓本2 (1/4)

(5) 繩文時代の土器

第51・52図のNo.1～41及びNo.48・50・55～58は住居内出土の縄文土器の破片である。No.2～5・14・16は1号住居出土土器である。No.1・3・6～10・12・13・15は2号住居出土破片である。No.11・17～30・37・40は3号住居出土である。No.34は9号住居出土土器で、No.50・56・57は4号住居出土土器である。No.35は12号住居出土で、No.55は1号住居である。No.31・33は19号住居出土である。No.38・58は20号住居出土の破片である。その他の土器片も2号溝及びDライン以北に集中して出土している。出土した遺物の多くは縄文時代中期後半から後期初頭の位置付けられるものである。出土傾向から縄文時代の造構は、本遺跡の北東部に存在していたと考えられる。

(4) グリット及び溝出土遺物

(1) 概要

城下遺跡のグリット別の出土遺物は別表の通りだが、以下グリットごとの傾向を述べる。

A-8は、平安時代の遺物は極めて少ないが縄文土器の出土量が最も多く、時期は中期である。A-9は、平安時代の土師の壺の破片が多いが、須恵器や灰釉陶器の破片は少ない。壺の時期は12期が多く壺は玉状口縁を呈する内面黒色土器が目立つ。B-6は、縄文土器が集中して出土している反面、平安時代の遺物は極めて少なく須恵器の破片が0.1kgである。B-7は、縄文土器の遺物は5.1kgと極端に多く、平安時代の壺の破片も比較的多く検出されている。B-8では内耳土器の破片が1点、縄文中期の土器片も若干検出されている。平安時代の遺物では高台付き・底部糸切り痕が認められる壺が多く、口縁部は玉状を呈する。B-9では、縄文中期の土器片が多い反面、平安時代の遺物は少ない。羽釜の破片、壺は糸切り痕を有するもの・高台付き・内面黒色土器が認められる。C-3では出土した遺物は須恵器の破片1点である。C-4・5では平安時代の遺物は玉状口縁の壺と須恵器が1点、縄文時代中期の土器も少量出土している。C-6では縄文時代中期から後期の土器片が7.9kg出土したのに対して平安時代の遺物は少ない。羽釜の鉢と壺の底部破片が4点出土している。土師の壺の形態は多種多样である。C-7では縄文時代前期の織維土器が多数出土したが、平安時代の遺物では壺が1点で、土師の壺は小さな破片のため復元作業はできなかった。C-8では壺の形態は2種類で、土師の杯は玉縁を呈する。C-10では縄文中期後半の大きな破片が主体である。D-6では縄文中期の土器片が11.5kgと大量に出土したが、土師の壺は玉縁が中心である。D-7も縄文中期の土器片が中心であるが、高台付きの内面黒色土器には暗文が見られる。D-8でも縄文土器片が中心であるが、土師の壺は糸切り痕を有する玉縁が多い。E-6では縄文中期から後期の破片が多く、土師の壺は糸切り痕を有する。土師の壺は厚手の破片である。E-7土師の壺は糸切りと箇調整では6:1の比率で糸切り底が多く、平底と高台の比率も6:1で平底・玉縁と平口縁の比率も2:1で玉縁が多い。E-8では須恵器の出土が多く14.8kgにおよんだ。また壺は13期が、壺の破片も多く出土している。羽釜の形態は3種類が認められる。F-7からは高台付きの暗文が見られる内面黒色土器が出土した。F-8からは縄文中期から後期の破片が出土し、土師の壺は13期中心である。F-10からは高台付きの大型壺が出土している。G-9では11~12期の壺が、壺は玉縁を呈する。H-9では羽釜が1点、内耳土器の底部破片も出土している。I-10では中世の素焼きの壺の破片が出土している。I-12では壺の破片が1.8kg、壺の破片が0.7kg出土しているが壺は11~12期、壺は8・9・14期の破片である。J-11では出土量は少ないが壺の破片は9~13期に比定される。J-13では底部糸切り痕の壺が多いが、内面黒色土器がめだつ。また、手づくね土器が出土している。J-14では内耳土器と鉄軸小皿が各1点、壺は箇調整の破片が出土している。

(2) 溝からの出土遺物

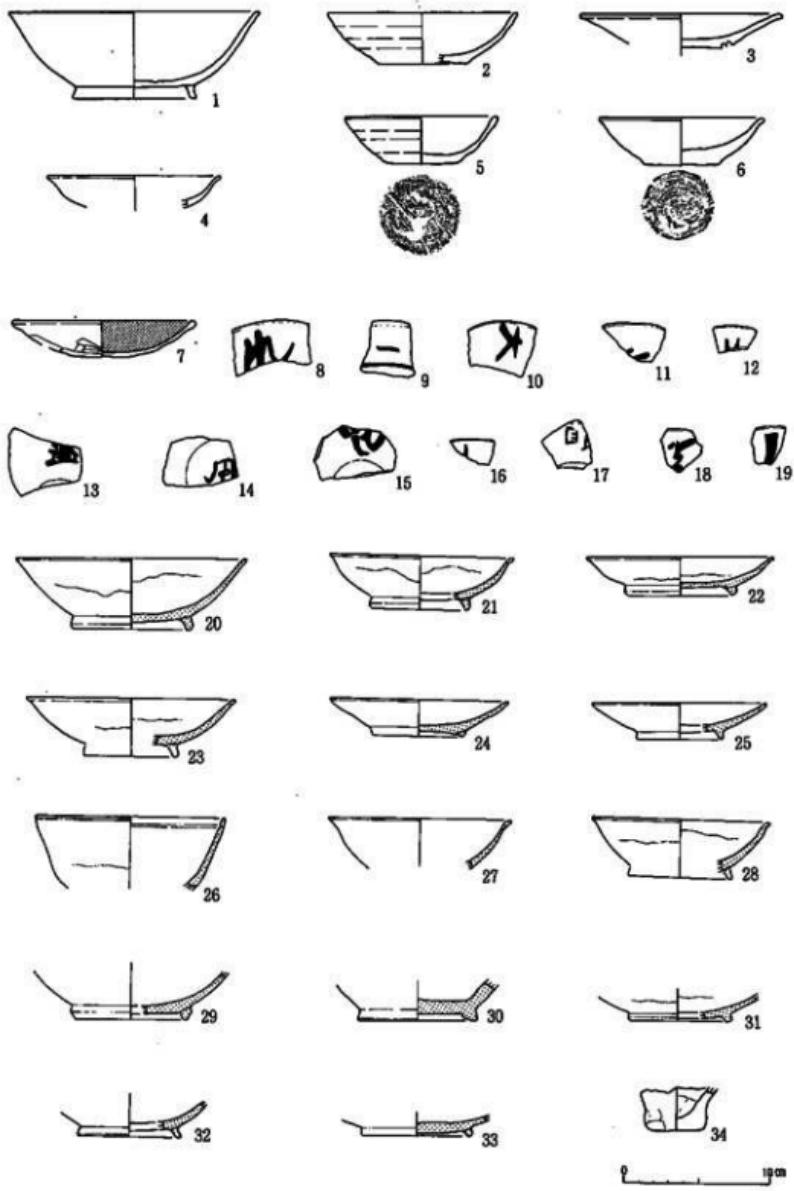
本遺跡では大型の溝である1号・2号溝、これらの溝から分流した4・5・6号溝、また、前者とは関連が不明な3号溝の合わせて6本の溝が確認された。これらの溝からは各時代の遺物が多量に出土しているが、この中で代表的な遺物を第55図に示した。

No.1は口径14cm、器高5.4cm、底径5cmを測る口縁部が外反する高台付きの壺である。No.2は口径13cm、器高2.4cm、底径5cmを測る3号溝出土の土師の皿で、胴部下半に墨書きがある。No.3は口径14.8cmを測る土師の壺の口縁部破片で、口縁部は玉状を呈し1号溝の出土である。No.4は見込み部分に墨書きがある土師の壺である。No.5は口径12.6cm、器高3.9cm、底径6.6cmを測る灰釉の碗で、E7・F10・H10・E3の溝から出土した破片の接合である。No.6は灰釉陶器の口縁部破片で、口径15.6cmを測り、5号溝出土である。No.7は灰釉の皿で、口径12.2cm、器高2.3cm、底径5.6cmを測り、2号溝からの出土である。No.8は口径12cmを測る灰釉の碗の口縁部から胴部の破片で、3号溝からの出土である。No.9は灰釉陶器の底部破片で、底径8.2cmを測り5号溝出土である。No.10は灰釉の長頸壺の口縁部破片で、口径18cmを測り、4号溝からの出土である。

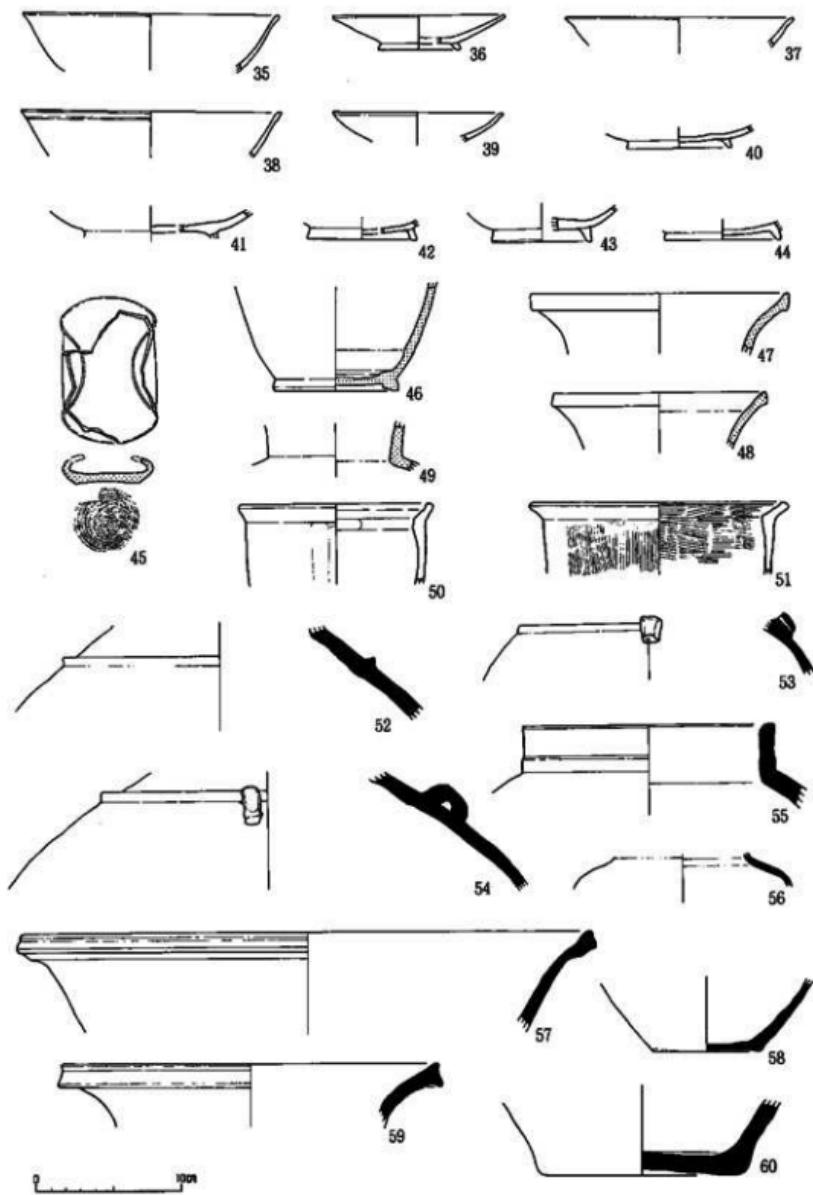
グリット別出土遺物一覧表

グリット	須恵器	灰釉陶器	土師器壺	土師器皿	繩文土器	金属製品	石器他
A-8	1片	0.06			0.6		
A-9		1片	0.1	0.6	0.1		
B-6	0.1	3片	0.1	0.1	4.1		
B-7	1片	0.5	1.9	1	5.1		
B-8		0.06					内耳土器1片
B-9	0.1		0.2	0.05	0.6		
C-3	1片						
C-4							
C-5	1片			1片			
C-6	0.2	2片	0.4	0.1	7.9		
B-6	0.1	3片	0.1	0.1	4.1		
C-7	0.1	0.1	0.3	0.1	5.7		
C-8	0.2						
C-9							
C-10		1片	0.05		1.4		
D-5	1片	1片					
D-6	0.5	0.2	1	0.3	11.5		
D-7	1.4	0.2	1	0.1	4		
D-8	0.6	0.1	0.8	0.1	2		
D-9	0.2						
D-10	0.2		0.05	0.05	1.8		

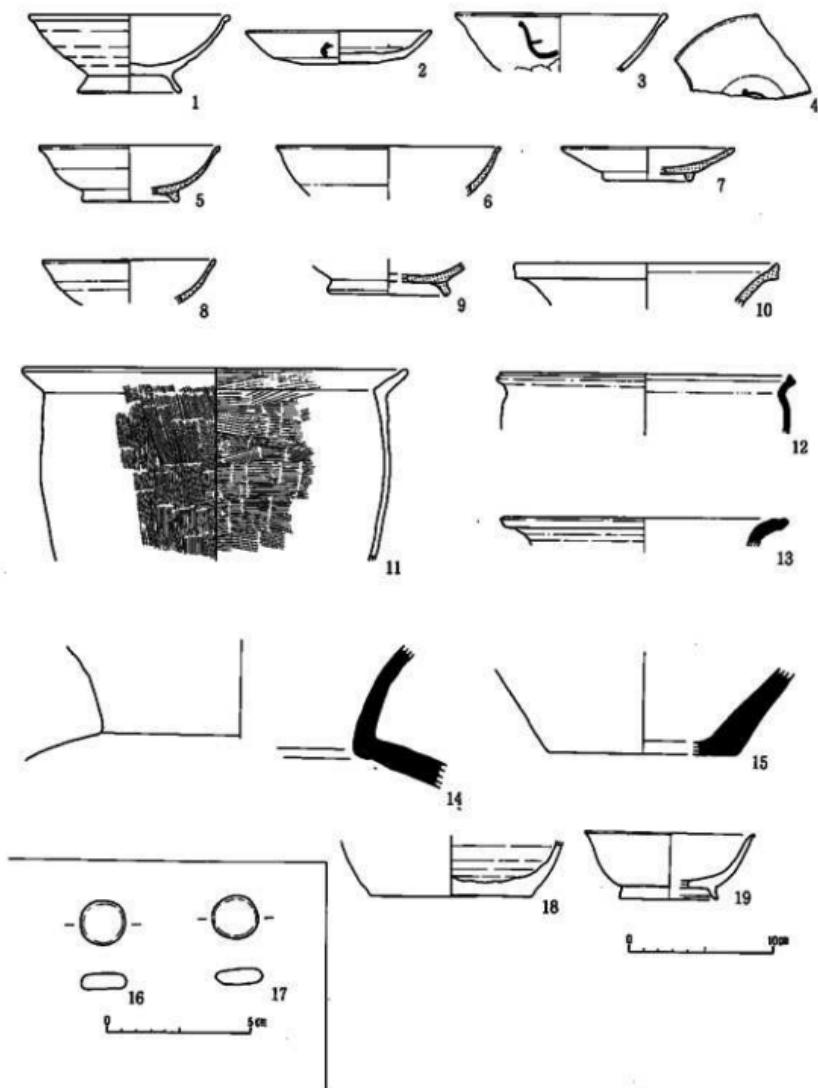
D-11		0.1	0.05			
D-12						
D-13	1片					
E-6	0.05	10片	20片			
E-7	1.9	0.5				
E-8	13.9	1.2	4.7	1.7	4.4	中世陶器0.3
E-9	0.3	0.1	0.1	0.1	0.2	常滑破片
E-10	0.2		0.05		0.2	
E-11	0.3	0.2	0.3	0.05	0.6	
E-12						
E-13						
E-14	1片		4片		0.2	
F-7	0.5	0.05	1.1	0.5	2	
F-8	2.05	0.25	1.5	0.6	1.5	
F-9						
F-10	0.2	0.05	0.1	0.05	0.1	内耳土器1片
F-12	0.05		0.1		1片	
G-9	0.4	0.1	0.2	0.2	0.2	
G-10	0.6	0.1				常滑片
G-11		1片	0.1	0.05		
H-9	0.1		0.05	1片	0.05	中世陶器1片
H-10	0.75	0.1	0.4	0.1	0.1	中世陶磁器2片
H-11	0.15	0.05	0.4	0.1	0.1	中世陶磁器1片
H-12	2片		0.05	0.05	1片	中世陶磁器1片
I-9	0.05	0.05	0.05	0.05	2片	
I-10		0.05	0.05		2片	中世陶磁器0.1
I-11						
I-12	1.1	0.2	1.8	0.7	0.6	
I-13						
I-14	0.05	3片	0.05		1片	
J-10	0.1		0.05	0.05	0.05	
J-11	0.1	0.05	0.05	0.1		
J-12						
J-13	0.5	0.1	1	0.4	0.1	
J-14	0.4	0.1	0.6	0.2	0.1	
K-10			2片			内耳土器2片
K-11		0.1	0.1		2片	中世陶器2片
K-12	0.25	0.05	0.05	0.1		
K-13	1片	0.05	0.1	2片	1片	



第53図 グリット出土遺物 1 (1/4)



第54図 グリット出土遺物 2 (1/4)



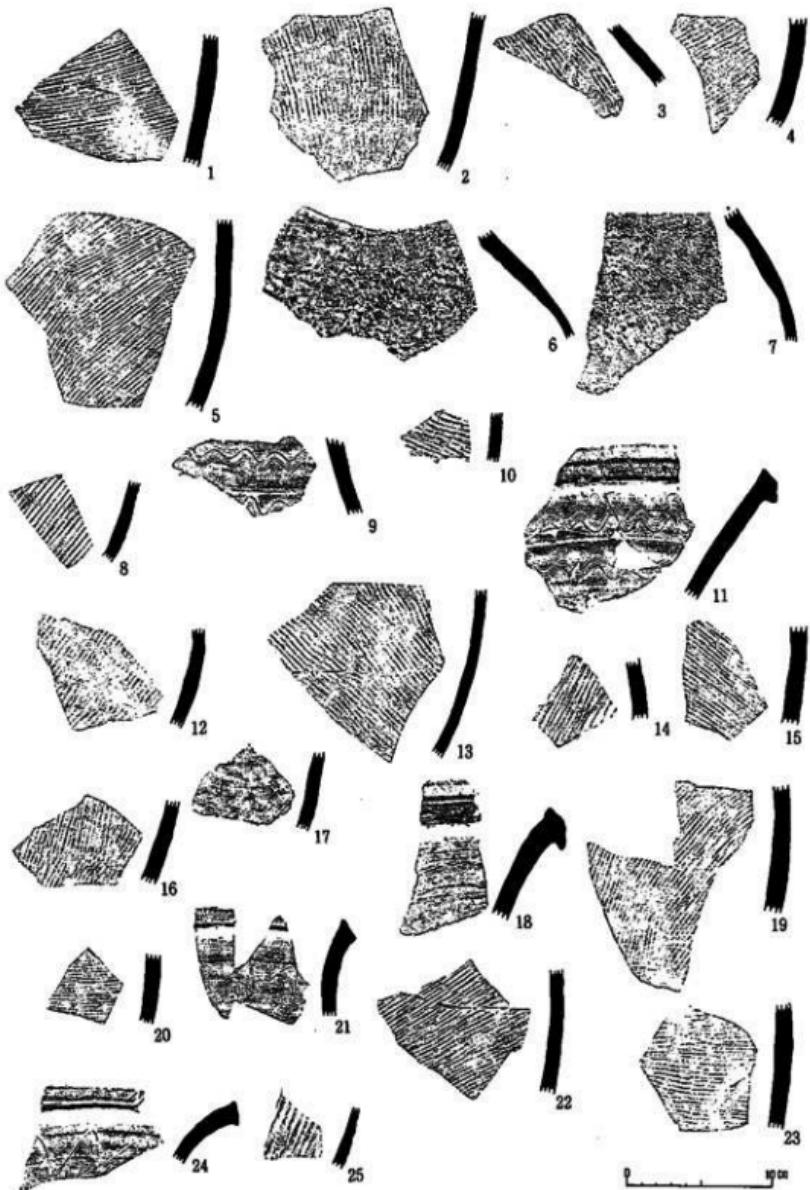
第55圖 漢出土遺物 (1/4) · (1/2)

(5) 須恵器

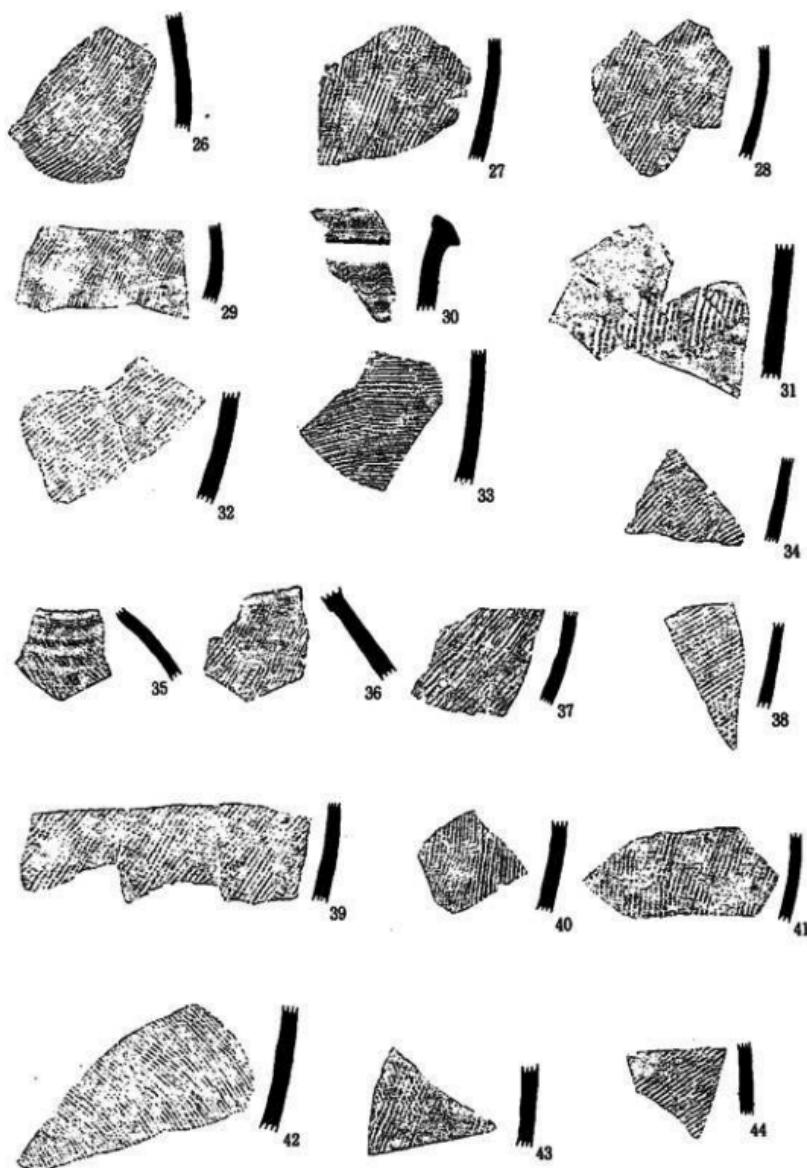
本遺跡から出土した須恵器は総量では30kgであり、グリットからの出土量は26kg余りであるが、集中して出土しているのはE 8及びF 8で、この両グリットから16kgを越える量が検出されている。住居址からの出土量は約8kgだが、0.5kgを越える出土量があった住居址は、1号B・5号・6号・8号・9号・13号・15号・17号であり、その他の住居址も21号を除いて数片でも須恵器は検出されている。第51・52図は主要な須恵器の拓本であるが、下の表に出土地を示す。

須恵器出土地一覧表

図版No.	出土地	備 考	図版No.	出土地	備 考
No.1	1号B住	胴部破片	No.23	D-9	
No.2	1号C住	"	No.24	E-8	口縁部
No.3	1号住	"	No.25	"	胴部破片
No.4	3号住	"	No.26	"	"
No.5	5号住	"	No.27	"	"
No.6	6住	"	No.28	"	"
No.7	6号住	"	No.29	E-11	"
No.8	6号住	"	No.30	F-8	口縁部
No.9	8号住	頸 部	No.31	E-11	胴部破片
No.10	F-8	胴部破片	No.32	E-8	"
No.11	15号住	口 縁 部	No.33	B-6	"
No.12	18号住	胴部破片	No.34	E-8	"
No.13	20号住	"	No.35	"	胴部上半
No.14	I-12	"	No.36	"	"
No.15	F-8	"	No.37	F-7	胴部破片
No.16	E-7	"	No.38	E-8	"
No.17	F-7	"	No.39	"	"
No.18	6号住C	口 縁 部	No.40	K-12	"
No.19	E-8	胴部破片	No.41	E-7	"
No.20	8号住	"	No.42	E-8	"
No.21	E-8	口 縁 部	No.43	"	"
No.22	"	胴部破片	No.44	D-10	"



第56圖 須惠器拓本 1 (1/4)



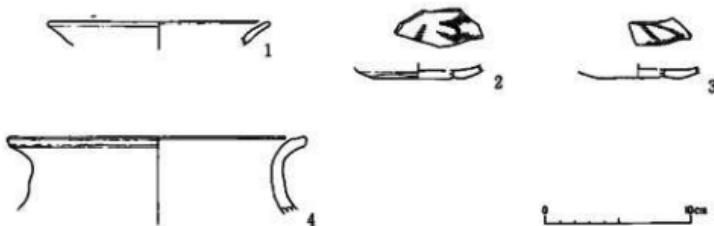
第57図 須恵器拓本 2 (1/4)

(6) 中世の遺物

本遺跡から出土した平安時代以降の遺物は、中国製の青磁及び白磁の破片がそれぞれ0.45kgと常滑壺の破片が2固体以上1kgである。中国製青磁の中には同安窯系の皿の破片が3点出土している。また碗は龍泉窯が主体を占めており、この傾向は12世紀中頃以降の遺物の検出状況によく似ている。また常滑の壺の口縁部形態は12世紀の特徴を有しているものであり、また龍泉窯系青磁の13世紀に出現する蓮弁文4点も出土している。(図版第58図・59図)

第58図No.1は口径15.4cmを測る白磁皿の口縁部破片で、1号住居南で出土している。No.2と3は白磁皿の底部破片で、見込み部分に櫛齒状工具による施文が見られる。これらの白磁は同安窯系のものと推測される。No.4は常滑の壺の口縁部破片で口径21cmを測り、12世紀後半のものと推測される。第56図No.1は、1号住居址南出土の白磁皿の口縁部破片で、口径15.4cmを測る。No.2は8号住居址出土の同安窯系白磁皿の底径6.1cmを測る底部破片で、見込み部分には櫛状の工具によるかっか文が見られる。No.3も同様な底部破片で、底径5.5cmを測り、1号溝から出土している。No.4は、12世紀後半に比定される常滑の壺の口縁部破片で、口径21cmを測る。この破片はE-9、G-10、H-10グリットからの出土破片を接合したものである。

第59図No.1は蓮弁文が施された龍泉窯系青磁の碗で、口径16cmを測り、表記資料である。No.2は蓮弁文のある龍泉窯系の青磁碗も口縁部破片で、口径16.4cmを測りJ-14グリット出土である。No.3は蓮弁文のある龍泉窯系青磁碗の破片で、口径14.2cmを測り1号住居址からの出土である。No.4は青磁碗の底部破片で、見込み部分には片切削した花文が認められる。No.5は青磁碗の高台部分の破片で、内面には片切削した文様がうかがえる。No.6は口径13.1cmを測り、片切削した蓮弁文が施される青磁碗である。No.7は口径15.8cmを測り、口縁部内面に3条の沈線が描かれている青磁碗である。No.8は口径18.5cmを測る青磁碗で、口縁部内面に2条の沈線が描かれている。



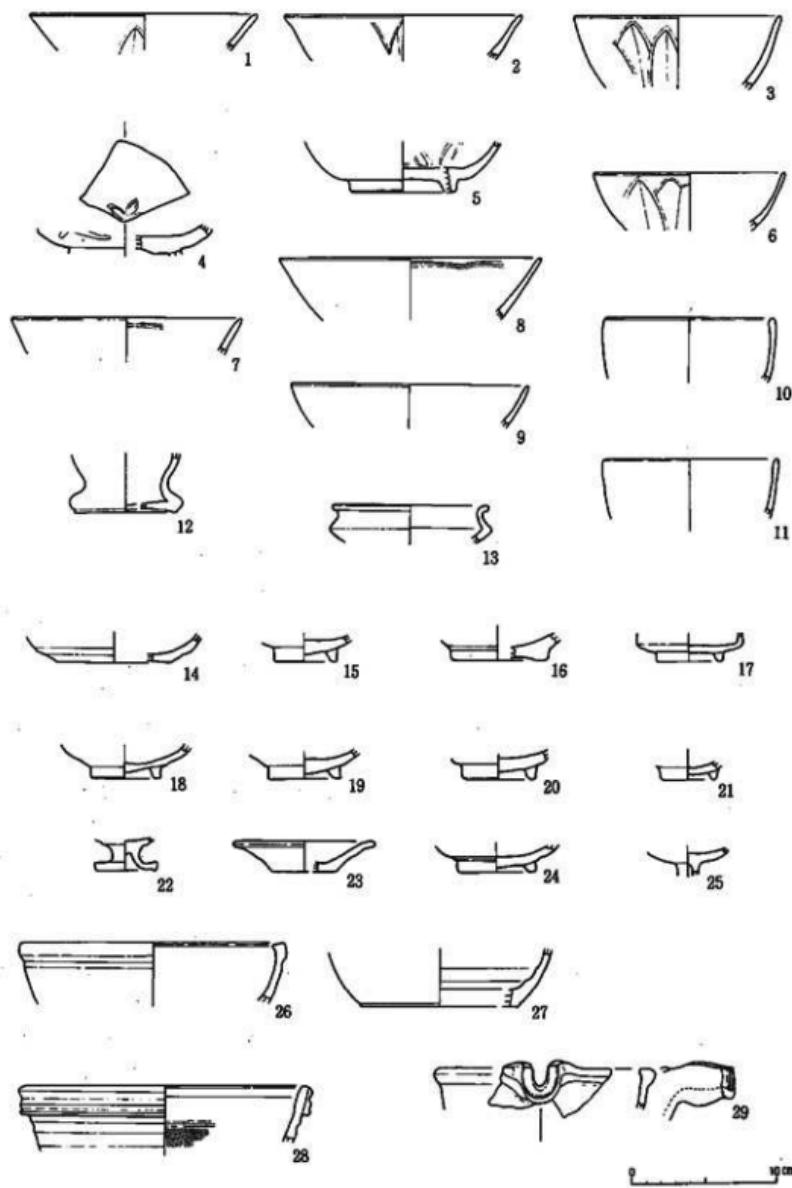
第58図 中世陶磁器 (1/4)

(7) 近世の陶磁器

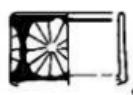
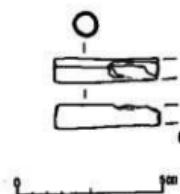
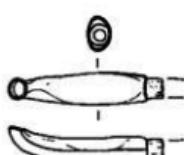
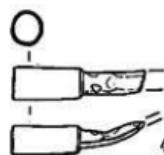
本遺跡の特徴として、近世初頭の陶磁器の出土が多いことも上げられる。これは、本遺跡の北に隣接する城下集落の成立と関係するものと考えられる。

第59図No.9は口径17.7cmを測る白磁碗の口縁部破片である。No.10は灰釉の碗の口縁部破片で、口径10.7cmを測る。No.11は口径11cmを測る碗の口縁部破片である。No.12は鉄釉の瓶の底部破片で、底径7cmを測る。No.13は鉄釉天目茶碗の口縁部破片で、口径11cmを測る。No.14・23は鉄釉の灯明皿の破片である。No.25は灰釉の灯明台の底部破片である。

第60図No.1は土師質の人形の同部破片で、高さ51cm、幅4.4cmを測る。No.2は5号土括墓出土頭部を欠く古伊万里の人形で残存部分の高さは3.2cm、製作年代は1630～1640年と考えられている。No.3は5号土括墓から出土した口縁部を欠く古伊万里染付小瓶で器高は4.7cmを測り、製作年代は1630～40年と推定される。No.7は口径7cm、器高5.3cm、底径7.6cmを測る瀬戸系のそば猪口でJ-10からの出土である。No.8は口径7.6cmを測り、瀬戸系のそば猪口でG-11出土である。No.9は見込みに瀬戸系コンニャク印判による五弁花文を施した半筒形茶碗の底部破片で底径8cmを測り、F-10内の溝から出土した。No.10は瀬戸系のぐい呑みの底部破片で、底径4.2cmを測り、C-6からの出土である。No.11は瀬戸系のそば猪口の底部破片で、見込みに五弁花が見られる18世紀代に比定される。出土地はJ-11である。No.12は口径10.6cmを測る瀬戸系の碗の破片で、7号溝からの出土である。No.13は1号溝から出土した瀬戸系の口縁部が外反する小皿の口縁部破片で、口径8.6cmを測る。No.14は長石釉を施した志野の小皿の底部破片で内面には鉄釉が見られ、底径6.8cmを測る。No.15は8号住居出土の碗の底部破片で、底径4.2cmを測る。No.16は1号溝から出土した碗の底部破片で底径4cmを測る。



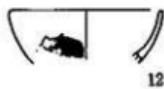
第59圖 南磁器 1 (1/4)



10



11



12



13



14



15

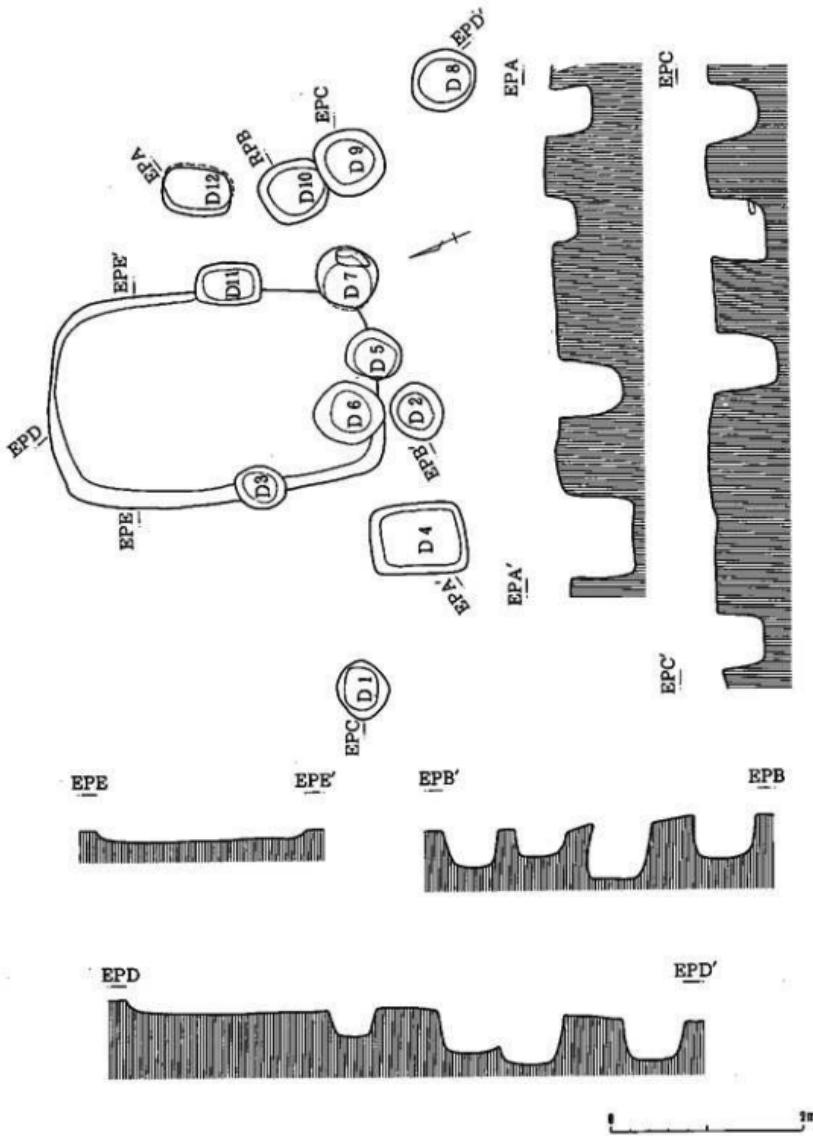


第60圖 車磁器 2 (1/4) · (1/2)

(8) 近世土壙墓

本遺跡の中央を北から南に流れる1号溝の東南に位置する6号住居址の北のJ-10グリットに近世の土壙墓12基が集中している。円形土壙墓が9基、方形土壙墓が3基で、人骨は円形土壙の2基から出土している。時期は5号土壙墓より出土した遺物が17世紀中葉であるため、この時期を中心とする時代を考えることができよう。また、表土剥ぎ以前の状況は東西11m、南北7mの小さな台形の畠であった。墓地として利用されていた土地が、後に畠として活用されて今日に至ったと考えられる。

- (1) 1号土壙墓は最も西に位置し、長径60cm、短径55cm、深さ47cmを測る楕円形を呈する。人の歯が土壙底部より出土しているが、時期を示す遺物の出土はない。
- (2) 2号土壙墓は1号土壙墓の南東3mに位置し、長径75cm、短径65cmを測る楕円形を呈する。土壙墓底部より人の歯が出土している。
- (3) 3号土壙墓は1号土壙墓の東2.4mに位置し、長径55cm、短径45cm、深さ55cmを測る楕円形を呈する。
- (4) 4号土壙墓は主軸を南北にし、東西65cm、南北95cm、深さ77cmを測る方形を呈する。覆土中からの遺物の出土はないが、形態から土壙墓と考えることができよう。
- (5) 5号土壙墓は2号土壙墓の東に隣接しており、隅丸方形の大型土壙の南辺と重複しているが、長径60cm、短径50cm、深さ50cmを測る円形の土壙である。土壙墓の大きさから埋葬されたのは子供と推測される。覆土中からは古伊万里の人形とöttくりが出土している。この磁器の年代は1630~40年と考えられており、埋葬年代はこれより若干下るといえよう。
- (6) 6号土壙墓は5号の北西で、2号土壙の北に隣接する円形の土壙である。長径75cm、短径65cm、深さ64cmを測る。覆土中からの遺物の出土はないが、人頭大の石が多数混入していた。
- (7) 7号土壙墓は、5号土壙墓の東に隣接している円形土壙で、長径75cm、短径65cm、深さ57cmを測る。土壙東壁には自然石が露出している。土壙内から出土した遺物はない。
- (8) 7号土壙墓の南2.5mに位置する円形の土壙で、長径70cm、短径60cm、深さ36cmを測る。後世の耕作による削平で浅くなつたためか土壙内からは遺物は出土しなかった。
- (9) 9号土壙は、8号土壙墓の北1mにある円形の土壙墓で、長径80cm、短径75cm、深さ44cmを測る。土壙内からは遺物は検出されなかった。
- (10) 10号土壙墓は、9号土壙墓の北に接してある円形の土壙墓で、長径75cm、短径65cm、深さ39cmを測る。土壙内からの遺物の出土はなかった。
- (11) 11号土壙墓は、7号土壙墓の北東1mに位置する方形の土壙墓で、長辺60cm、短辺35cm、深さ23cmを測る。耕作による削平で浅くなつたためか土壙内からは遺物の出土は見られなかつた。
- (12) 12号土壙墓は、11号土壙墓の東1mに位置する方形の土壙墓で、長辺65cm、短辺40cm、深さ47cmを測る。



第61図 近世土壤墓実測図 (%)

(9) その他の遺物

1. 金属製品

本遺跡から出土した金属製品の多くは平安時代の遺物と考えられるが、火打金や煙管など近世の遺物も覆土や溝及び近世土括墓から出土している。

第62図No.1は1号溝から出土した鉄鎌で、怪部の断面は長方形を呈し、基部の先端が欠損しているが残存部分の全長は20cmを測る。No.2は6号住居址覆土中から出土した鉄鎌で、断面長方形の基部先端を欠損し、残存する全長は10.4cmを測る。No.3はK-11出土の鉄鎌で、基部先端を欠損するが残存部の全長は9.6cmを測る。No.4は2号溝から出土した鉄鎌で柄は欠損しているが、残存部の長さは6.7cmを測る。No.5は4号住居址出土の鎌の一部で、残存部の長さは7.6cmを測る。No.6は1号溝から出土した鉄製の紡錘車の一部で残存径5.1cm、中央に径5mmの軸の孔がある。No.7と8は4号住居址出土の断面U字状に薄い鉄板を曲げたもので、用途は不明である。No.9~11は鉄鎌の柄の部分の残存で、長さはそれぞれ6cm、5.8cm、5.4cmを測る。No.9・10は1号溝、No.11は13号住居址からの出土である。No.13は鉄鎌の柄の部分の残存で長さは5cmを測る。No.14は1号溝から出土した先端部を欠損した角釘で、残存部の長さは4cmを測る。No.15は4号住居址上面から出土した火打ち金で、長さ5cmを測る。

2. 土製品

第62図No.16~18はグリットから出土した平安時代の土錐である。No.16はE-8出土で先端部を一部欠損しているが、長さ4.7cm、径1.8cmを測る。No.17はE-8出土の欠損品で、残存部の長さは2.8cm、径1.3cmを測る。No.8はH-12出土の完型品で、長さ4.3cm、径1.8cmを測る。

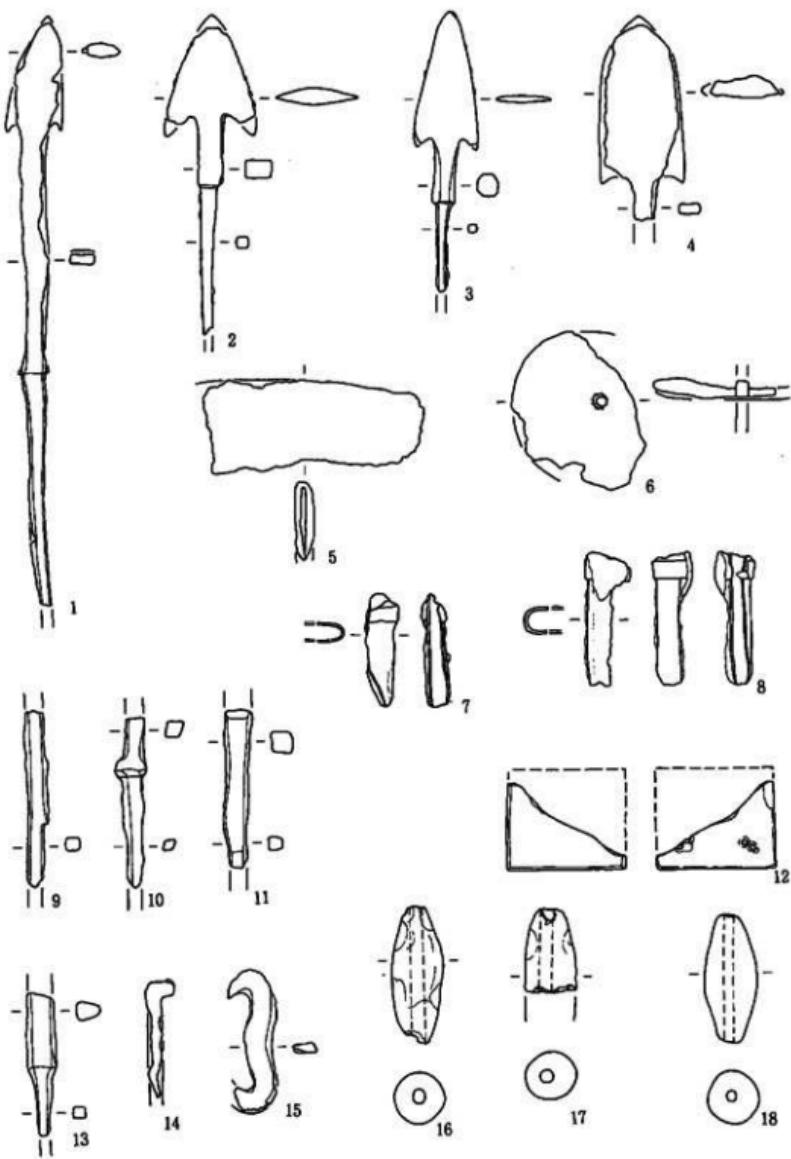
3. 石製品

(1) 腰帶具

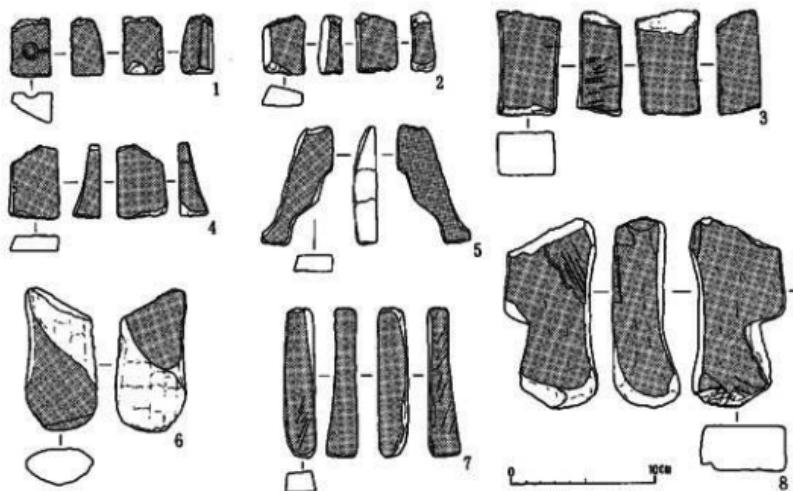
本遺跡からは、2点の遙方と1点の丸柄が出土しているが、いずれも頁岩製である。第62図のNo.12は8号住居出土の頁岩製の遙方で、幅4.1cm、長さ4cmの方形で裏面には4個の潜り穴がある。F-8グリットからは遙方と丸柄の破片が1点づつ出土している。

(2) 砧石

第63図No.1は1号溝出土の断面三角形の砥石の残欠で、縦2.0cm、横1.4cmを測り、4面に使用痕が認められる。No.2は縦1.9cm、横1.4cmを測る断面方形の砥石の残欠で、表採遺物である。No.3はE-7-2グリット出土の断面長方形の砥石の残欠で、4面に使用痕が認められる。No.4は、5号溝出土の断面方形、縦2.5cm、横1.6cmを測る砥石残欠で、度重なる使用のため中央が半分以下に擦り減っている。No.5は、E-9グリット出土の砥石の残欠で縦4.0cm、横1.4cmを測る。No.6は断面梢円形の砥石の残欠で使用痕は表裏の2面、縦5.0cm、横2.2cmを測る表採遺物である。No.7は、11号住居址出土の砥石の完型遺物で、断面は方形を呈して使用痕は4面に認められ、縦5.1cm、横1.0cmを測る。No.8は、C-6グリット出土の断面



第62図 金属・土製品実測図 (1/2)



第63図 砧石 (1/4)

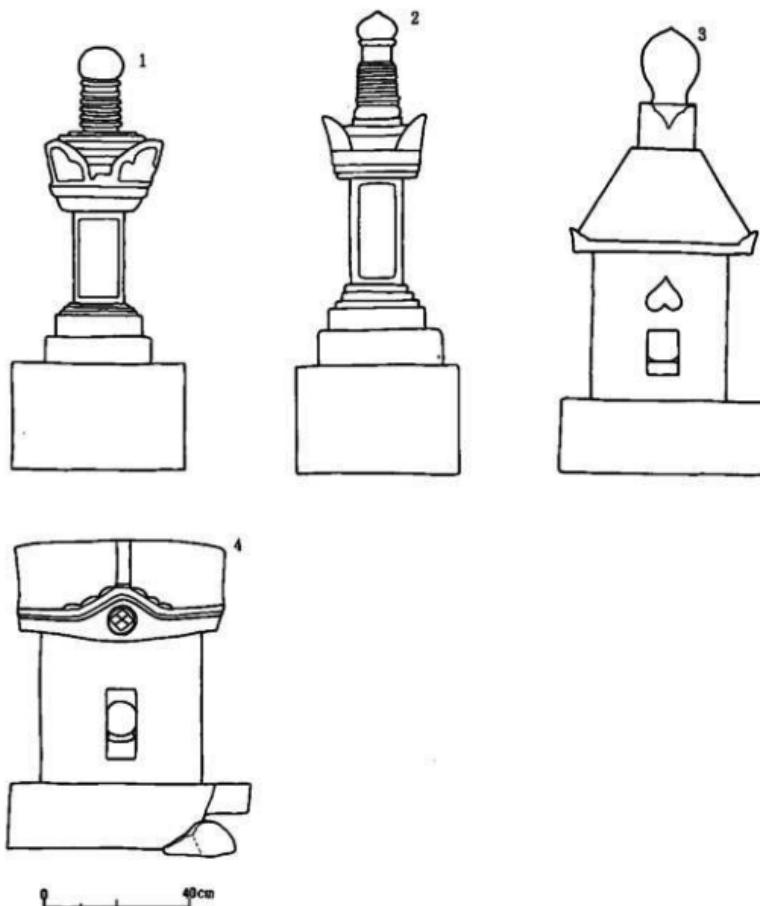
方形の大形の砥石の残欠である。

4. 石造物

本遺跡の北側に隣接する民家の西には、屋敷基地があり、その中には形態から近世初頭から中頃と推定できる墓碑があったので、そのうち3基を実測した。第64図No 1は高さ116cmを測る方鏡印塔で、形態は17世紀後半と考えられるが、印刻されている年号は平安末期である。塔身は縦に長く幅14.4cm、総25.6cmを測る。No 2は高さ127cmを測る方鏡印塔であるが、形態からは18世紀前半であろう。No 3家型石祠で、高さ123cmを測り、塔身内部には玉石がおかれている。軒は反りが見られ、屋根の稜は直線的であるため、18世紀後半であろう。No 4は社型石祠で高さ85cmを測る。軒は唐破風となり正面中央には武田菱が陽刻されている。また、棟は左右が若干下がり、屋根中央には幅4cmを稜がある。塔身の内部には玉石が収められている。

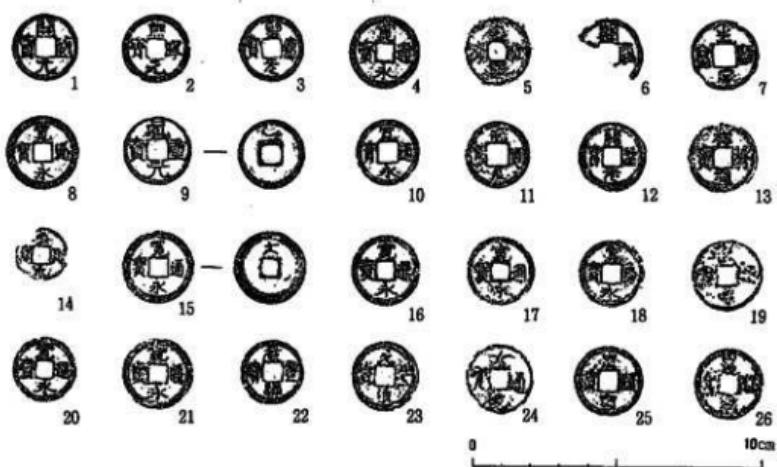
5. 錢貨

本遺跡から出土した錢貨は26点であるが、その出土地は1号溝とJ-10グリット及び近世前半の土壤墓からが殆どである。開元通寶 (No 1) は1点で径2.35cmを測り、1号溝からの出土である。熙寧元寶 (No 2・3) は2点あり、No 2は径2.35cm、No 3は2.25cmを測り、いずれも1号溝からの出土である。寛永通寶は11点出土しているが、1号溝からは2点 (No 4・5) 、J-10グリットからは2点 (No 8・10) 、その他は (No 11・15・16・17・18・20・21) は近世土壤墓からの出土である。No 4は径2.45cm、No 5は2.25cm、No 8は2.5cm、No 10は2.25cm、No 11



第64図 石造物

は2.25cm、No.15は2.45cmで裏面に大の陽刻がある。No.16は2.35cm、No.17は径2.3cm、No.18は2.2cm、No.20は2.2cm、No.21は2.45cmを測る。（第65図参照）



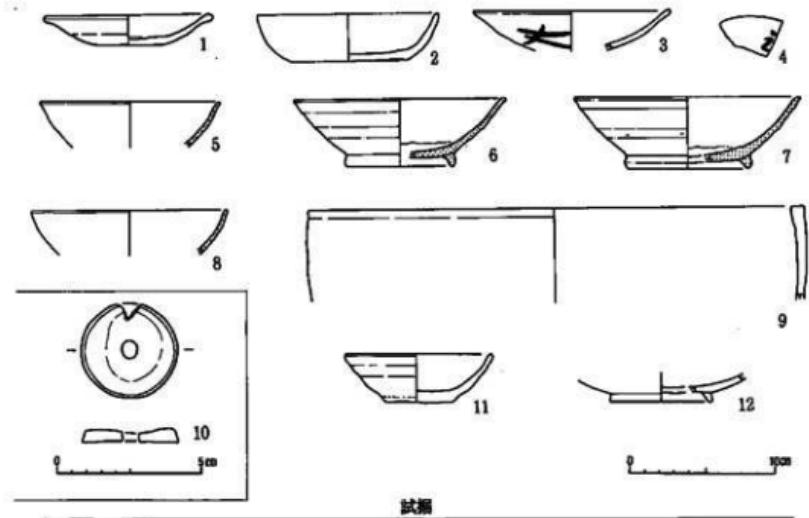
第65圖 古錢 (%)

00 試掘調査の概要

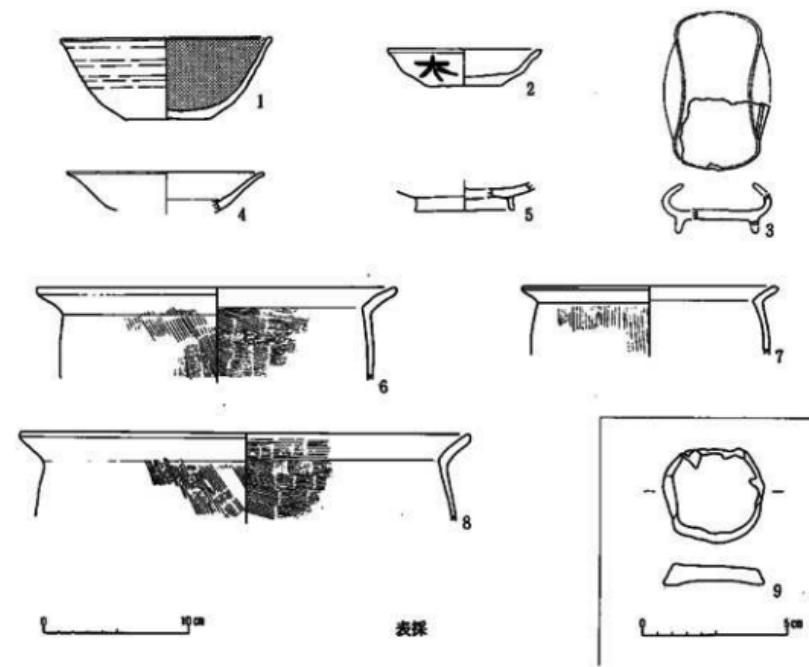
1981年4月20日より調査対象地区全域に試掘坑を入れ、遺構及び遺物の出土状況の把握を目的とした試掘調査を開始した。調査方法は、水田毎に一箇所から二箇所の2m四方の試掘坑を設定し、耕作土、床土、遺物包含層に区分して掘り進んだ。調査は北西水田から着手した。試掘坑には着手順にNoをつけ、出土遺物は試掘坑単位であげた。

遺跡中央部分とやや東よりには南に延びる谷が2本確認された。遺構は縄文時代の住居址は検出されず、6軒の平安時代の住居址が、調査対象地域の中央部分から南にかけて確認された。中央部分を南に延びる溝は、水田地帯中央にある農道と南半分が重なっており、北側については水田と畑の境の下を流れていると推測できる。調査区南東側に確認された谷は、大規模なもので、人為的なものではなく、また遺物の検出はないため、遺構との重複はないものと考えられる。北西側では縄文時代の土器片が若干出土するが遺構の検出はなく、北東側では縄文時代の土器片は比較的検出できるが、遺構は確認できない状況であった。以上の試掘結果から、調査対象地域の東側（衣川）には幅広い谷があり遺構は存在しない。西側も谷となり南北斜面の傾斜がきくなるので遺構が存在する可能性は低いと判断するに至った。

出土した遺物の中で遺構に関係しないもののみ第66図に示した。No.1は口径11.4cm、器高2.1cm、底径4.4cmを測る玉状口縁を呈する坏で、1号住居の南西付近に設定した試掘坑より出土している。No.2は口径15cm、器高3.3cm、底径8cmを測る軟陶系の白色の坏で、灰釉陶器の釉が剥離したものと考えられる。1号住居と4号住居の中間に設定した試掘坑から出土している。No.3は「丈？」と墨書きされている土器の口縁部破片である。No.4も墨書き土器の破片である。No.5は灰釉陶器で、口径12.6cmを測る。1号住居と4号住居の中間に設定した試掘坑より出土している。No.6は口縁部が若干外反し、三日月高台を呈する灰釉陶器で、口径15cm、器高4.7cm、底径3.8cmを測る。No.7は口縁部が若干尖り、外反する灰釉陶器で、口径17.8cm、器高5.9cm、底径8.8cmを測る。1号住居周辺から出土している。No.8は口径13.6cmを測る灰釉陶器の口縁部破片である。No.9はNo.14の試掘坑から出土した口径14.6cmを測る内耳土器の口縁部破片である。No.10は直徑3.4cmで中央に径6mmの孔がある有孔円盤で、糸切りが認められる。No.11は直徑10.8cm、器高3.2cm、底径5cmを測る坏である。No.12は灰釉陶器の皿の底径7cmを測る底部破片で6号住居の西側の1号溝より出土している。



試掘



表探

第66図 試掘・表探出土遺物実測図 (1/4)・(1/2)

第4章 原田遺跡の遺構と遺物

1. 住居址

1号住居

概 要 1号掘立柱建物址の南、E-2グリットに位置する平安時代の住居で、黒色土をベースにした地山に掘り込んでおり、覆土は暗褐色土のため、プラン確認は若干手間取った。耕作による削平を著しく受けており覆土の深さは数cm程度である。また、竈の袖の石も抜かれた状態であるが、出土した遺物は比較的少なく、時期的にはIX-X期に比定されるものが多い。覆土中から縄輪碗の破片が出土している。内面黒色土器の出土量は、本遺跡の住居の中では少ない。出土遺物の時期はX~IX期と考えられる。

形 状 南東隅を欠く方形を呈し、東壁4.3m、南壁3.8m、西壁4.55m、北壁4.35mを測る。

床面・壁 床面は南から北に若干傾斜している傾向があるが、全体としては平坦である。中央には長径93cm、短径74cm、深さ11cmを測る。周溝は確認されていないが、北壁東側には長さ3m、深さ10cm前後の浅い不整形な掘込みがある。

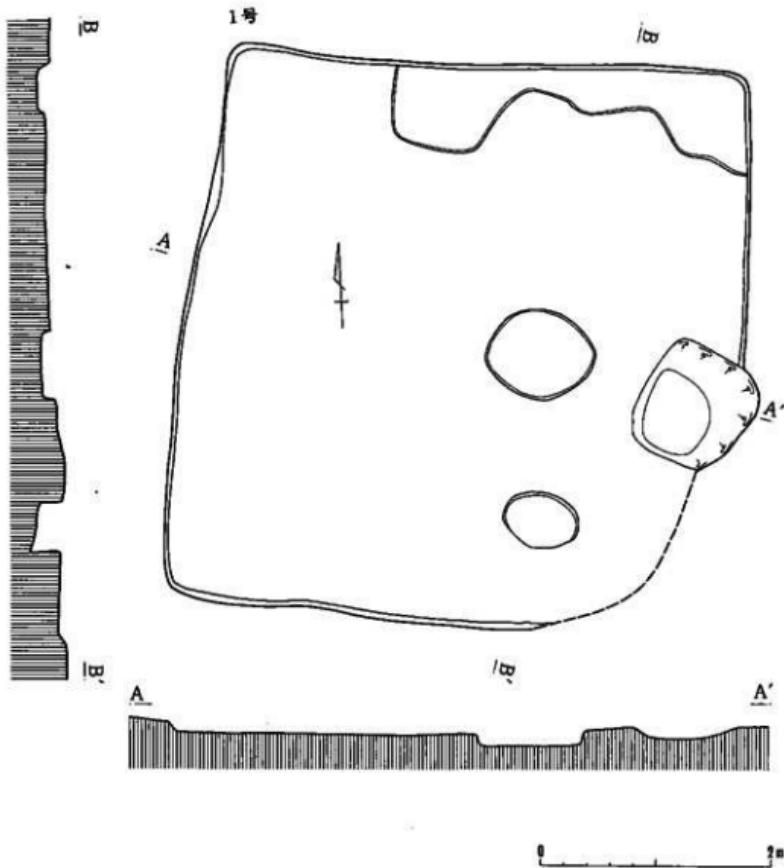
竈 東壁南側に東西南北の掘り方を有するが、削平されて袖芯の石も残っておらず、僅かに焼土を検出するにとどまった。

遺 物 第68図No.1は縄輪陶器で、口径15.1cm、器高4.4cm、底径6.2cmを測る。No.2は土師の壺で口径12.1cm、器高4cm、底径5.5cmを測る。No.3は土師の壺で、口径15.8cmを測る。No.4は土師の壺で口径12.7cm、器高2.7cm、底径6cmを測る。No.5は土師の壺で口径13cmを測る。No.6は土師の壺で口径14.7cmを測る。No.7は土師の壺で、口径12.3cmを測る。No.8は土師の壺で、底径5.9cmを測る。底部糸切り痕を有し、内面にタールが付着した内面黒色土器である。No.9は壺の底部破片で、底径8.9cmを測り木葉痕が認められる。No.10は壺の口縁部破片で、口径27.2cmを測り、内外面に刷毛調整が施されている。No.11は壺の口縁部破片で、口径25.6cmを測り、内外面に刷毛調整がなされている。No.12は須恵器の壺の破片である。

2号住居

概 要 1号住居の南、F-2グリットに位置する平安時代の住居で、覆土は4層に分けられる。覆土の厚さは30cm前後を測り、焼土粒子が若干混入する黒褐色土層をベースとする。遺物の出土量は多く、中でも内面黒色土器の比率は高く墨書き土器も多く出土している。壺の出土量は少ないが、小型壺の破片があり、壺の年代はXI期を中心と考えることができる。竈の残存状況は良好で、天井石も残り、中央からは壺が竈にかけられた状態で出土している。

形 状 南北に長くやや屈曲する方形を呈し、東壁5m、南壁3.85m、西壁4.3m、北壁3.9m



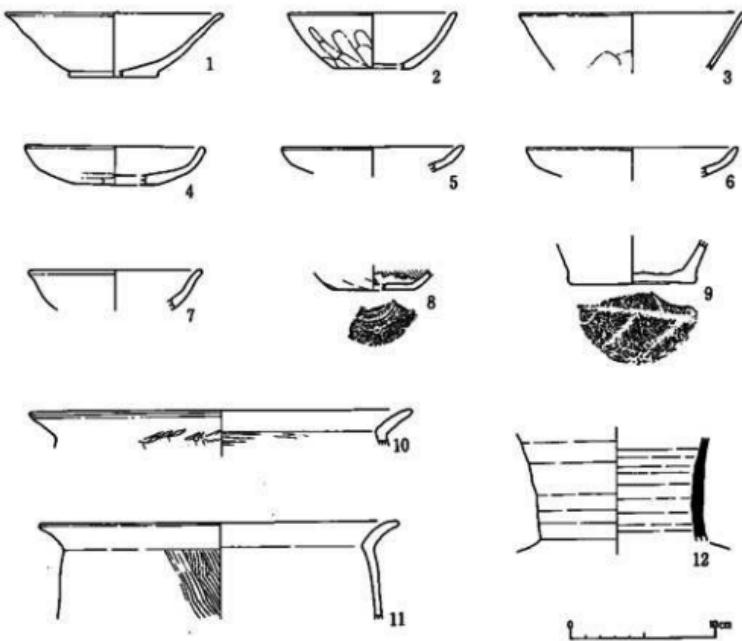
第67図 1号住居実測図 (J.G.)

を測る。

床面・壁 床面は中央及び南側に若干傾斜する傾向が認められ、中央付近には長径80cm、短径60cm、深さ10cmと縦1.5mと横80cmの土壙がある。東壁は25cm、南壁30cm、西壁28cm、北壁40cmを測り、周溝も南壁西側及び西壁南側と東壁の北側に確認され、深さは10cm前後である。

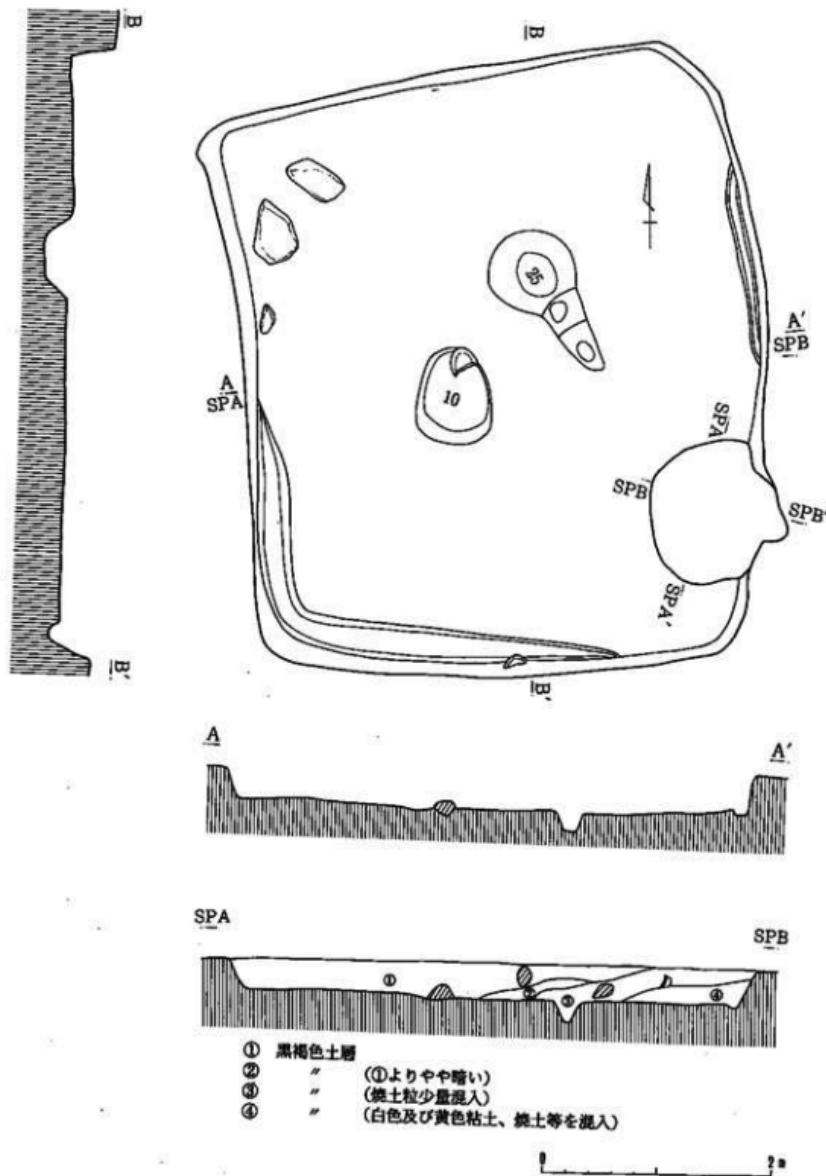
竈 極めて遺存状況が良好な竈で、天井石が1枚残り、その住居内側に甕が出土している。この状況は廃棄された当時のままで検出できたものと考えられる。掘り方は東西1.2m、南北1.2m、深さ15cmを測る。

遺物 第70図No.1は竈内出土の甕で、口径13cm、器高2.5cm、底径5.8cmを測る内面黒色土

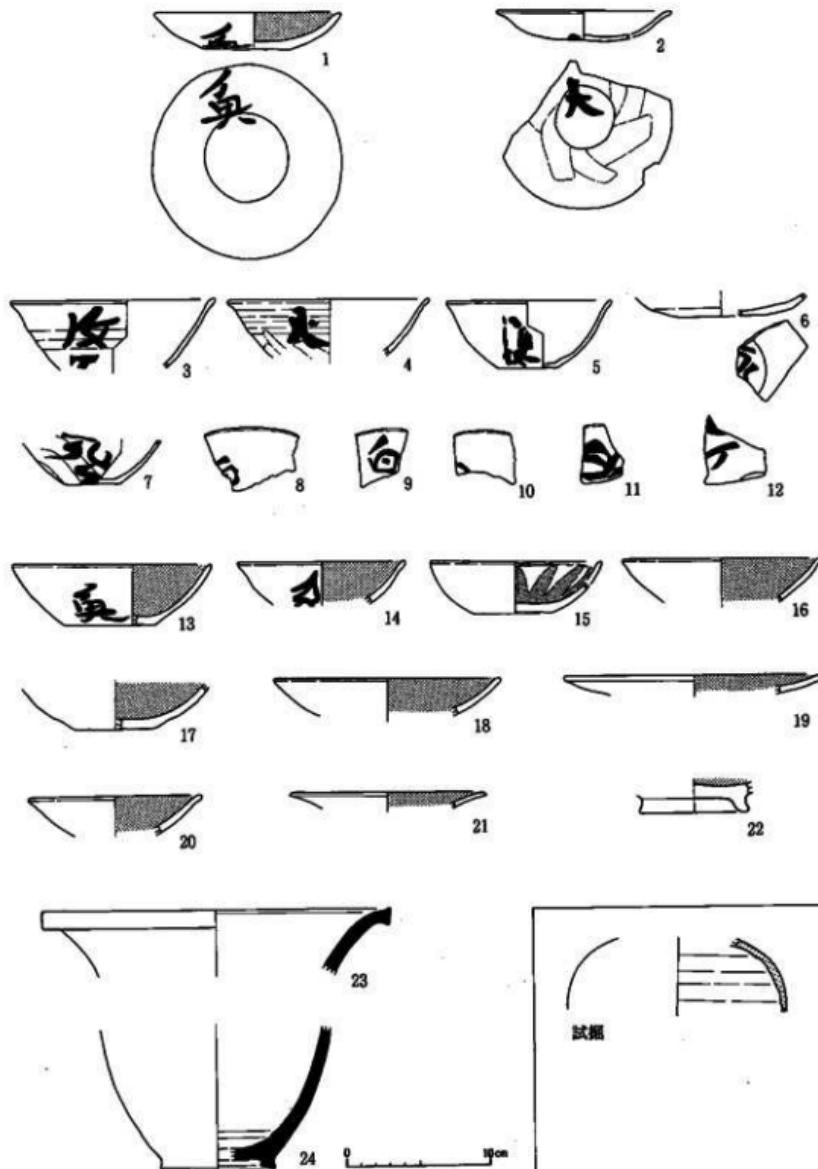


第68図 1号住居出土遺物 (1/4)

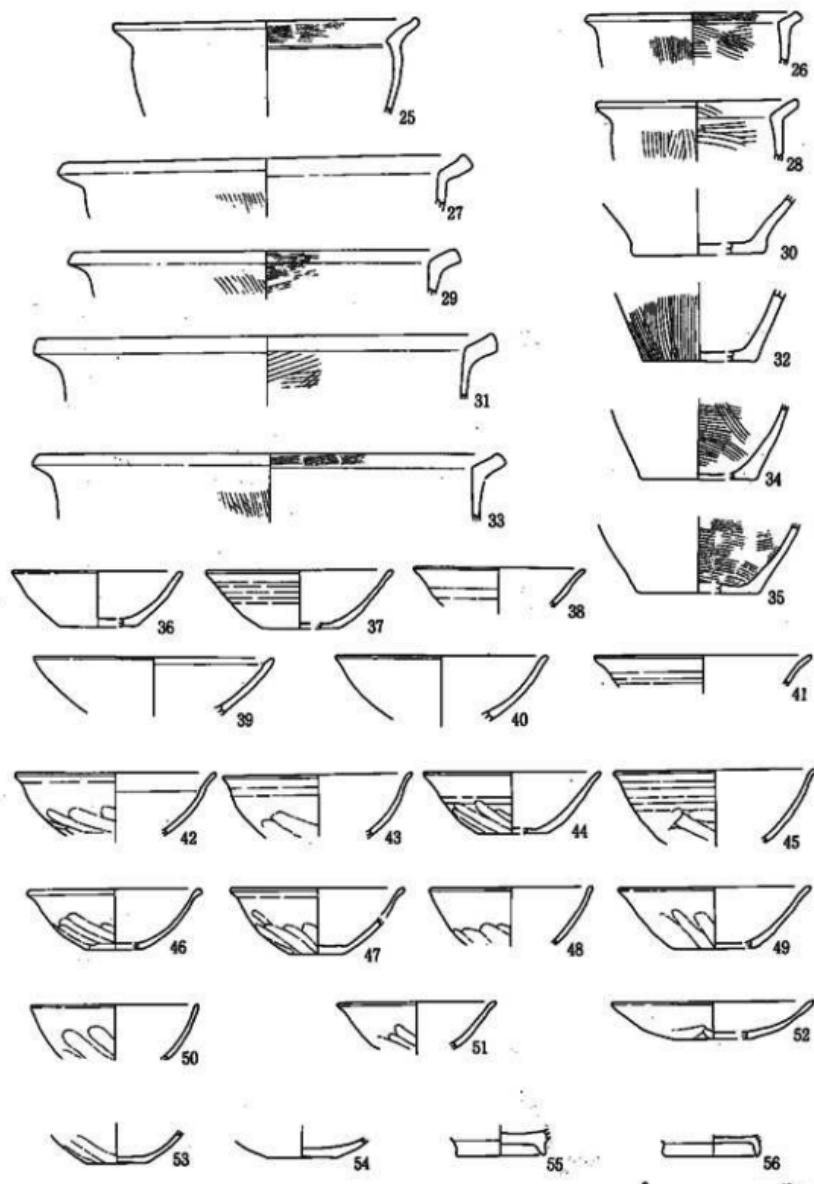
器で、外面に「魚」と墨書きされている。底部の糸切り痕は竈によって丁寧に消している。内面には同心円状と放射状の箝磨きが認められる。No. 2は竈の炊き口付近出土の口径12cm、器高2.2cm、底径4.2cmを測る壺で、底部外面箝調整によって糸切り痕を消し、「大」の墨書きがある。No. 3は口径12cmを測り、外面には墨書きがある。No. 4は口径14cmを測る「大」と墨書きのある壺で、胴部下半は箝調整されている。No. 5は口径11.2cm、器高4.6cm、底径4cmを測る壺で、外面には「酒壺?」と墨書きされている。No. 6～12は墨書き土器の破片で、No. 9は「白」と判読できる。No. 13は口径14cm、器高4.1cm、底径6.2cmを測る内面黒色土器で、外面には「魚」の墨書きが見られる。No. 14は内面黒色土器で、口径12.6cmを測る。No. 15は口径12cm、器高3.4cm、底径5.6cmを測る暗文のある内面黒色土器で、竈内からの出土である。No. 16は口径14.8cmを測る内面黒色土器である。No. 17は内面黒色土器の底部破片で、底径5.6cmを測る。No. 18は内面黒色土器で、口径15.8cmを測る。No. 19は内面黒色の皿で、口径17.9cmを測る。No. 20は口径11.9cmを測る内面黒色土器である。No. 21は口径13.4cmを測る内面黒色の皿である。No. 22は高台付きの内面黒色土器である。No. 23は灰釉の長頸壺の口縁部破



第69図 2号住居実測図 (A)



第70图 2号住居出土遗物 1 (1/4)



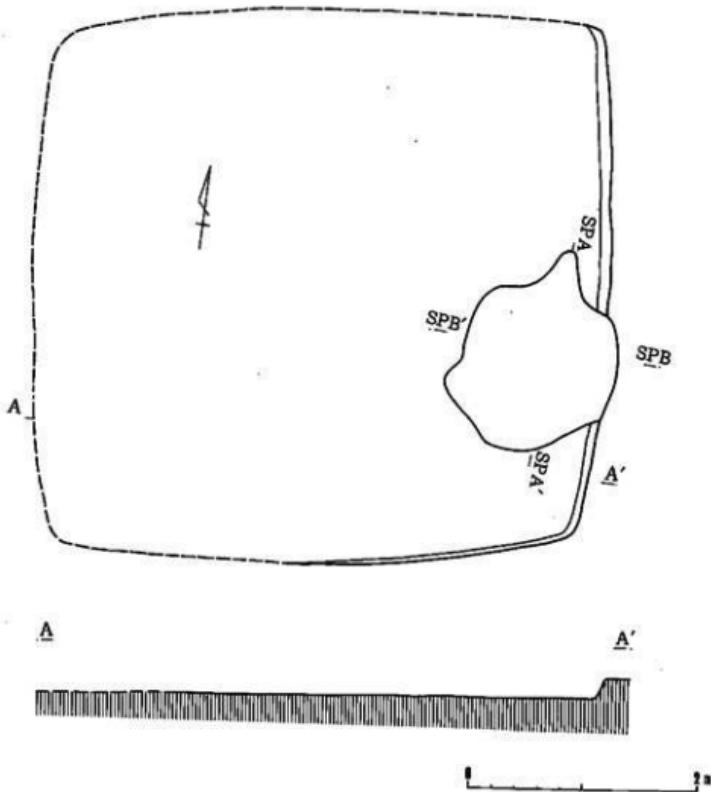
第71圖 2號住居出土遺物2(1/4)

片で、口径24cmを測る。No.24は灰釉の瓶の底部破片で底径8cmを測る。第71図No.25～35は土師の壺で、時期はXI～XIIに比定される。No.25は口径21cmを測り、口唇部分は肥大せずに外反する。No.26は口径14.3cmを測り、外反する口縁部は若干肥大する。No.27は口径27.7cmを測り、肥大せずに外反する。No.28は口径13.6cmを測る口縁部破片で、肥大せずに外反する。No.29は口径26.6cmを測り、外反する部分は肥大している。No.30は底部肩が張る破片で底径9.1cmを測る。No.31は外反している部分が肥大する口縁部破片で、口径31.8cmを測る。No.32は底部破片で、底径7.8cmを測る。No.33は口径31.9cmを測る口縁部破片である。No.34は底部破片で、底径8cmを測る。No.35は底部破片で、底径8.6cmを測る。No.36～56は壺で、No.42～53は外面に範調整が見られる。No.36は口径11.9cm、器高3.8cm、底径5.4cmを測る壺で、口縁部は肥大せず底部から直線的に立ち上がる。No.37は口径12.6cm、器高4cm、底径5.4cmを測り口縁部が若干肥大する壺で、胴部には数本の稜が見られる。No.38は口径12cmを測る壺で、口縁部は若干外反する。No.39は口径16.4cmを測る黄褐色を呈する壺で、口縁部内側は凌ぎが認められる。No.40は口径15cmを測る壺で、口縁部は若干外反する。No.41は大きく外反する壺で、口径15cmを測る。No.42は胴部下半に範調整が施され、胴部から口縁部にかけて「く」字状に屈曲する壺で、口径13.6cmを測る。No.43は胴部下半に範調整が認められ、胴部から口縁部にかけて「く」字状に屈曲する。No.44は口径12.4cm、器高4.2cm、底径4.8cmを測り胴部下半に範調整が施され、底部から口縁部には直線的に立ち上がる壺である。No.45は口径14cmを測り、口縁部が外反し、胴部には数本の稜が認められる。No.46は著しい外反する玉状口縁を呈し、胴部下半には範調整が施された壺である。No.47もNo.46と同様な形態を有する壺で、口径11.8cm、器高4.5cm、底径3.8cmを測る。No.48は胴部下半に範調整が見られる口径11.4cmを測る壺である。No.49は胴部下半に範調整が施され、口縁部が若干肥大する壺で、口径13.4cm、器高4.7cm、底径5.7cmを測る。No.50は胴部下半に範調整が認められる壺で、口径11.5cmを測る。No.51は胴部下半に範調整が認められる壺で、口径11.2cmを測る。No.52は口径14cm、器高2.7cm、底径5.4cmを測る壺である。No.53・54は底径4.2cmと4.8cmを測る壺の底部である。No.55・56は壺の高台で共に底径6.3cmを測る。

3号住居

概要 2号住居の南西に隣接する平安時代の住居で、竈は東壁の南に造られた一般的な形態を有する。出土遺物は壺の破片が主体で、壺は小型壺を含めても少量でX期を中心とした時期と考えることができる。壺は底部糸切り痕の残る内面黒色土器が主体で、高台付きも認められる。また、绳文時代前期後半から中期初頭の土器片も出土している。

形状 東西にやや長い方形を呈するものと考えられる住居であるが、東壁から南壁東側が残る以外は削平されているため、正確な形態は把握できないが、東壁4.15m、南壁



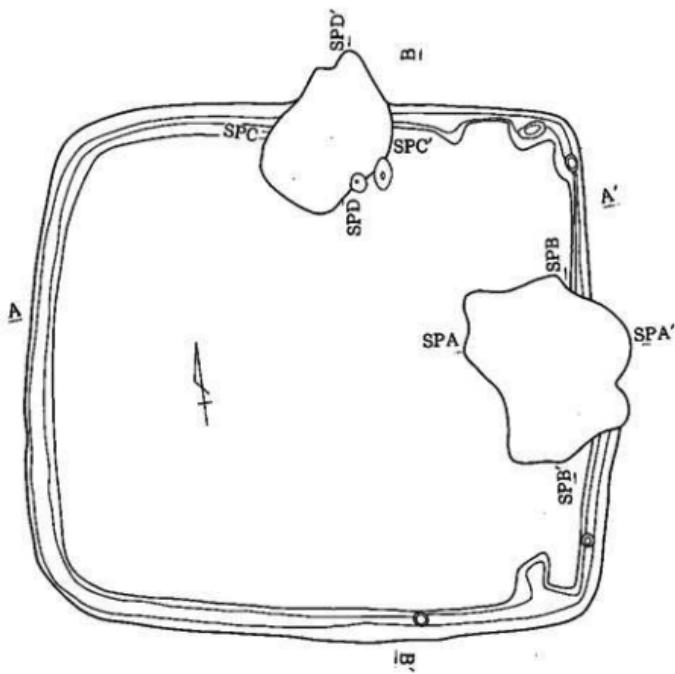
第72図 3号住居実測図 (ノ)

4.4m、西壁4.25m、北壁4.5mを測る。

床面・壁 床面と北西側は削平されており確認できないが、南東側には堅い床面が検出された。壁は東と南北分が若干残る程度で、深さも東壁で15cmを測る。

電 東壁中央より南に位置する一般的な形態で、東西1.5m、南北1.4mを測る掘り方を有する。電より出土した遺物は、No.15~16・18でこれ以外にも甕の破片が出土している。

遺物 第74図No.1は口径16.3cm、器高5.3cm、底径7cmを測り、外面には「日」の墨書が内面には放射状の暗文が施されている坏で、口縁部は若干外反する。No.2は口径11.8cm、器高4.4cm、底径6.2cmを測り、外面には二文字の墨書がある内面黒色土器である。No.3は口径13.2cmを測る内面黒色土器で、胴部には「日」と判読不可能な墨書がある。No.4は墨書土器の破片で、文字は判読できない。No.5は口径14.8cmを測る

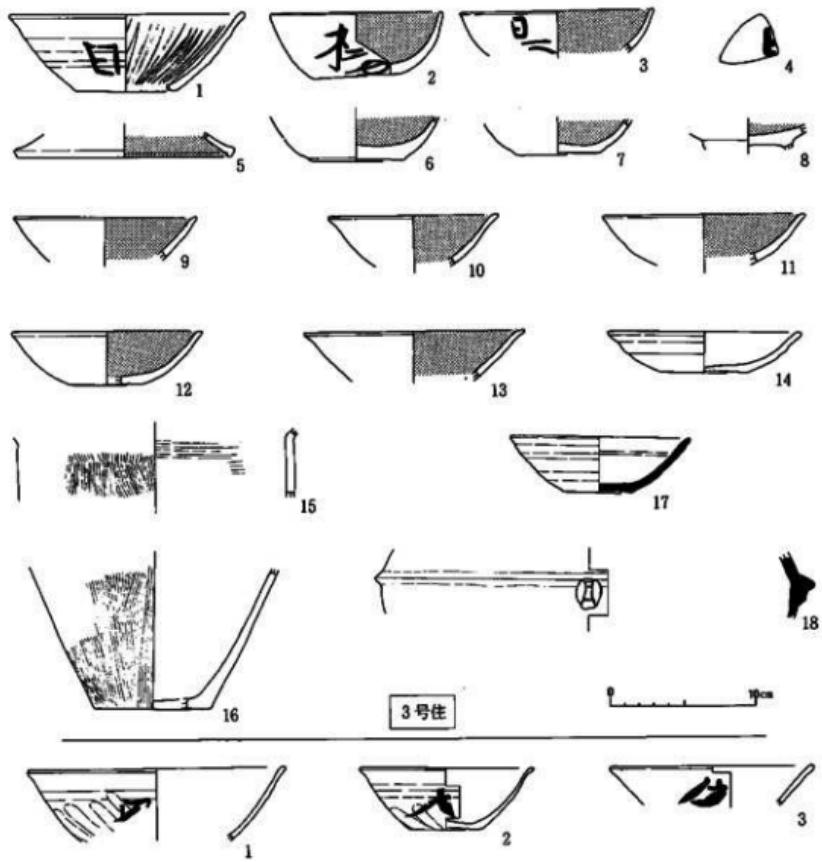


— 103 —

内面黒色の蓋である。No.6は底部が厚く下部に稜が入る内面黒色土器の底部破片で、底径6.8cmを測る。No.7は内面黒色土器の底部破片で、底径5.7cmを測る。No.8は底径6cmを測る高台付きの内面黒色土器である。No.9は口径12.7cmを測る内面土器である。No.10は口径11.8cmを測る内面黒色土器で、口縁部は外反する。No.11は口径13.8cmを測る内面黒色土器で、底部から丸みをもって立ち上がる。No.12は口径13.2cm、器高3.7cm、底径5cmを測る内面黒色土器で、底部から丸みをもって立ち上がる。No.13は口径15.3cmを測る内面黒色土器で、口縁部は若干外反する。No.14は口径13.2cm、器高2.8cm、底径5.9cmを測り、胴部は底部から丸みをもって立ち上がり、稜が2本入る壺である。No.15は壺の胴部破片で、内面には横、外面には縦の刷毛目が残る。No.16は壺の底部から胴部の破片で、底径8.2cmを測る。No.18は須恵器の壺の胴部破片である。

4号住居

- 概要** 3号住居の南西5m、H-4グリットに位置する平安時代の住居で、竪を北壁中央と東壁中央にもつ特異な形態である。周溝は全体に巡り、床面も比較的平坦である。この住居に伴う出土遺物は壺と壺が中心で、内面黒色土器と土師の壺との比率は他の住居と比較すると低い。壺の胴部下半から底部は範調整が施されているものが多く、墨書き土器も出土している。
- 形状** 東西に長い方形を呈し、東壁4.1m、南壁4.35m、西壁3.9m、北壁4.1mを測る。
- 床面・壁** 床面は全体的に平坦で、堅い床がよく残っている。周溝は周囲に巡り、幅は25~30cm、深さは10cm前後である。壁の深さは東壁40cm、南壁30cm、西壁40cm、北壁40cmを測る。
- 竪** 北壁と東壁にそれぞれ1ヶ所づつ造られており、東竪は東西1.5m、南北1.6mの掘り方を有し、覆土は7層に分けることができる。造存状況は、袖石が構築時の位置を保っていない状態で、天井石も落ちている。北竪は東西1.2m、南北1.4mの掘り方を有する。覆土は9層に分けられ、造存状況は良好ではないが、壺の口縁部は竪中央部より出土している。
- 遺物** 第74図No.1は外面範調整が施されている壺で、口径17.6cmを測り、判読不可能な墨書きがある。No.2は口径12cm、器高4.2cm、底径5cmを測り、口縁部が外反する墨書き土器で、「大」と判読できる。No.3は口径13.9cmを測る墨書き土器である。No.4は外面範調整した玉状口縁を呈する壺で、口径12.4cm、器高2.6cm、底径5.6cmを測る。No.5は胴部下半を範調整した玉状口縁を呈する壺で、口径16.2cm、器高4.9cm、底径5.4cmを測る。No.6は胴部下半を範調整する壺で、口径12cm、器高4.3cm、底径5.2cmを測る。No.7は胴部下半を範調整する壺で、口径11cm、器高4.1cm、底径3.9cmを測る。No.8は胴部下半は範調整し内面に暗文を有する壺で、口縁部は外反し口径13.5cm、器高5.8cm、底径5.3cmを測る。No.9は底部から直線的に立ち上がり、胴部には数本



第74図 3・4号住居出土遺物 (1/4)

の縁が認められる壺で、口径15cm、器高5.1cm、底径5.6cmを測る。No.10は、口径13.6cm、器高4.1cm、底径7cmを測る。

5号住居

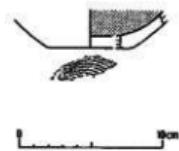
概要 H-5とH-4グリットの中間、4号住居の南西に隣接する平安時代の小型の住居である。

形狀 東西に長い方形を呈し、東壁2.2m、南壁2.85m、西壁1.65m、北壁2.6mを測る。

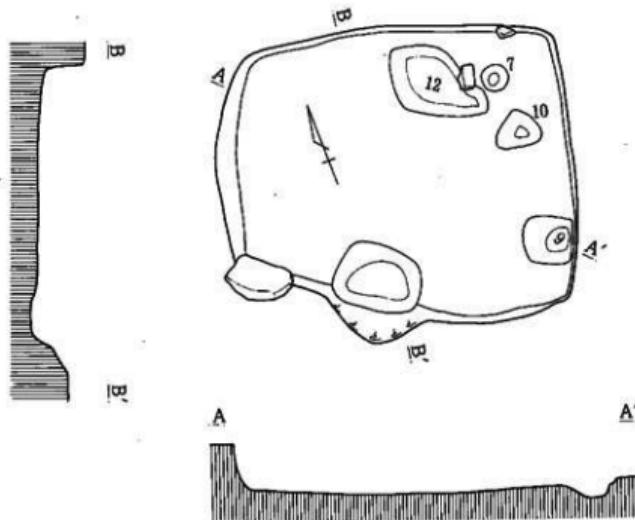
床面・壁 床面は比較的平坦で、堅く締まっている。壁の高さは東壁6cm、南壁26cm、西壁38cm、北壁33cmを測る。周溝は確認できない。

竈 竈は南壁中央に造られる特殊な住居で、掘り方は東西75cm、南北85cm、深さ5cmを測る。

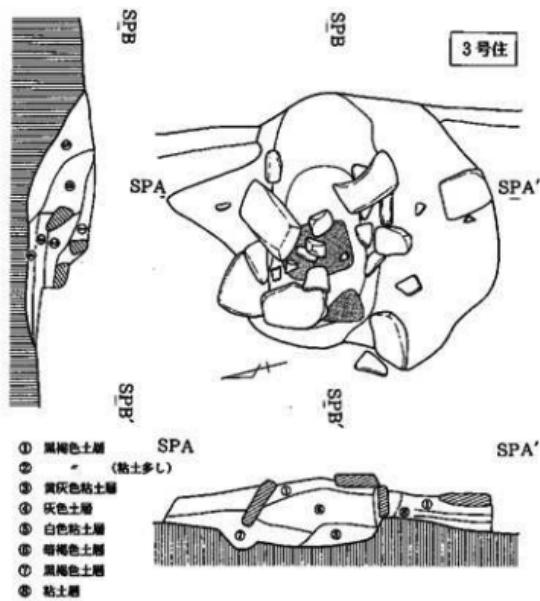
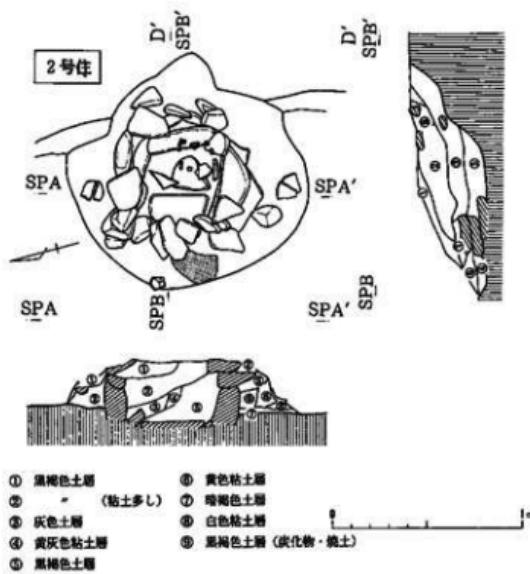
遺物 出土した遺物は極めて少なく、実測可能なものは無いが、須恵器の壺の破片が2点、内面黒色土器の破片が3点、土師の壺の破片が11点、壺の胴部破片が4点、須恵器の壺の破片が1点、縄文時代前中期の土器片が6点出土している。



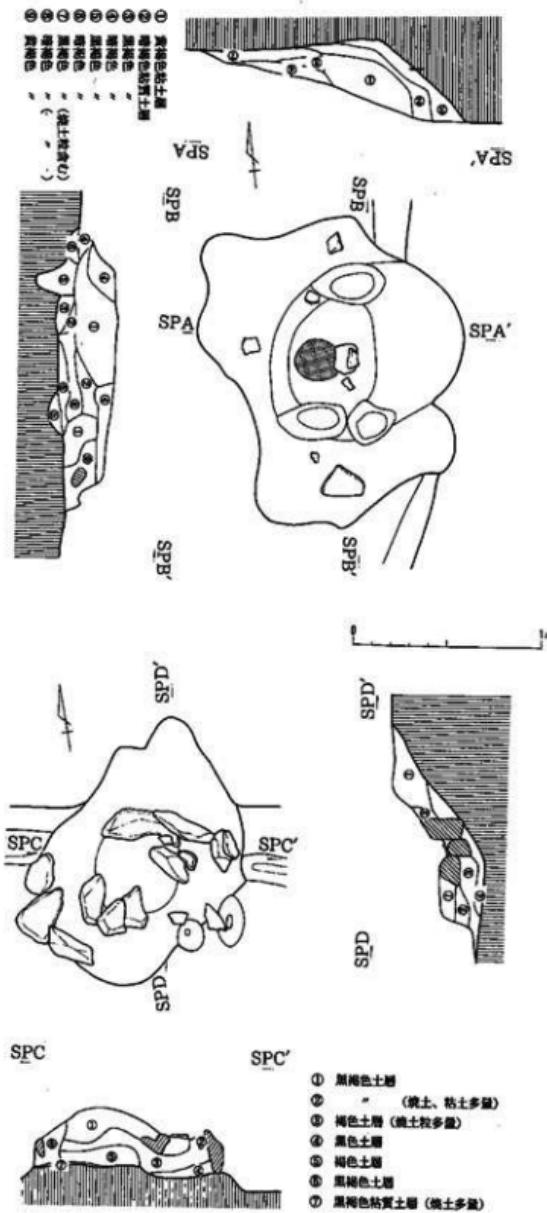
第75図 5号住居出土遺物 (1/4)



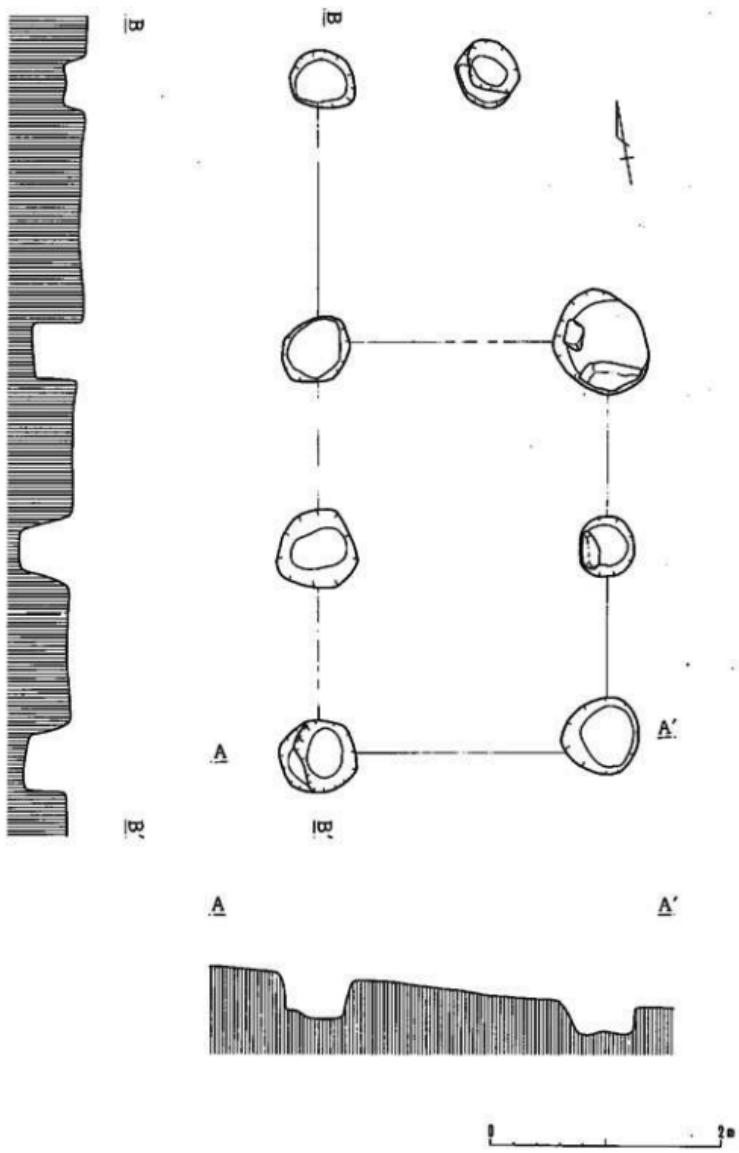
第76図 5号住居実測図 (1/4)



第77図 2・3号住居カマド実測図 (×2)



第78図 4号住居カマド実測図 ($\frac{1}{50}$)



第79圖 捷立柱建物址實測圖 (Y6)

掘建柱建物址

調査区北側で1号住居より北に位置し、主軸を南北する掘建柱建物である。南北2間（柱間3.5m）東西1間（2.5m）を測り、北側に庇が付く構造である。庇の規模は南北1間（柱間2.2m）東西半間（1.5m）である。柱穴を確認した面は南北にはほぼ水平であったが、東側に若干傾斜しており、柱穴の底のレベル差は南北では10cm以内であるが、東西でも同様であった。しかし、庇部分の柱穴は母屋より浅いものであった。

2. 繩文時代の遺構

平安時代の住居址である5号住居の西側に縄文時代前期後半から中期前半に比定される円形の土壙が5基検出された。遺物は縄文時代の前期から中期の土器片が周辺及び土壙内から出土している。

1号土壙

平面プランは不整形であるが、底は円形を呈する土壙で、縦1.2m、横1.1m、深さ40cmを測る。北側の壁には自然石が露出している。出土遺物は縄文時代前期末の土器片が出土している。

2号土壙

平面プランは梢円形を呈し、長径1.1m、短径1.05m、深さ25cmを測る。出土遺物は、前期末の土器片が検出されている。

3号土壙

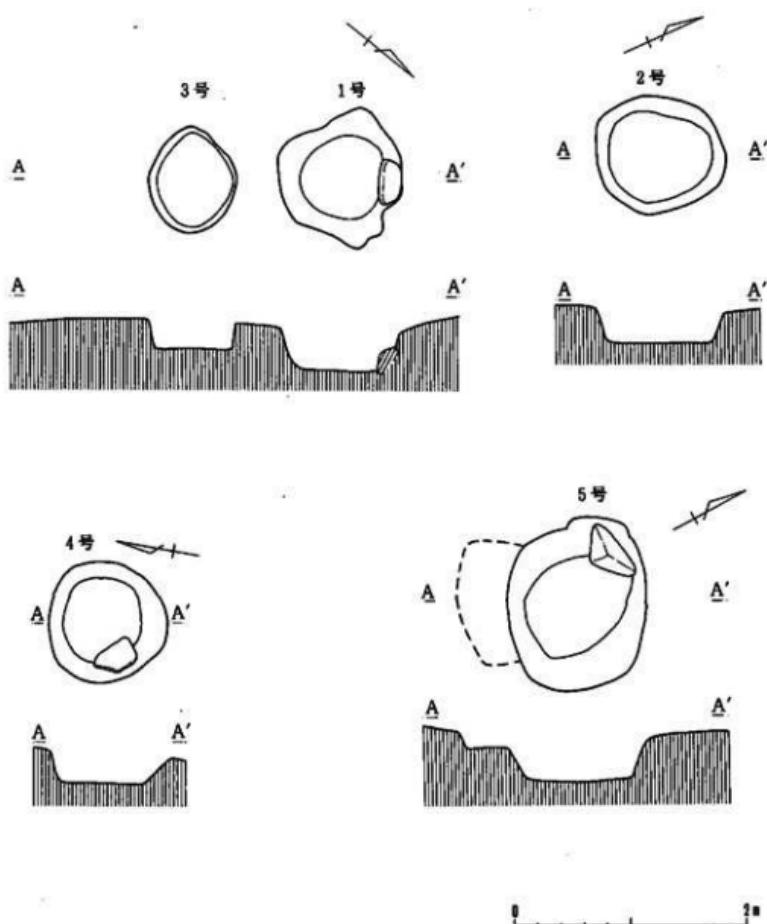
平面プランは梢円形を呈し、長径93cm、短径78cm、深さ27cmを測る。中期前半の有孔鉢付土器の破片が出土している。

4号土壙

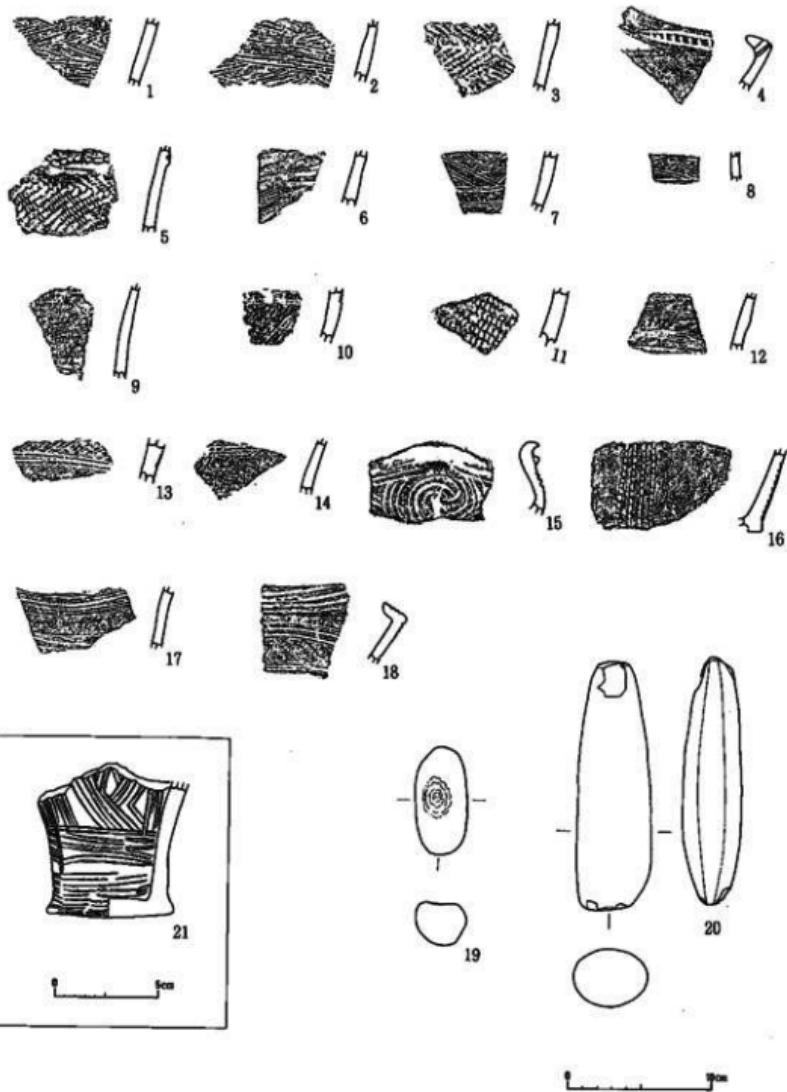
平面プランは円形を呈し、径1.05m、深さ26cmを測る。

5号土壙

梢円形を呈し、長径1.48m、短径1.2m、深さ36cmを測る。



第80図 土壤実測図 (%)

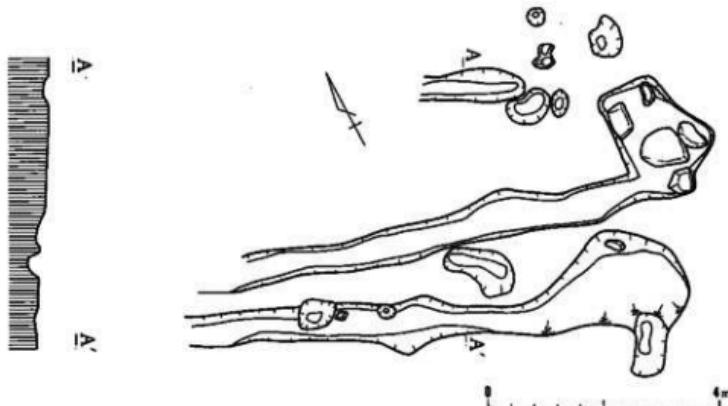


第81図 織文時代出土遺物 (1/2)

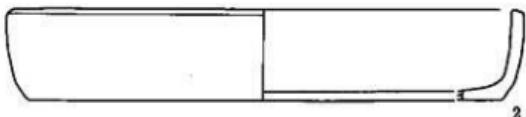
3. トレンチ・グリット出土遺物

本調査の前に行った試掘調査は、トレンチ及び試掘坑を地形を見ながら任意に設定し、左右には浅い谷があり、中央の尾根も低く幅の狭い尾根であることが明らかとなった。遺物は縄文時代前期後半から中期前半の土器と平安時代の遺物が出土した。遺構は試掘調査対象とした地域の中央の尾根上に集中していることが明らかであるため、本調査は住居及び掘立柱建物址が確認されたこの地域を中心に行った。

No.1は1号トレンチ出土で、壺の口縁部に「美」と墨書きされたもので、この墨書きと同様な文字が書かれている壺は、2号住居から出土している。No.2は3号トレンチ出土の内耳土器で、口径35.9cm、器高6.8cm、底径33cmを測る。No.3～15までは、8号トレンチ出土の遺物である。No.3は暗文のある壺の口縁部破片で、口径17cmを測る。No.4は口径16cmの壺の口縁部破片で、口縁部下には数本の稜が入る。No.5は口径15.4cmを測る壺の口縁部破片で、胴部下半には範調整が見られる。No.6は口径13.2cmを測る内面黒色土器である。No.7は須恵器の壺の底部破片で、底径10.7cmを測る。No.8～10は墨書き土器の破片で、No.9は「大」と判読できる。No.11は灰釉陶器の口縁部破片で、口径15.8cmを測る。No.12は長頸壺の口縁部破片で、口径10.4cmを測る。No.13～15は近世の台付き碗の底部破片で、灰釉が施されている。No.16～25はF-2グリット出土の遺物で、No.16は口径15.6cmを測る内面黒色土器で、胴部に墨書きがある。No.17は口径12cm、器高4.1cm、底径3.2cmを測る内面黒色土器で、胴部に墨書きがある。No.18は口縁部が「く」字状に屈曲する壺で、口径12.2cmを測る。No.19～20は墨書き土器の破片である。No.21は口径10.8cm、器高4.4cm、底径5cmを測る内面黒色土器で、底部が厚い。No.22は口径14cmを測る内面黒色土器である。No.23～25は表探資料である。No.23は口径11.4cm、器高4cm、底径5.7cmを測る壺で口縁部は厚い。No.24は口径8.8cmを測る壺の口縁部破片である。No.25は口径35.8cmを測る内耳土器である。



第82図 溝状遺構実測図 (1/100)

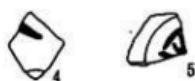
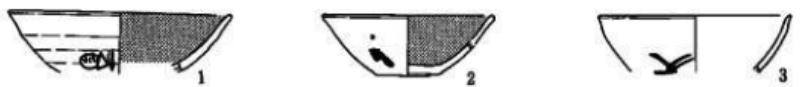


1 トレチ

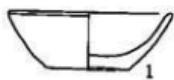


0 10cm

8 トレチ

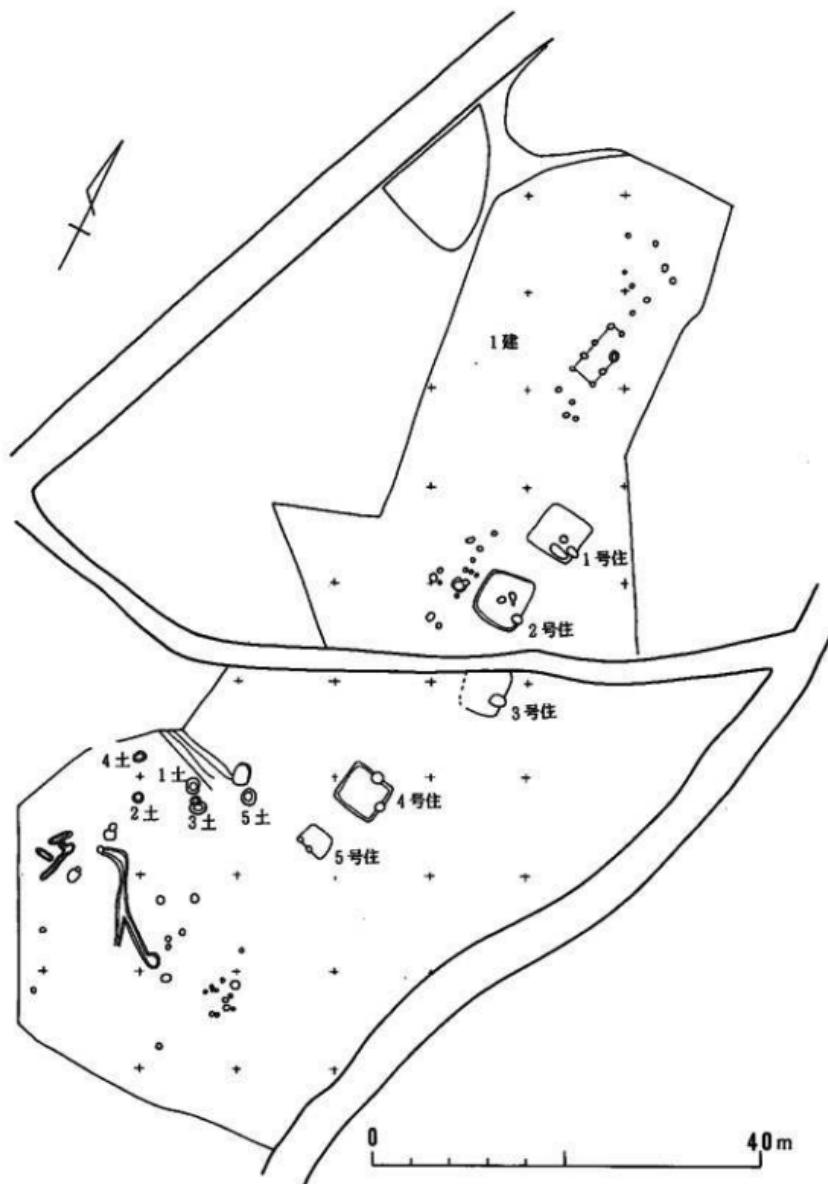


2 グリッド



表採

第83図 1トレ・8トレ・2グリッド・表採出土遺物 (1/4)



第84図 原田遺跡全体図 (Yan)



城下遺跡全景



城下遺跡 6号住居試掘



城下遺跡作業風景



城下遺跡 1号住居址 A~C



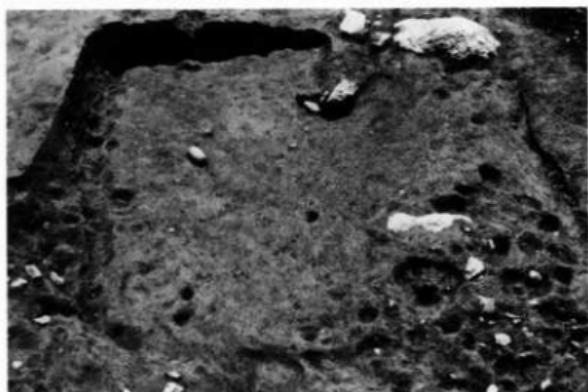
城下遺跡 1号住居址 A・B



城下遺跡 1号住居址 C



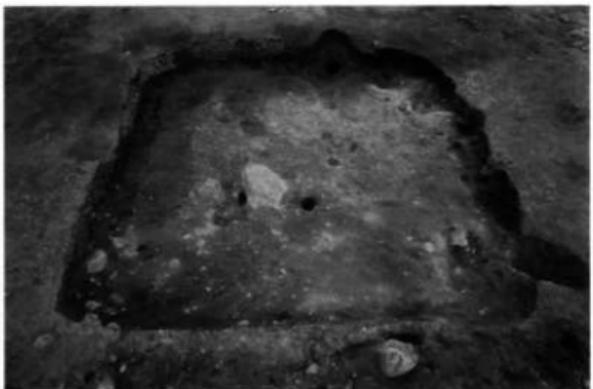
城下遺跡 2 号住居址



城下遺跡 3 号住居址



城下遺跡 4 号住居址



城下遺跡 5 号住居址

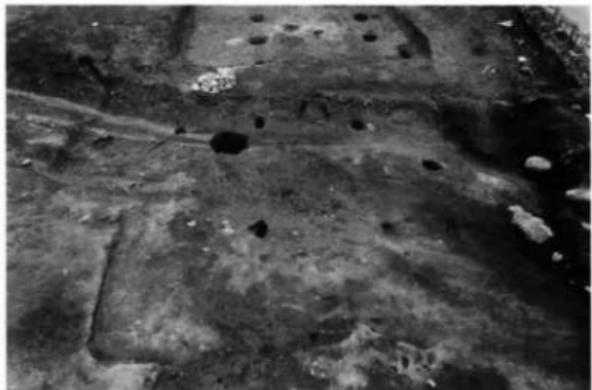


城下遺跡 6 号住居址



城下遺跡 6 号住居址柱穴

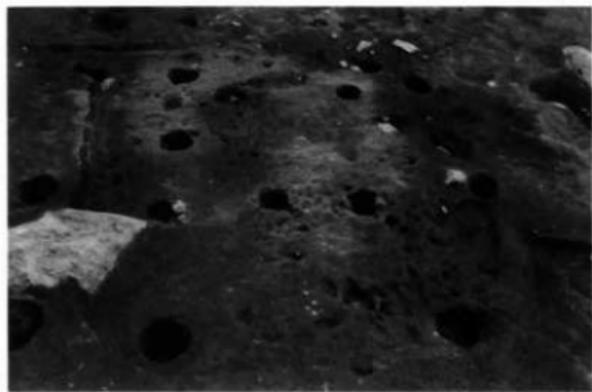
城下遺跡 7号住居址



城下遺跡 8号住居址



城下遺跡 9号住居址

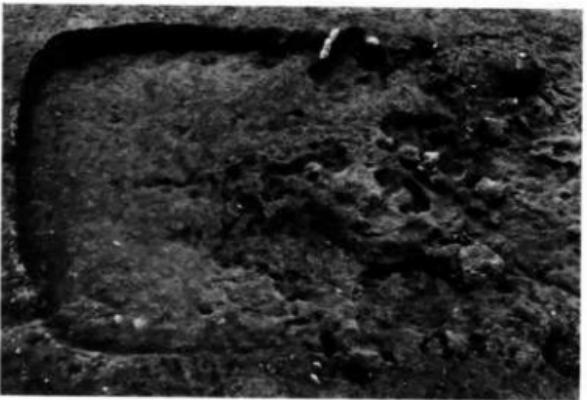




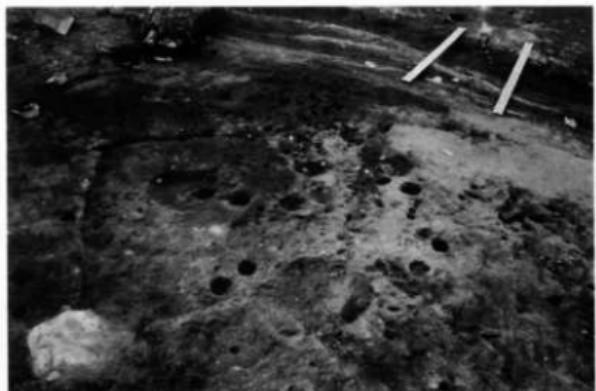
城下遺跡10号住居址



城下遺跡11号住居址



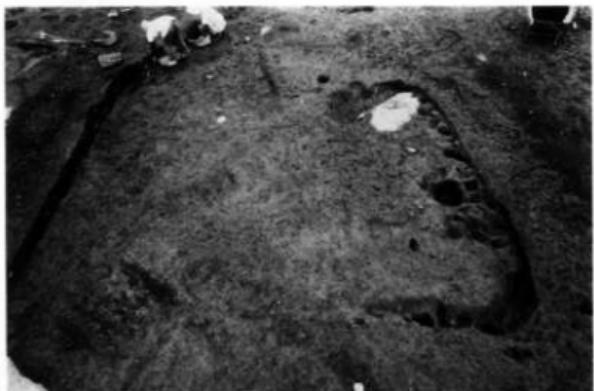
城下遺跡13号住居址



城下遺跡14号住居址



城下遺跡15号住居址



城下遺跡16号住居址



城下遺跡17号住居址



城下遺跡18号住居址



城下遺跡19号住居址



城下遺跡21号住居址



城下遺跡22号住居址



城下遺跡1号住居址日カマド



城下遺跡 4号住居址カマド



城下遺跡 5号住居址カマド



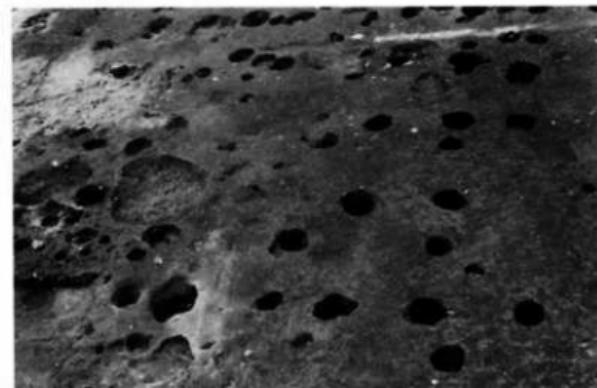
城下遺跡 10号住居址カマド



城下遺跡 1号建物



城下遺跡 7号建物



城下遺跡 4号建物



城下遺跡 6号建物



城下遺跡 1・2号溝



城下遺跡 1・2号溝



城下遺跡 5 号溝



城下遺跡土墳墓



城下遺跡 1 号埋甕



原田遺跡全景



原田遺跡試掘風景



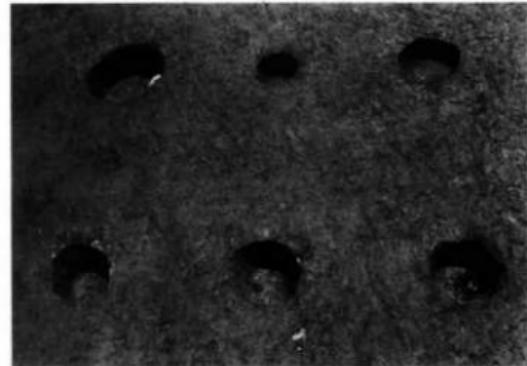
原田遺跡作業風景



原田遺跡 4 号住居址



原田遺跡 5 号住居址



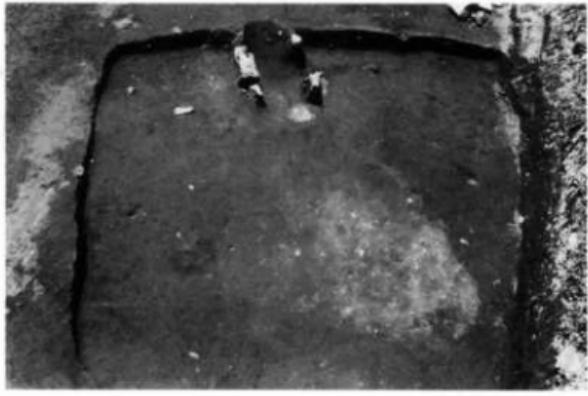
原田遺跡 1 号建物



原田遺跡 1号住居址



原田遺跡 2号住居址



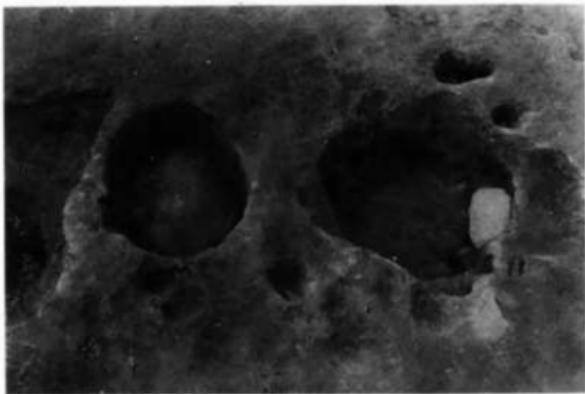
原田遺跡 3号住居址



原田遺跡 2号住居址カマド



原田遺跡 2号住居址カマド



原田遺跡13号土壤



1



2



3



4



5



6



7



8



9



10



11



12



13



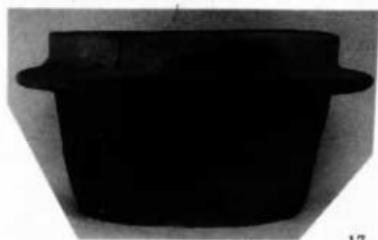
14



15



16



17

No. 1 ~17 城下 1 号住居出土遺物



1



2



3



4



5



6



7



8



9



10



11



12



14



15



13



16



18



17

No. 1 ~ 5 8号住
No. 6 9号住
No. 7 ~ 9 13号住
No. 10 ~ 12 14号住

No.13 15号住
No.14 ~ 18 17号住
No.19 18号住



1



2



3



4



5



6



7



8



9



10



11



12



13



14



15



16



17



18



19

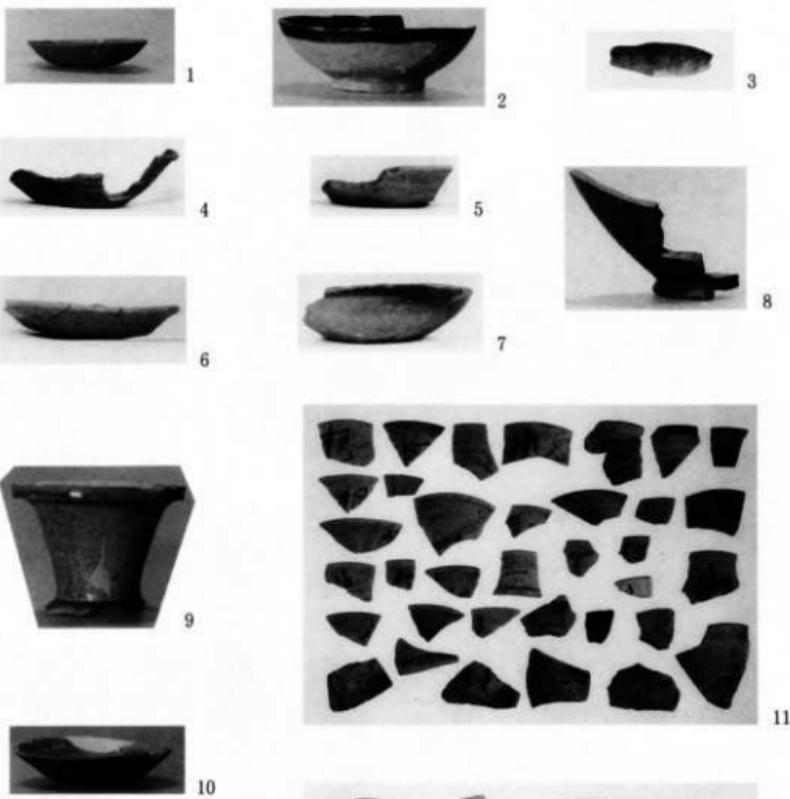


20



21

No. 1 3号住、No. 2～3 4号住、No. 4～6 5号住、No. 7～21 6号住



No 1 ~ 3 19号住

No 4 ~ 8 20号住

No 9 21号住

No 10 22号住

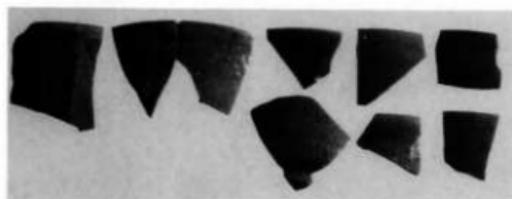
No.11~12 墓書



1



2



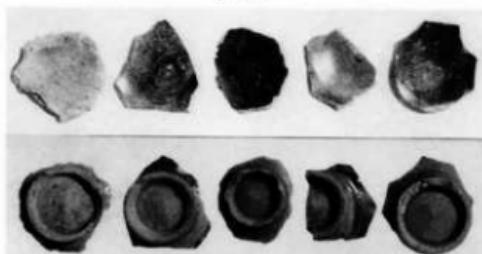
6. 7. 8



3. 4. 5



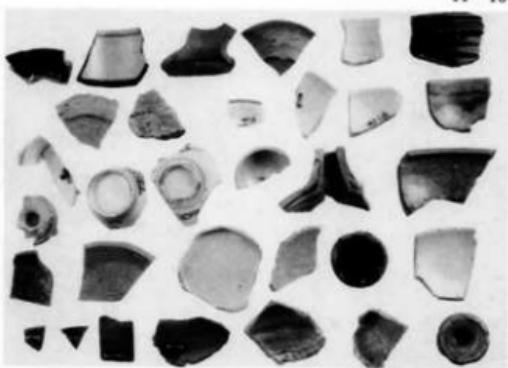
9



11~15

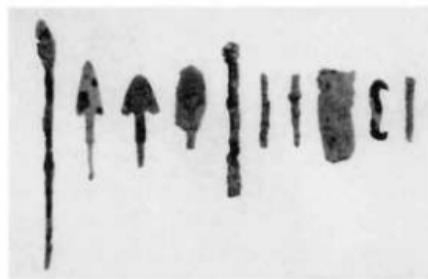


10



16

No. 1 ~ 5. 16 陶磁器
No. 6 ~ 16 陶磁器



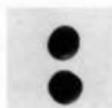
1



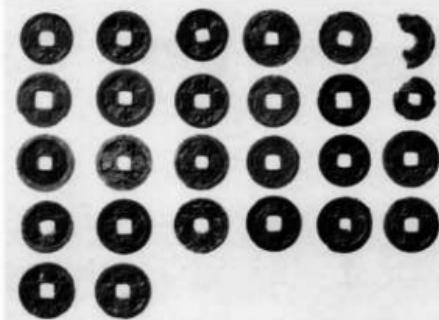
2



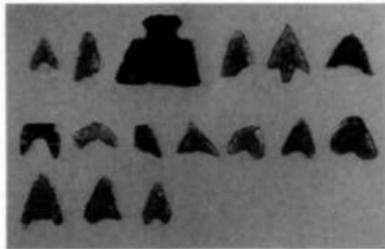
3



4



5



6



7

図1～4 金属・土製品 (P62.55) 図5 古銭 (P65) 図6～7 繩文時代出土遺物 (P50)



1



2



3



4



5



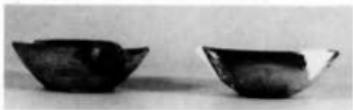
6

7

8

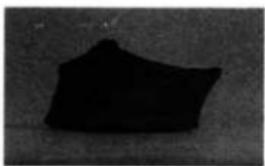


9



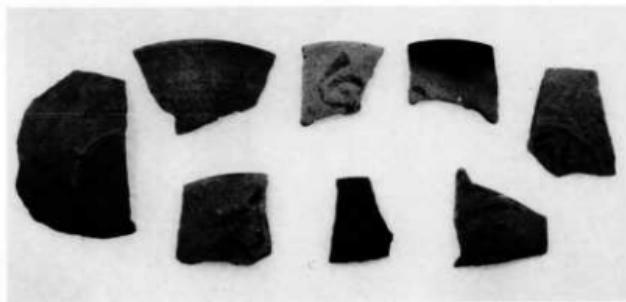
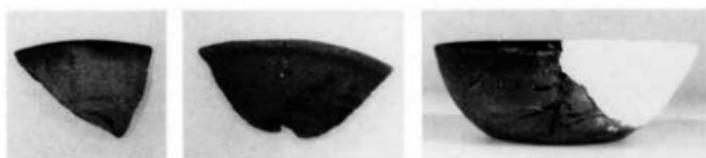
10

11



12

No.1 原田1号住、No.2～5 2号住、No.6～9 3号住、No.10～12 表採・2グリット、8トレ



原田遺跡出土墨書土器

山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第58集

城下・原田遺跡

印刷 1990年3月25日

発行 1990年3月30日

編集 山梨県埋蔵文化財センター

発行 山梨県教育委員会

印刷 ヨネヤ印刷

